
JUSTICE BOY

imaiwa

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

JUSTICE BOY

【Zコード】

N4511E

【作者名】

imaiwa

【あらすじ】

正義の男剣人が世の中の悪を斬る。そんな剣人の波乱万丈な物語。

序章（前書き）

はじめてのファンタジー小説で、かなり未知の領域です。
更新も適当になると思うし、内容も行き当たりばつたりなので
どういう展開になるかも作者もわかりません。つまらない作品にな
るかもしれません
適当に生温く見てもらえると助かります。

序章

「俺は俺の正義を貫く!」 「きにいならぬ奴は容赦しねえ」
そう青年は口にだすと、自分の部屋のサンドバッグを叩きまくる。
「ドン、ドン、ドン」 部屋の中に鈍い音がこだまする。
彼の名前は斎藤剣人、都内に住むごく普通の高校生である。
サンドバッグを無心で叩きまくる剣人は少し疲れてきたのか
だんだんそのサンドバッグを叩く速度が、スロー・テンポになつてい
く。

そして、その動きがピタッと止まつた。

「ちっ」と彼は言つと、自分の部屋をでて1階の台所へ向かつた。
彼は台所にある冷蔵庫を開けると、スポーツドリンクを取り出し
蓋をあける。「ゴク、ゴク、ゴク」「ブハー」一気にドリンクを飲
み干した。

するとまた、階段を上り2階の部屋の自室へ戻る。

「ドカッ」と言つ音を立てて彼はベッドに寝転がつた。
手は頭に組まれている。

(俺は俺の正義を貫きてー・どんな悪者もゆるさねえ・・だが、力
が足りねえ・・)

彼はそう心の中でつぶやく。「あの時、俺に力をえあれば・・」と
唇をかみ締めながら

言つた。

時間を今日の朝にまで遡る。

日が昇り太陽の日差しが、カーテンの隙間から彼のまぶたに直射し
た。

そのまましさに日が覚めたのか、「朝か・」とつぶやくと、剣人は
ガバつと

勢い良く起き上がる。「うーねみい、かつたりい・・」と言つと

またベッドにゅうくり沈んでいく。

トントントントン

誰かが階段を上がつてくる音がする。

「コンコンー」

「バタツ！」と大きな音がするとドアが勢い良く開く。

剣人は体を一瞬びくつかせた。

「剣人ーーー！」もう朝よ、学校行く時間でしょーーーさつむと起きなーーー！」

母祥子が起こしにきたのだ。

「母さんは今から仕事に出かけるから、ちゃんと学校いくんだよーーーいいね！」

「わーーてるよーー」と面倒くさそうに剣人は言つと、むくつと起き上がり頭を搔いた。

「しゃーねーなーーー」

剣人はパジャマを脱ぎ捨て学生服に着替えた。

そして台所へ向かう。

台所にあるテーブルには、パンと、ベーコン、目玉焼きがラップをかけて置かれている。

剣人はそれを横目に洗面所へ向かつた。

水道の蛇口をひねると栓をし水をためた。

水がたまると、その中に顔をザバつとつける。

「つめて！」と剣人はいった。

顔を水中で手を使って良くなうと、さつと起き上がり、タオルで顔をぬぐう。

タオルで顔を拭きながら、剣人は正面にある自分の顔をぼーっとみつめた。

「今日も良い男だぜーーーフツ」

彼の頭は少し茶色に染められていた。

髪は寝癖でじりじり立っていた。少し髪の寝癖を整髪剤で整える。

「こんなもんか・・」

剣人は満足そうな顔をしている。きまつたらしい。

剣人の頭はもともと短髪のため、すぐ髪の癖はなあつた。

前のほうだけ少し上に吊り上げたかんじでまとまっている。

「フフーンフーン」

剣人は髪がきまつたせいか上機嫌である。

台所へ向かい、パンにベーコン、目玉焼きを重ねるようにしておくと挟み込みそのまま噛り付く。

「うめえ・」「モグモグ・・モグモグ・・ンクツ」

一瞬で朝食をたいらげた。

「ピンポーン」と玄関のチャイムの音が鳴り響く。

「ん?」

剣人は外の様子をインタホーンのモニターで確かめる。

そこには幼馴染の竹下雲が映っている。

雲の髪の色は黒色で、髪を肩までで伸ばし、自然に流していた。快活で可愛いかんじの女の子である。

モニターをオンになると

「雲、おは、もう行くから」と剣人は言った。

「うん、早くしてね、急いでね、3分遅れたら先いくからね!」

「しゃーねーなー・・」

そういうと、剣人は急いでトイレで用を足すと、少し小走りに玄関に向かつた。

「ふ〜、かつたりい・」

剣人は靴を履くと玄関を開けた。

「おはよう剣人!」

「あんたいつもトロイよ!」

「うつせーな〜・・そんな遅れてないだろ」

「それもそうねー。」

雲はそつと学校に向かい歩き始めた。

リーマンや学生が眠たそではあるが、忙しそうに会社や学校へ向かう姿が

あたこなにみえる

雪と鉢合ひで歩ひては力

「あらぬ……」
「…………」
昨日出でた英語の課題やったのか?」「

「おおー、さすが零様だ、後で俺にみせてくんない?」♪♪♪
「ううん、」

「またあんた宿題やつてないの? 何度曰よ~・・呆れ顔で零は言つと。カバンを『そぞろ』し始めた。

「仕方ないなあ・・・次は自分でやりなよ」

「は！」と言ふと剣人にハートを手渡す

「持つものべきは幼馴染だよな」と剣人は言った。

しばらくすると一人は学校に着いた。

門をくぐりぬけ構内に入つていつた。

「雪おはよー、今日も剣人君と一緒に登校かー、仲いいねー」
と巴が声を二人にかけた。

「おはよー、そんなんじゃなこよ、ただ家が近いから一緒になるだけだよー。」

零は少し恥ずかしそうに、しかし力強く言い切った。

木田巴は雲の親友である。

メガネをかけ、青色の掛かつた髪を背中の当たりまでを伸ばしていく少し清楚なイメージのある女の子である。三人とも同じ教室のクラスメートである。

3人は一緒に教室に入る。

「おはよー零ー！」

「おはよー」

「おはよー一巴」

各自の友達から挨拶がとぶ。

「おう、剣人、おはよ！」

そう剣人に挨拶したのは親友の高木である。

「よつ！」

「剣人、お前この間貸した漫画いつ返してくれるんだよ」

「あ、あーわりいあれまだ読んでる途中なんだよ、そのうち返すー。」

「ならいいよ、それよりさあ、今日体育柔道あんぜ」

「だるいよな・・」

「まじか、俺柔道着忘れたぞ・・」

「どうすつかなあ・・」

剣人はそう言うと、ため息をついた。

「斎藤君・・」

後ろから誰かが声をかけてきた。

クラスメートの田中俊也である。

彼は少し大人しい感じの色白のメガネをかけた男子である。

「斎藤君、俺ね、ちょっと体の調子悪いから、見学するんだ。
もしよかつたら、俺の柔道着貸すよ」

「おおおお、田中いいのかーすまん、マジ助かるー。」

剣人は調子よく答えた。

「うん、いいよ、授業終わったら、俺の机の上にでも置いてくれればいいからさ」

「田中お前つて言い奴だなあ・・」

そういうと剣人は田中にハグをした。

「キンコンカンコーン」

始業の鐘が構内に鳴り響く。

その鐘の音を聞いても、みんな思い思いに好きなことをしている。
しばらくすると、「ガララ～」と教室のドアが開いた。

みんな焦つたように、各々が席へ戻りはじめた。

このクラスの担任鬼塚がやつてきたのだ。

鬼塚はこの学校で1・2位を争うほど、怖い先生である。

「お前ら～さつさと席につけ！」

鬼塚は怒鳴りたてた。

半そでに短パン、足はサンダル、背は高く手は毛深く足もすね気が
ぼ一ぼーと生え

眉毛もかなり太い。「リラに似ている。

「よし！じゃあホームルームを始めるな」

「出席とするから、大きい声で答える」

鬼塚点呼をとり始めた。

「太田～、井上～・・・」

次々と名前をよんでいく。

「竹下～」と零もよばれる。

「はい！」と零は快活に答える。

「斎藤～！」

「ほい！」

剣人がそう言つと、鬼塚は「ほいじゃねーだろ、はいと言え！」

「挨拶もできんのか、こら」

剣人に怒鳴りつけた。

「すみませんでした、はい！」

剣人は言いなおした。。

「ちつ」と鬼塚は舌づちをする。

「上田～」「高下～」

「田中～」

「はい・・・」

田中はぼそつと答える。

「田中～お前めしくつとるんか～
「もつと大きな声ださんか！」

鬼塚がまくしたてる。

すこし泣きそうな顔で田中は「はい、（ぐす」と答える。

「ああ、もういい、泣くなよな」と鬼塚は少し罰が悪そりに言つた。
「クスクス」と笑い声があちらこちらから聞こえる。

「じゃあお前ら～今日は3限は体育だ、男子はまた俺と体育の授業
でありますことになるな

柔道をするから、体育館に集合するように一時間遅れないように
な！」

そう言つと鬼塚は教室を後にした。

「今日柔道か、鬼塚とまた顔あわすのか、鬱だな・・・」と男子生徒
の一人が言つた。

1限は英語だった。

「キリーツ、レイイ！着席」

その声で生徒達は立ち上がり礼をし、またイスに座る。

英語の教師は赤木薫、女教師である。

髪は黒髪でソバージュがかかつていて、白いブラウスに黒いスカートをはいている。

「みんな、宿題やつてきましたか～？」

「じゃあ集めます」

「後ろから回して、前の子に渡して言つてね」と赤木はみんなに言つた。

剣人も学校へきて、すぐに零のを丸写ししたノートを前に渡した。

「よし、みんなちゃんとやつてきているようね

「さあ授業始めますね、えーっと先週は・・・」

「this is」

赤木は授業を進行しあげる。

授業が始まると剣人は（さてと、寝るか・・・）と心でつぶやくと

英語の本を立てて、枕代わりに筆箱をあごの下に置き、鉛筆を持った格好で寝始めた。

目が覚めると英語の授業はすでに終わっていて、次の古典の先生が着ていた。

「キリーツレイ、着席」

その声にあわせて剣人はふらふらっとたちあがりまた座つた。
(かつたりい・・・) (また寝るか・・)

剣人はまた眠りについた。

2限の授業も終り、休み時間を迎えていたが、剣人はまだ寝ていた。
「剣人！もうすぐ3限よ！男子は柔道でしょー体育館に早く行きなさいよ！」と零が怒鳴る。

「うーん、もう朝か、母ちゃんもう少し寝かせてくれよ・・・」
と剣人はブツブツ言つている。

どうやら家で寝てるのと勘違いしているようだ。

「剣人ここは学校よ！しつかりしなさい！」と零は言つと
「ペシッ」と剣人の頭をはたいた。

「いつてえええ

「あれ・・・・・

剣人はやつと田を覚まし、現状を把握した。

急いで田中に借りた柔道着を持つと、男子の着替え部屋に向かった。

みんなはすでに着替えが終わっていた。

「剣人遅いな」もうすぐ授業はじまるぜ

急がないとやべーぞ、何せ鬼塚だからな、遅れるといつこいつ田にあ
うやら・・

そう言って、高木が剣人を脅す。

「確かにやべー・・・速攻着替える」

剣人はそう言つと、急いで着替え始めた。

着替え終わると、高木や他の友達と剣人は体育館にやつてきた。入り口につくと、ほぼ同時に「キンコンカンコーン」と3限の授業の開始の鐘がなつた。

「ギリギリセーフだな・・・」と剣人は言つた。

体育館に入ると、ジャージ姿で隅に座つている田中の姿がみえた。その隣には頭が金髪の佐伯文也とその佐伯の友達4人が座つていた。生徒達は好き好きに友達としゃべつたり、畳の上で受身を取つたりして遊んでいた。

和やかな雰囲気が体育館を包んでいるが、間もなくしてその雰囲気は一変した。

鬼塚がやつてきたのである。

「よーしおまえら、授業始めるぞ!」

「とりあえず一人ずつ組め!」

「今日はその二人組で試合してもらひつぞ」と鬼塚は言つた。

「ええええーー」と男子生徒がそれを聞いてざわめいた。

「いきなり試合かよ・・・」と剣人は言つた。「だよなーきついな」と高木も同調した。

周りの生徒も似たような気持ちであつた。

「お前らーちゃんと真面目に試合しろよ、これは点数に反映されるからな」と鬼塚が言つた。

それを聞いた生徒達は少しやる気がでたようだ。

「よーし・仕方ない・・俺の実力をみせるまでだ・・」

剣人は静かに高木に闘志を燃やす。

「あはは・・お手やらわかに頼むよ・・剣人」

高木は少し不安そうに半笑いを浮かべている。

剣人は運動能力は抜群で、スポーツには自信があつた。

当然体育も得意としていたが、柔道はド素人であつた。

試合が始まると、剣人は欠伸をしながらぼーっと他の生徒の試合を

みつめる。

それと対象的に高木は真剣に試合を見ていた。
どんどん他の生徒が試合をこなしていった。

しばらくすると、「次ー！高木と斎藤！」と鬼塚が言った。
それを聞いて高木はびくつとした。

「来る時が来たか」と高木は落胆氣味に言った。

「うしー！」

一声言うと剣人は立ち上がる。

「はー自信ないな・・」

そう言いながら、高木は向こう側に猫背氣味に歩いていった。

「礼！」と鬼塚が言つと、一人は向かい合つて軽くお辞儀をした。

「はじめ！」

「うおおおおおおおお

剣人は声をあげると、高木に掴みかかった。

高木も剣人の肩を掴んで抵抗する。

「おりやあああーー！」

剣人が声をあらげた瞬間

高木は空中を舞つてゐのを感じた。

「ビタンーー！」

すごい音が体育館に響き渡つた。

「一本！」と鬼塚は言った。高木は天井見ながらボー然としている。

周りから「すげえええーー」と声が聞こえる。

「それまでーー！」

鬼塚のその声を聞くと、高木は我に返り立ち上がつた。

「よし、良い一本背負いだつたな、斎藤なかなかやるな」と鬼塚は言つた。

「ええ、この日のために激しい特訓をしてきましたから」

剣人は調子よくそう言つた。

「ほお」と鬼塚歯少し目を細めて言つた。

無論それは嘘である。

前に柔道の本をチラツと見たのを思い出して、真似ただけであった。

試合はその後も続いていたが、試合が終わつた剣人は暇そうにしてた。

少し眠気もきていた。

「キンコンカンコーン」

授業の終りを告げる鐘が聞こえる。

「よしそれまでー！」と鬼塚は皆に言った。

「じゃあ今日の授業はこれまで」

「次回はサッカーやるから楽しみにしてろ」

「解散！」

鬼塚はそう言うと、体育館を出て行つた。

剣人は、綺麗な一本背負いを決められたのが嬉しかったのか、上機嫌である。

「剣人強いな」と高木は言った。

「ほんとだよな、剣人まじすごいよ」と他の友達も口々に言つ。

「それほどでもねーよ！」

剣人は少し浮かれていた。

着替えが終わると

「じゃあ後で」と剣人は高木にいうと、「おう」と高木は答えた。そして剣人は自分の教室に戻つていった。

「えーっと田中はー」

教室をきょろきょろして見渡す。

「いないな・仕方ない」

剣人はそうつぶやくと、借りた柔道着を田中の席の上に置いた。

そして、少し田中に礼が言いたくて、構内を散策してみることにした。

「いないなあ・取りあえずトイレにいくか」

1階のトイレに足を運ぶ

ドアを開けようとすると、中から田中の声が聞こえてきた。

「田中～」

剣人は声を掛けようとドアを開けると

そこには田中と佐伯そしてその仲間4人がいた。

「ん？」と佐伯は言つと、「何しにきたんだ？あ？」と剣人に威圧的なおもむちで言つてきた。

「いや、俺その田中にさ。柔道着の礼を言おうとした所

「礼だ！」？こいつにか？ウハハハ

佐伯は憎たらしい顔で笑つた。

佐伯の仲間も「ヒヒヒヒ」とせせら笑つ。

田中の顔を良く見るとなんか殴られたあざのようなものが出来ている。

それを見て、「あんた等何してるんだ？」と剣人は少し怒りをあらわにして言つた。

「みてわかんねー？田中と遊んでるんだよ」と佐伯が言つ。

「そうだよなー？みんな

「そつそつ

佐伯に同調するように仲間も笑いながら頷いた。

「俺には田中が楽しそうには見えないんだが・

それを聞くと、佐伯の顔が鬼のような形相に変わつて言つた。

「ああ？」じちゃじちゃうるせーんだよ、そうだよ、遊んでるじやねーよ

田中をいじめてるんだよ、それがどうした？文句あるのか？あ？」

佐伯は開きなおり剣人を威圧してくる。

「文句あるにきまつてるだろ――――――」

剣人は佐伯に飛び掛つた。

「ドカツ」と右ストレートが佐伯の右頬に炸裂する。
「ぐはつー」と声をあげ佐伯は壁に倒れこんだ。

「コラアなにしやがんだ」

他の4人が剣人に襲い掛かる。

「羽交い絞めにしてフクロにしろ」と佐伯が言つと、一人が剣人の右腕と左腕を抑え、

右腕と左腕を抑え、

佐伯が剣人の腹にパンチを数回当てる。「ぐふ」と剣人は言った。

その後は殴る蹴るの一方的な展開になつた。

田中はただおひえながら、その間片隅に縮こまつていた。

地面に倒れこむ。

「ハハハハハ、ざまあねーな」

佐伯はそういう残すと、ト

田中は地面に伏す剣人に駆け寄る。

めぐねに・・俺の

「おまえのやこじやねーか・か・」

剣人は軽く微笑みながら言った。

歪んでいた。

「くそ・・・俺にもう少し力があれば・・・あいつらなんか・・・」

卷之三

剣人は消え入るような声でそういうと、眠るかのようにゆっくり、

まぶたを閉じていつた。

呼びかける。

「・・・・・」剣人の返事は返つてこなかつた。

「誰かきてー！誰か~~~~~」田中君がドアを開けた。

大声で助けを求めた。

胎動（前書き）

時々修正いれることがあります。

剣人は夢を見ていた。

剣人はどこかの川の前に佇んでいた。

川には濃い霧がかかっており、かなり視界が悪く向こう岸の影がかろうじて、ぼーっとみえる程度だ。

「ん？」「ここはどこだ・？川のようではあるが・・・

足元を剣人が見ると

地面には土や砂利や雑草そして、無数のタンポポが生えていた。

「この景色・・何かで・・・」「んー」「うーーん・・・」「・・・・・

」剣人は何かひつかかるのか、必死に何かを思い出そうとしていた。

「！」「まさか・・・」と剣人は言った。

「もしや・・これは・良くテレビの心霊特集とかで出てくる、三途の川つて奴か？」

「ふ・・・まさかな・・・」剣人は動搖は隠せない。

しばらくすると、向こう岸から、どこかで聞いた事がある声がしてきた。

「剣人♪・・・」「まだこっちにくるのは70年早すぎるぞ～・・・

」とその声の主は言った。

「うん？なんか聞いた事あるな～・・・

「！？・・・あれ・・・この声って3年前に死んだじつちゃんの声じゃ・・・」

そう言うと、剣人は背筋に冷たい物が走った。

「ちょ・・・俺・・まさか・・死んだんじや・・・？」

剣人は目を白黒させている。

「確か、佐伯達に俺ボツコボツコにやられたけど、死ぬほどじやないよな・・・

「まさか、脳内出血でも起こしたのかな・・いやいや・・内臓破裂・

・？いやいや……ガン？・・・」と剣人は死因を考えながら、ぶつぶつ言っている。

しばらくすると、剣人は背後に何かの気配を感じた。

「剣人！・・・」

真後ろから不気味な声がする。

「じ、じっちゃん！まだ俺はそっちへ行くつもりはねえ！」と剣人は言った。

剣人の肩を祖父らしき手が掴んだ。

その瞬間・・・

「へへへ」

「おりやああああああ」と剣人は反射的にその手を獲り一本背負いの体勢に入っていた。

その手の持ち主は川原の地面に強烈に叩きつけられた。

「や・・やつちまつた・・つい反射的に・・・」と剣人は言った。

「アイタタタ・・・・」

「おんどうりや・・・年寄りになんばしょつとか！」と声の主は声をあらげてそう言った。

「ごめん、じっちゃん・！」と剣人は言うと

「わしはお前に気安くじっちゃんなどと言われたくないわー！」とその主は言うと

剣人に飛び掛り、顔面にパンチをいれてきた。強烈なパンチだ。

「うわあああ・・いつてえええ・・ぐは」

「何つう強烈なパンチだよ！・・・」

「この妖怪じじいい！・・・」

「いい・・・・・・・・・・・・」

「い・・・・・・・・・・・・」

「ん？」と剣人は言うと、どこかの天井を眺めていた。

「あれ？ここどこだ・・じっちゃんは・・・」

「俺確か、三途の川で・・・」

剣人は周りをきょろきょろ見渡した。

「ん？ ここどこかで・・・学校？ 保健室？」

剣人は顔を触つてみた。

「イタツ！」

顔にはガーゼが3つくらいテープで張られていた。

「この痛み・・・」

「もしかして・・・」

「さつきのは夢・・・」

「・・・」

やつと自分の状況を剣人は把握したのか

「・・・お、俺生きてる・・・！！！」

「よかつたー、俺が死ぬわけないよなー！ ははは夢か！」

剣人は立ち上がり、ベッドの上で喜びのあまり、小躍りし始める。その騒がしい音に気がついたのか、カーテンの向こうから誰かが近づいてきた。

「ジャラ～」

カーテンが開く音がする

「齊藤君、気がついた？」

そう声を掛けってきたのは、学校の保健の先生常盤ひなこである。長い黒髪にパチつとした大きな瞳保健医の白いつなぎを着ており、その下にクリーム色のブラウス、黒っぽいスカートがみえる。足はすらっと長く、スタイル抜群で美形の20代の女性である。

「齊藤君、大丈夫？ あなたトイレで倒れてたのよ、心配したわよ・」

「顔はあざだらけだし、出血も所々出てたし・・・」

そう言いながらも、ひなこは剣人を観察する。

「でも、元気そうね。立てるようだし」「よかつた～」

ひなこはそう言つと、少し顔が緩み優しい笑みを浮かべた。

「それにしても、その傷、ケンカでもしたのかな？」。

「いえ・勝手に転んで・・・」

剣人は下手な言い訳をする。

「ふーん・・・」

ひなこは疑いの目で剣人を見つめる。

「まあ、いつか

「とりあえず、目を覚ました事を担任の鬼塚先生に伝えるわね」

「ちょっと待つててね」

そう言い残すと、保健室を静かに出て行つた。

「ふー・・・」

剣人はそう深くため息をつくと。薄い布団を顔の辺りまでひっぱり、体を右向きにしてベッドに横になつた。

「ピンポンパンポーン」

「鬼塚先生、鬼塚先生、至急保健室まできてください・」

しばらくすると、ひなこ先生の声で鬼塚への呼び出しの放送が流れた。

「あいつがくるのか・・面倒くさいな・・はあ・・」

剣人はため息をついた。

数分後、ひなこが帰つて來た。

「ガラ~」

「斎藤君、もうすぐ先生くるからね、横になつてまつててね」
ひなこはそう剣人に言うと、机のイスに座り足を軽く組むと、ペンで何かを記帳はじめた。

「ガラガラ~!!」「ドカ」

しばらくすると、力任せに保健室のドアを開ける音がした。

「斎藤!!!!」「大丈夫か!!!!」

鬼塚の荒々しい野太い声が保健室に響き渡る。

「ジャラ！！」「おおここにいたか！」

「大丈夫か？」

「剣人…大丈夫？」「剣くん…」「斎藤君…」

(ん？この声は…)

(零！巴、田中もきたのか)

(・・・・・)

(仕方ないなあ…)

(寝たふり決め込もうと思つていたが、あいつ等が来たんじや…
そもそもいかないな…)

剣人は意を決したように起き上がつた。

「ん？みなさん、お揃いで…」

零は起き上がつた剣人をマジマジとみている。

田中と巴も心配そうに剣人を見つめる。

剣人はそんな三人を見て

「ほ、ほら…！大丈夫！余裕だぜ、心配ないよ、ほら！」

立ち上がり、右腕を軽く回し、ベッドの上で屈伸運動をはじめた。

「ふう…・・・

「よかつた！」

「ほんとによかつた…・・・

零は剣人の元気そうな姿を見て、安堵したようだ。

巴も笑顔がこぼれている。

田中はその二人とは対象的に泣きそうな顔をしていた。

「お！斎藤！元気そうだな…！あんまり心配かけるなよな！」と鬼塚が言つた。

「少し裂傷やアザがあるけれど、問題ないみたいですよ、鬼塚先生」

「そ、そうですか、ははは、剣人よかつたな！」

ひなこに声をかけられた鬼塚は少し顔を赤くしている。

(ははーん・鬼塚の野郎、ひなこ先生に…)

(しかし美女と野獣・・) 剣人は思つた。

「剣人！…あんたなにやつてたのよ」

「いや～・・別になんにも・・」

「何にもないわけないでしょ！」

「いやそれは・・」

剣人は零にどう言おうか迷つている。

「まあまあ、齊藤にもなんか事情があるんだろう、そのへんは担任の俺が後でじっくり聞いとくから」と鬼塚は言った。

「そうですか・・分かりました・・」

零は気持ちを抑えるように答えた。

「まあ、齊藤も元気そудだし、良かつたじやないか」。

「ああ、そうそう、剣人、あんたが出れなかつた授業のぶん私がコピーしといたよ！」

零は剣人にコピーした紙を渡した。

「おお、ありがと！零助かるわ」

「あんた感謝しなさいよ、田中君に！」

「田中君倒てるあんたをみつけて、助けを呼んでくれたのよ！」

田中は突然自分に話題を振られ少し、オタオタしている。

「そんなあ・・とんでもない・・僕が・・」

田中は真相をいいかけたが、剣人の目配せをみて、言葉をとめた。

しばらくすると、蛍の光の音楽が構内に流れ始める。

鬼塚はその音楽を耳にすると

「おお、もうこんな時間か・・」

「じゃあ、もう学校もそろそろ門を閉めるし、お前ら帰れ！」と鬼塚は3人に言った。

「そうですね・・私帰ります、巴もかえる！」

「そうだね・・じゃあ・剣人君、私も帰るね」

雪の呼びかけに巴はそう答えると、

二人とも先生にお辞儀をし、保健室を出て行つた。

「じゃあ僕も帰るね、また明日・・」

もじもじしながらも、田中も帰ることを剣人に告げた。

「おう、また明日！」

田中も先生達にお辞儀をすると部屋を出て行つた。

鬼塚は三人が出て行くのを確認すると、「ふう」とため息をついた。

しばらく沈黙したのち、真剣な顔で剣人みて言った。

「さてと、斎藤、俺になんかいうことあんだけ？」

「・・・・・」

剣人は黙つて目を下に向けている。

「あ、鬼塚先生、私ちょっと職員室へ行つて来ます」

「斎藤君の事宜しくお願ひします～」

「はい、ま、任せてください！～どうぞどうぞ～！」

ひなこの突然のその言葉に、鬼塚が少しどもりながら答えた。

ひなこ先生は鬼塚に笑顔で軽くお辞儀をすると、保健室を出て行つた。

「べ、別に、何にもないですよ・・」と剣人は言った。

「そうか？その顔の傷、誰かに殴られた後にしか見えんが」

鬼塚は少し息を吐くと、ベッドの横に保健室の予備のイスをもってきて、静かに座り剣人に語り始めた。

「俺はな・・」

「別にケンカが悪いとは思つてないぞ」

「ただ、どういういきさつでそうなったか知りたいだけだ」

鬼塚はいつになく、真剣な目で語り続ける。

「俺は、この1年担任としてお前を見てきて、少しはお前のこと理解してきてるつもりだ」

「お前は容易く、他人と殴り合いのケンカをする人間じゃないことも分かつてる」

鬼塚の話を剣人は静かに聞いている。

「そんなお前が、ケンカに踏み切つたきさつに興味があるんだよ」「どうだ？男同士だ、腹をわって話してみないか？ここだけの話で収めておくから、

安心して話してみろ」と鬼塚が言うと

「・・・・・じゃあ・・少し・」

剣人は鬼塚に今日トイレであつたこと
田中の事、佐伯のことを話し始めた。

「ふむ、なるほどな・」

「田中が苛められるのをみて、助けようと殴りかかっただけか」「そして返り討ちにあつたと・・」そう鬼塚がいうと、剣人は悔しそうに拳を握る。

「お前なんで負けたんだと思う？」と鬼塚が剣人に聞いてきた。

「そりやあ・・相手のほうが数おおいし・・」

「それは違うな・・」

「ただ、お前がそいつらより弱かつただけだ」と鬼塚は言い切る。

剣人はそれを聞いて、納得いかない様子だ。

「え？あいつら5人いたんですよ、負けても仕方ないじゃないですか！」

「俺もタイマンならあんな奴等に・・」剣人は唇をかみ締めながら言つた。

鬼塚は静かに語り続ける。

「それでも、お前が弱いから負けたんだよ」

「数も強さのうちだ、その数の強さの前に、お前は完膚なきまでに負けたんだよ」

「お前は弱いのに、自ら負け戦に飛び込んでいつたんだよ」

「そして・・・」と鬼塚は言うと、剣人を厳しい目で見つめた。

「その誰かを助けようと挑んだケンカに負けた。その後

その誰かはどうなる・・・・?」

それを聞いて、剣人は少しはつとした。

「誰かのためにケンカをするのなら、絶対に勝たなければならぬ

！」

「俺はそう思つてるよ」と鬼塚は静かに言い放つた。

剣人は静かに俯いて色々考えていた。

その剣人の様子を鬼塚は見て

「ま、まあ・・あれだ・・俺も偉そうなこといつたが、ケンカで負けることも

何回もあつたし、あんまり気にすんな」

（鬼塚でも負けることがあるのか・・）

「あんまり佐伯達がひつこいよつなら、俺があいつ等二つほどく叱つてやるよ」

「俺の強さはこの腕力とそして担任という地位だ！」

「奴等には絶対負けないだろ、アハハハ」

（そりや・・あんた・・あたりまえじゃん・・）

剣人は呆れ顔で鬼塚を見た。

「そういえば、お前、今部活何にもしてないよな？」と鬼塚はきりだしてきた。

「はい、そうです」と剣人は答える。

「あれだけの運動センスあるのに、もつたいよな～」

「実はな、俺んち柔道教室やつてるんだよ、最近門人減つててなあ・

・

「学校の柔道部もいいけど、俺のところはすごいぞ、強くなれる事間違いない」

「お前も力持て余してそつだし、なんなら、一回覗いてみないか？」

「心身共に強くなれるぞ。まあお前の気分次第だがな」

鬼塚はそう言つと、おもむろにポケットから、くしゃくしゃの紙を取り出す。

「ほら、これだよ」鬼塚はその紙を剣人に手渡す（なんだこれ・・鼻紙かよ・・）

剣人はその紙を引き伸ばしました。

鬼塚柔道道場

「おねーさん！最近お腹はたるんでいませんか？」

telxxx
住所・

剣人のその紙を呆然として眺める。

(そりや・・門人減るわな・・てかこれで来る奴つて・)

1

卷之三

第一回 あらわすは、第三回の續篇である。

「新古今圖書集成」卷之三十一

二〇

「じゃあ話は以上だ」

「長々と話してすまなかつたな、もう日も暮れかかつてゐし

お前も帰れ、なんなら俺がうちまで送りに来らうか？」

… し え し え し え し え 大丈夫です ヒンヒンしてま

平気です！

剣人は少し焦りながら靴を履き、ベッドから立ち上がり、保健室の出口へ向かうと、鬼塚の方を向くと

「先生、今日は色々」迷惑おかけました。ありがとうございました」といいました。

「そう言つと鬼塚にお辞儀をし、足早に保健室をでた。

剣人は息を切らせながら、全力疾走で校門まで走った。

門まで来ると、足を止め、後ろに誰もいない事を確認すると
「フハー・・・冗談じやねえ・・・あいつに付き添われて家に帰ると
か勘弁・・・」

額は汗びっしょりである。

剣人は帰宅すると「ただいま・・・」と少し疲れた様子で言った。
家には明かりがついておらず、無人のようだ。

「母さんまだ帰つてきてないみたいだな・・・」

玄関で靴を脱ぎ、階段を上がつていった。

そして自分の部屋のドアを開け、電気をつけた。

明かりは部屋全体を照らした。

8畳の部屋には、液晶TV、机、テーブル、ベッド、下が固定され
ていて、上へ伸びるかんじの

簡易サンドバッグ、ノートパソコンなどが所狭しと置かれている。

剣人は携帯を開き、メールをチェックし始めた。

メッセージが3件入っていた。一つずつ剣人はチェックし始める。

高木：「剣人大丈夫か？俺体育の後調子悪くなつてな

早退しちまつたんだよ、お前倒れてたんだつてな、後で友達から聞
いてびっくりしたよ

帰つたら、電話くれよ（・・・）

（後で電話かけるか・・・）

どつかの宣伝メール

（なんだこれ、うざいな、見るまでもない、削除！）

雫：「とりあえず帰つたらメールください。
(仕方ないな・・・送つとくか)

剣人：「今帰つたよ、今日は遅くまでありがとな、そのうちなんか

礼するよ」

「まあこんなもんか・・・」と剣人は言つと、零に送信した。

「次は・・高木に電話しとくか・・」

携帯を打ち始めた

「 9 × × 2 × 6 つと・・・」

「プルルル」「プルルル」「カチヤ」高木が電話に出た。

「お、剣人か、大丈夫か?びっくりしたよ」

「いやーわりいわりい、ちょっと色々あつたんだよ、大丈夫!元気だよ!」

「まあ詳しい事はまた学校で明日話すから」

「そつかそつか、まあ元気そうだし、よかつた!じゃあ明日また学校でな」

「おう、また明日!」「ツー」

剣人は疲れていたので短めに電話は終わらせた。

「ふう・・疲れた」と剣人は言つと、ベッドに仰向けに寝転がつた。

「なんか色々あつたな・・」

剣人は目を閉じ、頭の中で今日有つた事を回想し始めた。

「・・・・・・・・・・・・」

「くそつ!」

突然、剣人はそういうと立ち上がり、上着を脱いで壁にかけるとサンドバッグに近寄り叩き始めた。

「ドン、ドン、ドン、ドン」乾いた音が部屋に響き渡る。

(俺がもう少し強ければ・・5人くらい・・)

(俺は俺の正義をつらぬいた・・が・力が・足りなかつた・・・・・・・・)

一心不乱にサンドバッグを叩き続いている。

(しかし、鬼塚のやろう無茶言つてくれやがる・・・)

(まあ・アソツのいい分も一理あるけど・・・)

(うーん・・・・)

(そういえば、あいつんち柔道道場やつてるつて言つてたな・・・)
(しかしまともに教えれるのか・・・あの紙みるとな・・・・)

(でも、柔道でもやれば・・相手が5人とかでも勝てるんかな・・・)

(うーん・・・・)

(・・・でも別に柔道じゃなくても・・・空手とか・・テコンド
ーとか・・合気道とか・・

斗 拳とか・・・)

(・・・・・・・)

剣人は色々頭の中で考えながら、サンドバッグを叩く。
しかし、だんだん、手が重くなつてきたのか
サンドバッグを叩く手を止めた。

「ああ・・ごちゃごちゃ考へても仕方ないわ!-!」と剣人は頭を両手でゴシゴシ搔くと

台所へ向かい、冷蔵庫を開けドリンクを取ると、一気にぐぐぐぐ飲み干した。

「ピンポーン・・」チャイムの音がする。

(ん?母さん、帰つて來たか、ああ、腹減つたな・・・)と剣人は思
うと

一応インター ホーンの画面で外を確かめる。
画面を見ると、そこには雲が立つていた。

「あれ、雲・・なんだ今頃・?」

剣人はホンをオンにした。

「ん?雲、どうした?」

「こんばんわ、剣人、大丈夫?」

「おう、大丈夫だ、なんか用か?」

「あのさ、ちょっと肉じゃが作りすぎで、余っちゃってね・」

「お母さんが剣人にもつていつてあげたらつていうから、持つてき
たんだけど・・・」

零の家は剣人の家から左に三軒目である。

剣人は肉じゃがの文字を聞いて、唾が口にたまるのを感じた。

「おおおお、そつか、ありがとな、じゃあ・中はいる？」

「うーん・・じゃあ少し」と零は答えた。

剣人はホンを切ると、玄関へ向かいドアを開けた。

「零すまねーな、じゃあ・中はいって」

「うん、じゃあ、お邪魔しまーす」

そう言うと零は玄関に入つていつた。

「台所きてくれる?」

剣人は言うと、先に台所のほうへ向かつ

零も後ろからついていく。

「ちょっと待つてくれな！」

剣人はそういうと、少し乱雑になつている台所を片付け始めた。

零はその様子を静かに見ている。

「よし、このイスに座つてくれ」

「うん、ありがと、はいこれ！」

零はそう言うと、ベージュの布に包んで持つてきた肉じゃがを剣人に手渡した。

剣人は布を静かに取り去り、中のラップに包まれた肉じゃがを見る。

「おお、これが肉じゃがというものか！なんて旨そうなんだ！」

「あはは、剣人の口に合うか分かんないけど、たぶん美味しいはずよ！」

剣人は丁寧に隙間なく包まれたラップを外し、肉じゃがをテーブルに置いた。

「いつただきまーーす！」と剣人はいうとガツガツ食べ始めた。

「んまっくんく、ごく、零！お前料理うめーな！」

「あたりまえよー！」

零は剣人がとても美味しそうに食べてるのを、微笑みを浮かべ見つめている。

「あーうまかつた。最高！」

剣人は全部食べてしまった。

「零、ありがとう」

「うん！」

剣人が爪楊枝を使って歯を掃除している。

零はさつきまでの笑顔は消え、テーブルを静かにみつめている。

剣人はその様子を見て

「ん？ 零どうした？」

「別に何にも？」

「何にもないんだけど・・ちょっと気になつて・・」

零は少し言いにくそうにしている。

「剣人さあ・・今日なにがあつたの・・？」

「ん？別に・・？」

剣人は少しばらかすように言った。

零は思い切つて聞いてみる。

「剣人・・苛められたんじやないよね・・？」

剣人は零の意外な言葉に気後れした。

「はあ・・？？俺がか・・？？そんなわけねーよ！」

「な・・なんだ・零そんな事気にしてたのか・・！アハハハ！！」

剣人が笑っているのをみて零はムッとした。

「な・な・何よ！？これでも心配してたんだからね！」

「ああわりいわりい！でも、俺が苛められるはずないだろ？俺だぞ？俺様だぞ！」

「はあ・・心配して損した・・」

零は気が抜けた様子で息をふくつと吐いた。

「なんだ・・やっぱりそうよね・そんな事あるわけないか・・」

零は自分に言い聞かせるよう言った。

零は少し安堵したのか、力が抜けた感じで立ち上がる。

「ふー・じゃあ、剣人、私帰るね」

「ちょいまちな！」

剣人はそう言つと、急いで弁当を丁寧に洗い蓋をし布で包み零に手渡すと

「ほんとありがとな・正直いうと、少し落ちこんでたんだ」「でも零と話してたら、元気になつたよ、ありがとな！」

剣人のその意外な言葉に零は少し顔を赤くした。

「そつか・・・よかつた・」

剣人は零を玄関まで見送る

「じゃあな！」

「うん」

「じゃ、お邪魔しました」

「おやすみ～また明日」

零は自分の家へ帰つていった。

剣人はその夜、ベッドに横になり悩んでた。

(やつぱ悔しいぜ・・・)

(俺が例えどんなに武道や何か学んだとしても・・・
やつぱり一人じゅ・・・数の強さには勝てねえ・・・・・・)
(くそ・・・・)

(相手がすぐ一ムカツク奴でも俺は勝てないのかよ・・・)
(それが、世の中の道理つていうんなら、おかしいぜ・・・)
(俺は俺の正義をつらぬきてえ・・・でも力が足りねえ・・)
(どうすりやいいんだよ・・・)

(くそ・・・くそ・・・くそー・・・)

剣人はいつになく頭は混乱していた。
自分の非力さに絶望さえしていた。

(〜〜〜〜〜〜〜)

(ああ・・むかつく・・・もう寝るか・・・)

剣人はいつの間にか深い眠りについた。

深夜2時、草木も眠る丑三つ時。

外は静まり返り、人通りがない。

風はざわめき、月は怪しい光を雲の間から差し込む。

剣人はぐっすり寝ていた。

その様子を暗闇から見ているのがいた。

闇の深淵から湧き出たその謎の物体は、剣人の寝姿をみつめていた。その黒い物体は、剣人にじり寄る。

そして、ベッドをつたい、剣人の足元までくると足に被さる。

その物体は伸縮を繰り返しながらも大きくなり。

とうとう剣人の全身を覆い尽くした。

(ん)・・・・

剣人は苦しそうに寝言のような言葉を発した。

その謎の物体は、剣人の口から静かに体内へ侵入していった。

「ふあ～ふ・・・」 雲は目が覚めると大きな欠伸をした。

カーテンの隙間から、日差しが差し込んでいる。

静かに上半身だけ起き上ると、左の鏡台の棚に置いている時計を体を少しねじって見る。

時計はAM 6:50を映し出していた。

雲はそれを目にすると、ベッドから這い出で

鏡台の前の椅子に座りブラシを手にすると、髪を軽く梳き始めた。

「ふー・・眠い・・・

「顔あらわなきや・・・

雲は静かに立ち上がり、自室のドアを開け、洗面所に向かった。

「バシヤ・

顔を軽く洗うと、タオルで水を拭きとり、洗面所の鏡を見ながらまた髪を梳き始める。

「おはよ～、雲」

雲の父守が起きてきた。

「おはよ～・・・

雲は少し眠そうに返事をする。

「おはよー」

しばらくすると、母敏子も起きてくれる。

それほど広くない洗面所は、3人くると、じつた返した状態になる。

零はそれを嫌つてか、また自室へすこし戻つていった。

零は制服に着替えると、台所へ向かつた。

台所の調理場には敏子が立つており

忙しそうにフライパンでベーコンと田玉焼きを焼いている。
トースターにはパンが3つ既に焼けていて、香ばしい匂いを漂わせていた。

「はい、パパ」

「はい、零」

敏子はそう言ひと、あらかじめテーブルに用意した更に順番に置いていった。

「ありがと、ママ」

「さんきゅーママ」

二人はそれぞれの席に座る。

敏子はダイエット中なのか、コーンフレークを持つと皿に移し、牛乳をかけ始めた。

守は食べ終えると、新聞を読み始めた。

敏子は食器の後片付けをはじめている。

そうしているうちに時間は過ぎ時計の針は7：50を刺していた。

「じりやいかん」

「じゃママ、零、会社に行つてくるね」

そう言つて、守はカバンを肩から提げる

「いつてらっしゃーい」

零は紅茶を皿に置くと、父に声をかけた。

「いつてきまーす」

父は玄関の方へ歩いていった。

それをみた敏子も一緒についていった。

零は時計が8時を刺すのを横目で見ると

自室に上がつていった。

カバンの中身を確認する。

「うん、完璧！」

玄関に向かうと靴を履き、立ち上がると

「ママいつてきまーす」

「いつてらつしゃーい」

敏子は雲を玄関から見送った。

「ピンポーン」

「ピンポーン」

雲は剣人の家のチャイムを押す。

「ピンポーン」

「あれ・・・」

「誰もいないのかな・・・」

しばらくすると、ドアが開く。

「おはよー剣人！」

雲が声をかける。

「・・・・・」

「おはよ・・・」

剣人はいつもより低調な声で答える。

「どうしたの？元気ないじゃん」

「別に・・・？」

そういうと剣人は、ドアに鍵をかけ、門を開けると雲を置いて、学校の方向へスタート歩き始めた。

それを見て剣人の横に駆け寄り、横目で剣人を観察する。

(剣人、どうしたんだろ・・いつもと何か違う・・調子悪いのかな・・)

(何か悪いもの食べたとか・・)

(まさか・・私の肉じゃがに・・・・)

(そ・・そんなわけないよね・・私も食べただけどなんにも・・)

(そうすると・やつぱり昨日の・・・)

雪は心配そうに剣人を見つめながら、色々原因を考えていた。

剣人は急に立ち止まつた。

「雪・・あんまりべたべたくつつくなよ・・・」

「！・・？」

「くつついでないわよ！、何いつてんのあんた！」

「そりか・・」

そう剣人は言つと、空ろな目でまた歩き始める。

(何～～～今の～～！？)

(何なの一体・・・)

(昨日あんなに・・・)

(どうしたんだろ・・・・機嫌悪いのかな・・・)

(うう・・・・・)

雪は少し混乱氣味である。

胎動その2

剣人と零は教室につくと、それぞれ自分の席に座った。

教室内は生徒たちが、友達同士でしゃべったり、走り回ったりして騒がしい。

零は剣人の方をじ～つと見ている。

剣人は右手で頬杖をつきながら、ぼーっとした様子で窓を見ている。

「零、おはよ！」

「零ー？」

「どうしたの？」

「ねえ、零つたら！」

（剣人どうしたんだろう・・・？）

（・・・・・・・・・・）

「ねーー！」

「あ・・・・」

零はやつと巴が自分に必死に声を掛けている事に気がついた。

「ごめん！おはよー！巴」

「どうしたのよ、零・」

「え？」

「なんか悩み事でもあるの？」

「別にないよ・・・・・」

「えーと、一限は化学かー・予習しないとねー！」

零はそう言つと、化学の教科書をパラパラめぐり始める。巴はその零の様子にいつもと違つものを感じていた。
（どうしたんだろ・・零・・・）

「ガララ～」

教室のドアを開け、誰かが入ってきた。

「佐伯よー、お前この間あの女に声かけてたよな～」

「おう、あいつのことか」

「実はもう別れたんだよ」

「ヒハハハ、どうせ振られたんだろ」

「ふられてやんの」

「違うつて、俺がふったんだよ！」

「アハハハ

「よく言うぜ！」

汚い口調で騒がしく教室に入ってきたのは、佐伯とその仲間だ。
佐伯は自分の席に座る。

その周りには友達4人がたつていた。

周りの生徒達は、少し緊張した様子で本をみたり、机に顔を伏せて
寝た振りをしている。

剣人は佐伯達が来ると、机の上に両手で握りこぶしをつくり
肩をいためていた。

「キンコンカンコーン」

教室の鐘が鳴る。

しばらくすると、鬼塚が教室に入ってきた。

「ガラ～！」

「きり～つ、れい！着席！」

「じゃあホームルームはじめるぞ！」

そう言うと鬼塚はいつものように点呼を獲り始めた。

「・・・井上～」「岸田～」

「・・・」

「斎藤～」

「斎藤～？」

「いないのか！？」

「あれ？ いるじゃねーか、返事しろ！」

剣人は呼ばれている事に気づいたのか

「はい・・・」と答える。

鬼塚少し首をかしげた。

点呼が終わった。

「今日は、得になんにもないが、みんな気をひきしめて授業受ける
ように

暑いからってだらけるなよ！以上！」

そう言つと、鬼塚は教室を後にした。

鬼塚がいなくなると、また教室に騒がしさが戻る。

「雲～今日、帰り一緒にケーキ食べに行かない？」

「いいとこみつけたんだ」

「美味しいケーキあるんだよ～」

「へ～うんいくいく～！」

「やつた～！」

雲は巴と会話をしながらも、ちらりと剣人の方をみた。
そこには剣人はいなかつた。

「あれ？」

「どこいつたんだろう？」

「巴剣人知らない？」

「剣人君？あれ～どこいつたんだろう」

雲は妙な胸騒ぎがしていた。

「俺たちになんか用か？」

佐伯とその仲間は剣人に呼び出され学校の屋上にいた。

「用・？別に・ただ昨日の借り返しておきたくてな・・・」

佐伯達はそれを聞くと、笑い始めた。

「なんだよ、昨日あんなけ痛い目にあつて、何かと思えば
それかよ！ヒヤハハハ」

「昨日分かつただろ？俺たちに関わるとどうこうあつか
「まだ殴られ足りないのか？」

「ふん！」剣人はそう言つとファイティングポーズをとる。

「なんだあ、俺たち5人とまたやるつもりか？」

「いいだろ、とことんやつてやるよ～！」

佐伯達は剣人を取り囲むと臨戦態勢に入つた。

「フクロにしろ！」

剣人を四方から襲う

卷之三

伊代は姫ノ内岡にたかる

剣人は佐伯の右ストロークを軽々避ける。しかし、かみこみアッパーをあご二二叩き入る。

「あぐ」

佐伯は宙に舞う。

「うわ！」

佐伯の仲間が剣人を押さえ込もうと、右手をつかもうとした。

浴びせた。

3人目、4人目と次々に倒されていく

最後の一人も剣人の右アーム・ヒモを引いた 地面に倒れこんだ

倒れてる仲間にも同様に蹴りを入れた。

「どうなりへんんだ・・・」

佐伯は動揺を隠せない。

仲間たちも苦心をこなして倒れこんでいた。

「うるせ」

剣人はその言ひ事

姉にはそう言ふと体位違を更に暴行を繰りか

劍人は悪魔のよくな顔で罵った

右拳で殴打した。

そして佐伯を地面に仰向けに転がした。

一 ピヤハハハ！」

「どうなんだ」

そう言うと剣人は足を大きく振り上げた。

「ヒ――――――！」

その瞬間屋上のドアが激しい音をたて開いた。

「ドカーン！」

鬼塚がドアを蹴破つて入つてきたのである。

「斎藤・・・！」

「お前なにしてるんだ・？」

その声に剣人は反応すると、足をとめ、鬼塚の方をふらつと向いた。

「先生・・何つて・仕返ししてるんですよ・」

「先生言つてたぢやないですか・・？」

「ケンカには絶対勝ちにいけ・・つて・」

「おまえ・・」

「何かに取り付かれてるな・・？」

その剣人の様子を見て鬼塚は目を細めて言った。

「はあ・?なに言つてるんですか・・？」

「先生が言つたん・じやないですか・・？」

「勝てつて・・お前は負け犬だつて・・

だから・・俺・・勝つたんですよ・」

「勝者は・・敗者殺しても・・いいで・すか・?」

「先生・・せんせい・・・」

「せ・・」

剣人はそう言いながら、だんだん鬼塚の方ににじり寄つてくる。佐伯達は剣人の矛先が鬼塚に向くと、悲鳴をあげながら、少しこける様にして

屋上から逃げていった。

突然剣人は前ががみになると、すごい踏み込みで鬼塚に飛び掛つてきた。

「は・はやい！」

剣人は鬼塚に飛び掛ると右ストレートを鬼塚の顔面に放つ。

「くつ・・

皮一枚の差で鬼塚は避ける。

剣人は左足で地面に踏ん張るようにしてスピードを殺すと
くるつと体を回転させ鬼塚の方を向いた。

「先生・・なかなか・・やるじゃないですか・・

「じゃあ次はこんなのどうです・・?」

剣人は薄笑いを浮かべながらそう言つと

鬼塚の視界から消えたかと思うと

一瞬で、鬼塚の懷に飛び込んで、強烈なボディを鬼塚にいれた。

「ぐはああ・・」

鬼塚は倒れこむと、転がるようにして、地面で腹を抱え悶絶してい
る。

「ヒハハハハハ・・あの強い先生も俺にかかるば・・こんなもんだ
(く・・)

(人間の・・出せるスピードじゃない・・このままでは・・やられ
る・・やるしかない・)

鬼塚は腹を押さえ、苦しそうに立ち上がると、何か吹っ切れた目で
剣人を見た。

「斎藤、いや、お前を操る何者かよ

「退け・・」

「はあ・・?」と剣人は答える。

「ふ、無理か・・」

「なら・・やるしかないな・・」

鬼塚はそう言つと、どこから出したのか、手に何枚か護符のような
ものを出して構えた。

「はあああああ!」

それに火がついたかと思うと、一瞬にして散り散りになり消える。
煙のよくなものが、鬼塚にまとわりつき姿を一瞬みえなくした。
しばらくすると、煙がはれてくる

そこには戦国武将の甲冑のようものをつけた鬼塚が仁王たちしていた。

剣人はぼーっとそれを見つめている。

「さてと・・・とりあえずお前を斎藤から取り除かないとな・・・」
そういうと鬼塚は、両手の指を使って、人差し指と親指で三角形の
ような形をつくり

剣の方へ構えた。

「ふん！！！」

剣人は衝撃のようなものを受ける。

「ん・・なんだ・・ぐわあああ」

剣人から何か黒いものが剥がれ落ると、壁に激突した。

剣人は糸がきれた人形のようにその場に崩れ落ちた。

「さてと・・・」

「お仕置きタイムだ！」

鬼塚はそういうとニヤリと笑つた。

「斎藤！！」

「しつかりしろ！」「剣人！大丈夫？」

「ん・・ん？」

剣人が目を覚ますと、鬼塚と零がしゃがみこんで見下ろしていた。

「斎藤大丈夫か？」と鬼塚は言った。

「大丈夫つて・・俺・・なんかあつたんですか？」

剣人は状況が飲み込めない。

零は剣人を不安そうに見つめながら、少し涙を浮かべている。

「大丈夫そうだな！」

鬼塚のその言葉に零は少し安堵した。

剣人はきょろきょろし始める。

「ここどこだ？・？」

「屋上よ、」

零が答える。

「屋上？　何で俺こんなところいるんだ？」

「うーん……しかも体あちこち痛いし……」

「なんか頭も痛いな……」

「俺なにしてたんだ……」

剣人は仰向けになりながら、記憶をたぐつしていくが思い出せない。

「ん〜〜」

「ん？」

良く見ると、雰がしゃがみこんでるため、スカートの間からパンツが見える。

「パ・・」

「どうしたの？なんか思いだした？」

「パ、パンツ・・」

「え・・？」

雰はゆつくり剣人の視線の先を見る。

「！…！…！」

「きやあーーー！」

顔を赤くしながら、雰はスカートでパンツを隠す

「あんた！こんなときにはに考えてるのよー！」

「パシ！」

「イタ！」

剣人は雰にビンタされた。

右頬には紅葉のような跡がくつきついてる。

「さて、斎藤、色々と話さないといけないのだが・」

鬼塚は真面目な顔で剣人をみた。

「ここは場所が悪い、放課後、俺と来て欲しいところがあるのだが・」「は、はあ・・どこへですか？」

「前渡した俺の柔道教室の紙、あそこは俺の実家でもあるんだよ

「あそこに俺と来て欲しい」

剣人は鬼塚の突然のその言葉に少し戸惑つてる様子だ。

「な・なんですか？」剣人は言った。

「詳しい事情はここでは言えないんだが・」

「そうだな・・お前強くなりたくないか・？」

「そう思うならうちへ来い・」

「悪いようにはせん！」

鬼塚のいつになく真剣な目に、剣人は何か只ならぬものを感じた。

（これは、ただごとじゃないな・・）

（断ると殺されそうだ・・）

「じゃあ・一応・行つてみます・」

剣人は諦め顔で言った。

「そうか・」

「じゃあ校門で4時に待ち合わせよう」

雪は鬼塚に駆け寄る。

「先生！」

「ん？ なんだ竹下」

「私も行つていいでですか・？」

鬼塚は雪を見て、少し考え込む。

「ん――・・」

「まあいいだろう、齊藤がいなくなつた事を、俺に知らせてくれたのはお前だからな」

「じゃあ齊藤は放課後まで、保健室で寝かせる。」

「竹下は最後まで授業ちゃんと受けれるよ！」

「はい！」

そういうと鬼塚は剣人を起き上がらせ、剣人に右肩を貸すと一人で歩いていった。

雪は教室に帰ると、授業中ずっと剣人の事を考えていた。

（うーん・・・・・）

（剣人に何があつたんだろ・・・）

(朝も様子おかしかつたし・・・)
(・・・・・・・・・・・・)

雪は今日有つた事を回想しはじめる。

(私が職員室へ剣人がいなくなつた事を先生に伝えに行つて・・・)
(その後・・・しばらくしたら・・・鬼塚先生が屋上の方にすごい勢いで駆け上がつていて・・・)

(屋上へ行つてみたら・・・剣人が倒れてて・・・)

雪は鉛筆をぐるぐる回し始めた。

(あ・そう言えば、途中で佐伯君たちが怯えたかんじで降りてきたんだよね・・・)

(佐伯君顔にアザとかあつたきが・・・)
(まさか・・・剣人とケンカでも・・・?)

雪は鉛筆をまわすのをとめた。

(佐伯君なら何かしつてるのかな・・・)
(よし、後で聞いてみよう!)

(・・・・・)

「雪ー！」

「雪つてば！」

「んー？」

「あ・・・」

雪は巴の声にやつと気づいた。

「ああ、また・」

巴は少しため息をついた。

「ごめん、巴」

「もう授業とつくに終わつてゐよ・雪

雪は周りを見渡した。

既に休憩時間に入つていて

教室は友達同士で集まり談笑をしたり、走り回つたり騒がしい様子を呈していた。

「休憩時間が・・・

「あ・・・」

「そうだ・・・」

雲は教室をきょろきょろ見渡し、佐伯たちを探す。

「あれ・・?」

「いない・・?」

「いない・・?」

佐伯の近くに座る男子に雲は聞いてみる。

「佐伯君、どこ行つたか知らないかな・?」

「ん? ああ、なんか鬼塚に呼ばれたとかいつて職員室行つたよ」

「あ、そななんだ・ありがと」

雲はそう言つと、すこすこ自分の席へ戻る。

「?」

「雲どうしたの?」

「なんでもない・・」

そつ言つと、雲は机に手を枕代わりに頭をおくと、前かがみに伏した。

剣人はその頃保健室のベッドで仰向けに寝転びながら考えていた。

(しかし俺なんで・・あんなところに・・)

(てか、昨日の夜からの記憶がねえ・・)

(どうしたんだ・・俺・・)

(どうやつて学校きたんだ・・)

(わけわかんね・・・)

剣人は頭を右拳で叩いた。

(・・・・・・・)

(考えてもしかたねーか・・)

(分かんねーもんは分からん・・)

(こういうときは寝るに限る・・)

剣人は布団を頭からかぶり寝始めた。

雲は巴と談笑していた。

しばらくすると、佐伯達が帰って来た。

席に座るといつもの仲間と騒がしい感じで喋り始めた。

雲はまた立ち上がる。

「ん？ 雲？ どこ行くの？」

「ん？」

「佐伯君に話があるの」

「ちょっと行って来るね」

そう言うと佐伯の方へ歩いていった。

(なんで・・佐伯君たちと・・)

(ちょっと怖そうな人たちなのに・・)

巴は不安そうに雲の動向をみつめている。

「佐伯君！」

「ちょっとといいかな・？」

雲は佐伯達の談笑にわけいりよつと囁いた。

「ん？」

「なんか用？」

雲を佐伯達が一斉に見た。

「えっと、さつきさあ・・屋上から降りてきたよね」

「屋上・・? そんなとこ行つた覚えない・・」

佐伯は狐につままれたような顔をしている。

「え？」

「なにいつてんの？」

「え・・確かに・・」

「あれ？」

「・・・・・」

「『めん、勘違いみたい！』

雲はそう言つと、足早に席に戻った

「なんなのあれ・・」

佐伯達はそう言つと仲間とまた談笑をはじめた。(うつ、どうなつてゐの・・)

(なんかわけわかんない・・・)

零は少し混乱していた。

「零? 佐伯君たちと何話してたの?」

「ううん・・・勘違いみたい・・・」

「??」

巴は不思議そうに零を見つめる。

「ああ・・・もうどうでもいいや・・・」

零は机のなから、教科書を取り出し静かに読み始めた。

放課後、授業が終わると、零は剣人のいる保健室へやってきた。

「案の定・・・寝てる・・・予想通りの奴だわ・・・」

「剣人! 剣人! 置きなさいよ!」

「うう・・・うーん」

「ほら、先生と待ち合わせの約束してるでしょー! 置きなさい!」

「ん~ ズズ」

「こらー! バシ!」

零は力バンで剣人のお腹のあたりを叩いた。

「ぐえ・・・」

「ん~ ・・・」

「お・・・零! おはようさん」

剣人は目を覚ますと、眠そうに零の方を見て言った。

「ほら、いくわよ! 校門に4時に待ち合わせでしょ」

「おお・・・そうだった・・・」

「今何時?」

「3時45分よ」

「まづい・・・急がないとな

そう言いつと、剣人は立ち上がりひなこ先生を見て言った。

「先生、お世話になりました」

「帰りますんで・・・」

「うん、そつか」

「じゃあ、気をつけて帰つてね」

「はい」

「さよならー。」

ひなこがそう言つと、剣人と雲はお辞儀を軽くすると、保健室を出た。

校門まで一人はやつてくると、鬼塚が既に待つていた。

「おー！」

「来たか！」

「先生お待たせしました」

雲と剣人は軽く頭を下げる。

「よし一人揃つてゐるな」

「じゃあいくか！」

「はー」

三人は鬼塚の実家である鬼塚柔道道場を目指して歩きはじめた。

「少し歩くぞ」と鬼塚は言った。

学校の門をでると、坂道を上がつていく。

住宅地を通り抜けると、道沿いには草木があちらほら見え始め、だんだん山道のような場所にさしかかつて來た。

「先生・・どこまでいくんすか・・？」

「もう少しだ・この坂道を登りきつたところに俺の家はある
(うへ・・まだ坂道のぼるのかよ・・)

剣人はため息をついた。

鬼塚は慣れた感じで、ずんずん歩いていく。

雲は疲れているのか、無口になつていて。

坂道をぬけると、高台に大きな壙がみえてきた。

周りは木々が生い茂り、さしづめ、山間にひつそりある寺に似た様相を呈していた。

「よし着いた！」

「ここが俺の家だ！」

「うは――でけえ――」

「先生大きな家に住んでるんですね！」

「うひやー」

剣人はその大きく、長く続く塀をみて驚いていた。
かなりの敷地面積である。

「ほんと大きいね・・・」

零も呆然と見ていた。

「ははは、生徒で連れてきたのはお前等がはじめてだ」
鬼塚はそう言うと、門を開けた。

「さあ、はいってくれ！」

「お邪魔します〜」

二人はそう言うと中へ入つていった。

門をくぐり、石畳の階段を上ると玄関が見えてきた。

「ここが母屋な」

「母屋の右の方に見えるあの建物が道場だ」

母屋の三角屋根には無数の瓦が隙間なく置かれていて、白い壁
杉で出来た格子の引き戸、土を押し固めた地面上に細かい石や砂利
が転がっている。

旧家といった外観である。

「ほえ〜」

剣人と零はあまり目にしたことないその家を、珍しそうに眺めている。

道場の淵は少し縁がかつていて、雑草やたんぽぼが無数に生えていた。

「ん〜・・初めて来たんだけど、なんかどこかで・・・」

剣人はこの家に初めて来たはずなのに

一度来たようなことがあるような不思議な感覚を覚えていた。

「ガラガラガラ〜」

「ただいま〜」

鬼塚は玄関の引き戸を開けると、大きな声で言った。

すると、奥から誰かが出てきた。

「守ちゃんお帰り」

そう声を掛けたのは鬼塚の母留子である。

「あらあら、守ちゃん、その子たちは？」

「ああ、俺の学校の生徒だよ」

「齊藤剣人と竹下雫だ」

鬼塚は一人の方をふりむいて母に言った

「ああ・えつと・齊藤です。はじめまして」

「はじめまして、竹下です。お邪魔しています」

一人は挨拶をした。

「はじめまして、鬼塚守の母留子です。齊藤君、竹下さんようこそ
ね」

留子はそう言つと一人にお辞儀した。

「まーまー堅い挨拶はそのへんで、さあさあ一人ともあがつてくれ
「お邪魔しまーす」

一人は靴をぬぎ、中へ案内されると、奥へ入つていった。

突き当たりの部屋までやつてくると、留子は障子を開けた。

「さあ、ここでゆつくり寛いでね」

三人は10畳ほどの畳の部屋に入り、テーブルの脇に並べられる座布団に座つた。

「外は暑かつたでしょう、何か飲み物もつて来るわね」

「母さんありがと」

留子は障子をゆつくり開けまた閉めると、飲み物を用意しに部屋を後にはした。

「ま～お前等ゆつくり寛いでくれ」

「もうすぐ母がお茶と茶菓子もつてくるからな

「有難うござります」雫は鬼塚に頭を下げた。

(ふ)しかし、守ちゃんか・・・ちゃん・・)

剣人は鬼塚の顔を見つめながら、「ちゃん」に違和感を感じていた。

「どうした? 齊藤?」

鬼塚は剣人の視線に気がつく。

「いえいえ・・別になんにも・」

「お待たせ」

留子は冷たい麦茶を全員に配りテーブルの真ん中に菓子を置いた。
「さあ召し上がれ」

「おお、ありがと、母さん」

「有難うございます」

「どうも」

剣人は出された麦茶を「ぐぐく飲み始めた。

「じゃ～ごゆっくり」

留子はにこやかに微笑むと部屋を出て行つた。

「ブハ～良く歩いた後の冷たい麦茶は最高だ」と鬼塚は言つた。

「そうですね」零は笑顔で答えた。

「俺はウーロン茶が好きだ」

「もう、剣人！」

零は剣人を睨む。

剣人はその顔をみてすぐに

「ああ、ごめん、やっぱ麦茶いいよな～」と言葉を一変させた。

「アハハ、お前等仲いいな」

鬼塚はからかうように言つた。

「そ・そんなことないですよ！」

「そうだよな・いつも俺なんか殴られてばっかりだし」

「こら、剣人！」

「ヒ～！」

鬼塚は一人の様子を見て笑っていた。

しかし、だんだんその顔から笑顔が消えていく。

「さてと・・・

「話は変わるが」

鬼塚はさつきまでと違う真剣な顔で語り始めた。

「今日は前達、特に斎藤を呼んだのにば、訳がある」「別に斎藤をうちの道場に入門してもらおうとか・いや、それもあるが、もつと重要な話をするためこっちに来てもらつた」

「あれ・・・入門の話じやないんですか・・・」と剣人は言つた。

(なんだ・・結局それもあるのか・)

剣人は目を細めて鬼塚をみた。

「斎藤、お前今日起^{おき}こ^のいつた事覚えてるか・?」

ああ・・それが・・さつぱりで・・まるつきり覚えてないんです

「ふむ」

鬼塚は麦茶の入ったコップを手にもち飲むと、静かにコップをテーブルに置き

ふーっと息をついて話を続ける。

雪は息を飲みながらその話を聞いている。

「お前は今田 佐伯達を屋上に呼び出し……」
「そして奴等を相手にケンカをしかけたんだよ……」

「な」~~~~~!..

「俺が！？」

剣人は驚きを隠せない。

「タク」

「セミは鳴き声・・・・」

「俺記憶ないし……それにあいつ等5人に勝てるわけが……」

剣人は頭が混乱している。

「俺が行かなければ、もしかしたら佐伯は死んでいたかもしない」
部屋の空気が凍りついた。

「気に病むことはない・・それはお前の意思でもなく

ましてや夢遊病といった類でもない

「お前は操られていたんだよ・」

「え？？」

剣人と雲は鬼塚の話が良く飲み込めないでいた。
突然部屋の障子が開いた。

「守、わしが話そう」

三人はびくつとしてその声の主の方を見た。

そこには、頭がはげた白い髪のあるおじーさんが立っていた。

「じつちゃん・・」

鬼塚は言った。

「今はお前の祖父ではないぞ？」

「あ、源信様でしたか・失礼しました」

鬼塚はなにか気がついた様子だ。

「ああ・・ええと・・」

「よい！わしが話そう」

源信は鬼塚にそう言うと、剣人と向き合ひ席に座る。

「とりあえず斎藤剣人、よくきたな」

「は・・はあ・・」

剣人は生返事をした。

剣人はさつきの鬼塚の話が頭を離れないでいる。

「守の話が気になるようじゃな・・？」

剣人は驚いた様子で源信を見た。

「だが、今からワシが話す事を聞けば、だんだん分かつてくるはず

じや」

「さて・何から話そうか・・」

源信は頭を右に傾げた。

「わしは・・お前をずっと見ていた。そう、お前がこの世に生を受けたその日からずっと」

「え？」剣人は話が飲み込めない。

「話は変わるが・・わしは、ずっと昔・・そう戦国の世の時代からこの世を見てきた」

「私はこの世の陰の氣、そうお前たちの言葉でいうなら悪霊や妖怪、そういう暗い陰の氣をもつ闇の住人を監視してきたのだ」

剣人と雫ははポカーンとしながら聞いている。

（なんなんだ・・このじいさん・・）

源信はそんな二人の様子を気にとめず、更に話を続ける。

「この世には陰と陽があり、世の中が悪くなると陰の氣の力は增長する。その機会に陰のものはこの時とばかりに世で悪さをする。

「陰の氣が暗躍する世は、混乱に満ちた暗いものとなり、荒んでいくのじや」

「ワシはそれを防ぐため、この世を監視しているのだ」

源信は窓から見える外の景色に目をやる。

「ワシはそのバランスをとるため、世の中が陰の氣に強く傾く時・・

「強い陽の力を持つ者を探し出すと、ワシの力を貸し与え、陰の者の動きを抑制させた」

源信はふーっと息をつくと、ニヤリと笑い剣人を見た。

「まー！簡単に言うとじやな」

「悪い奴をうちのめす強い正義感のある奴をさがして

そいつにぶちのめさせるって話じや」

「そして・・・ワシはお前に目をつけた、斎藤剣人よ！・フォフオフオ」

三人は目が点になつた。

「だからのお、斎藤剣人、いや剣人よ、その任務やつてくれんかの？」

「ええ？？」

「なんか良く分からんけど、俺にその妖怪とか悪霊をやつつけられて
言うんですか？」

剣人は半ば焼けくそ氣味に、適当に言つてみた。

「その通りじゃ」

雪はあまりの展開に目を丸くして黙つている。

「うへ・・・

「まじですか・・・?」

「・・・・・

剣人は信じられない様子で源信をみて言つた。

「まあまあ、源信様、ちょっと突然すぎて斎藤も

訳分からぬ様子ですし」鬼塚は言つた。

「それもそうじゃの・ところで剣人よ、さつきの守の
話じやがな」

「お前、今日佐伯という若者を打ちのめし、殺しかけたよな・?」

剣人はその突然の言葉に驚いた様子で、表情を強張らせる。

「といつても・・・お前は記憶はないはずじゃ」

「なにせ、操られていたんじゃからの〜」

「陰の気をもつものが、お前に憑依し

お前の体をもてあそんだのじや」

源信は片目をつぶり、剣人を見つめて言つた。

「まさか・・・

「・・・しかし・記憶がないし・・・

「俺が・・やつたのか・・?」

「・・やらされた・・?」

「しかし・・そんなことが・・・

剣人は信じられない様子で、自分の手を見ながら少し震えている。

源信はその様子を見て、少し考え込むと剣人を静かに見た。

「まあ・・突然すぎたわな・・とりあえず、今日はもう遅い

今日はここに泊まつていけ」

「飯でも食つて、風呂でも入つて、良くな寝てからまた答えを聞かせ

た。 そう一方的に剣人に言うと、障子を開け、廊下の暗闇に消えていつ
てくれ』

覚醒その一

「お前達、俺もどう言つたらいいか分からなが・・・」
「取り合えずもう夜の8時だし、どうする?」

呆然とする一人を前に搾り出すよつに言葉を切り出す鬼塚。

剣人が口を開いた。

「ええつと・・明日土曜日ですよね・?」
「俺、別に明日予定何もないから・・・」
「よければ、ここで泊まっていつてもいいですか・?」
「ああい・よ」
「有難うございます」

鬼塚は雲の方をみた。

「竹下はどうする?」
「え・・?ああ・・・」
雲は、まださつきの話が頭でぐるぐる回っていた。
「ええつと・・私も・・泊まっていつて良いですか?」
「うん、じゃあ・・お前達、俺のどこで泊まっていけ」
「母さんに今から言つて、簡単な夕食作つてもらうよつにするから」「有難うござります・」
「ども〜・」
「じゃあ、ちょっと行つてくるわ」

そう言い放つと鬼塚は足早に部屋を出て行つた。

さつきの源信の話が走馬灯のように頭を駆け巡つている一人。

（・・・俺・・・ほんとに佐伯達とケンカしたのは事実みたいで・・）
（俺が・・・それは悪靈にのつとられたせいで・・）

（あのじーさんは・・俺をずっとみていて・・）

（つて・・・あのじーさん戦国時代とか・・）

（一体・・・あのじーさん何歳だよ・・）

（で・・俺に妖怪たおせて・・）

剣人は頭の中で必死で整理しようとするが、中々まとまらないでいる。

雫も同じように混乱していた。

「ああ・・・考へてもしかたない！」

「あのじーさんの言つたように飯くつて、風呂はいつて、寝てから考えよつー」

剣人はそう吹つ切るように言つと雫を見た。

「雫・・・」

「なに？剣人」

「一緒に風呂はいる？」

剣人の突然の言葉に顔を赤くする雫。

「な・・な・・な・・なにいってんのよ！あんたは！・」

「このドスケベ！」

剣人は雫に平手打ちされた。

しばらくすると、留子がやつてきた。

「ごめんね～・・何にも用意してなくて・・」

「取り合えず、コンビニで急いで買つてきたの」

「これ食べて・・」

申し訳なさそうに、留子はオーリギリ数個と弁当をテーブルに置いた。

「いえいえ・・急に止まることになつたあげく、食べ物まで・・」

「すみません・・・

雲は俯きながら留子に言った。

「いいのよ～、こんな時間に若い一人を帰せるわけないから」

「ゆづくりしていつてね」

留子は微笑みながら雲に言った。

「有難うござります」

鬼塚が戻ってきた。

「お前達の親に取り合えず連絡つけといたよ」

「すみません」鬼塚先生・何から何まで

「先生ありがとー！」

お辞儀をする二人。

「じゃあお前等飯くつたら、順番に風呂はいってくれ

「うちは風呂だけは自慢でな～」

「どんな風呂ですか？」

興味深げに鬼塚に聞く剣人。

「な・・なんと、、13畳分くらいある檜の風呂だぞ～！」

「ええええ・まじですか・・・？」

「まじだよまじ！」

鬼塚は誇らしげに答えた。

「わーすごい・・・

「先生んちつてお金持ちなんですね」

「いやいや・それほどでもないよ」

「ただ、土地だけもつてるだけだよ

「いわゆる成金だ！ははは」

雲のその言葉に照れくさそうに答える鬼塚。

三人は夕食を食べ終えると、寛いでいた。

「あーくつたくつた！」

「しかし人の家で飯食うのも久しぶりだな～」

「うん、私も久しぶりかも・」

夕食を食べおえると三人はぼーっとした様子でおし黙つている。

「先生・・・」

剣人が口を開いた。

「なんだ・？斎藤」

「あのさ・・まだ俺信じられないんだ・」

雪はお茶を飲みながら黙つて聞いている。

「俺が佐伯達を呼び出してボコボコにした・」

「これは事実みたいだけど」

「記憶はないし・・」

「でも、それはまだ理解はできるんだ」

「ただ・・信じられないのは・・」

息を呑む剣人。

「この世に幽霊や妖怪がいるってあの源信って人が言つた事なんだ・」

「

鬼塚は剣人のその言葉を聞くとふーっと息をつくと立ち上がった。

「そうだな・・」

「いくら言葉で聞いても、分からぬものは分からぬよな・・」

「だったら・・見せてやるよ」

「そいつらを・・」

その言葉に驚いたように鬼塚を見る一人。

「お前達に一つ言つておきたい事がある」

「これは俺たち三人だけの話だ・誰にも言つな

「約束できるか?」

二人を真剣な顔で鬼塚はみつめる。

剣人と零は静かに頷いた。

「さつきの源信様がいつてた通り、この世には靈や妖怪は存在し

「それが悪さを働く事は事実だ」

「源信様はそれを防ぐため、強い陽の者を探しだし、力をあたえることで

陽の者に陰の者を退治させている・」

「鬼塚家の家系の者は源信様が、陽の者を見つけ出すために・」

「この世と繋がるための媒体にすぎない・・・」

「ただ、極たまに、鬼塚家にも強い陽の者が現れる事がある。」

「その中の一人が俺だ!」

「そして・・・」

鬼塚はそういうと、両手のひらを胸の真ん中で合わせた。

「俺は陽の者として源信様に力を頂いた」

「これがその力だ!」

鬼塚の手から1枚の護符が現れた。

護符に炎がつき、粉々に消し飛んだ。

その瞬間光の粒のようなものが、鬼塚の体のなかにに吸い込まれるようにに入る。

呆然と鬼塚を見つめる二人。

「見せてやろう!」

「お前達に・・・」

「この世に跋扈する闇の住人の姿を」

そう鬼塚は言うと、胸の真ん中で指で二角形のような形を作る。

「フン!」

「どうだ・・・？」

「見えるか・・・？」

鬼塚は一人に言った。

「何が？」

「きやあ～～～！」

雲が叫んだ。

「剣人あそこみて・・・」

「黒いものがなんか動いてる・・・」

雲は怯えている。

「どこどこ？」

剣人は雲の視線の先を見る。

「うわ・・なんだこれ・・・」

「なんか・・目みたいなものがついてる・・・」

青ざめる剣人。

「それは低級な妖怪の一種だ」

「この部屋にいるのは、どうやらそいつ一人だけのようだな・・・」

そう言いながら部屋を見渡す鬼塚。

「一定の範囲にいる陰の者をこの世に晒す力」

「これは源信様の力の一つで、発露という力だ」

「俺はさつき発露と書かれた護符を使って、その力を使用することが可能になつた。

そしてさつきその力を発動させたんだ」

二人は頭が真白な状態でその話を聞いていた。

覚醒その2

剣人は鬼塚自慢の檜風呂に一番風呂でやつてきた。

「おお、すげえ・・・広いな〜・・」

「俺んちの何倍くらいあるんだこれ・」

剣人は桶で体を流す。

「ブルみたいなんだな・・」

足からちよつとずつ体を水に沈めていく。

「うん・・気持ち良い・・最高・・」

檜風呂には窓がついていて、外の中庭を見ることが出来る。

松の木や大きな庭石、小石などが敷き詰められた綺麗な庭である。

「先生んち・金持ちだよな〜・・」

「ふ〜・・・・・」

気持ち良さそうに顔をタオルで拭くと、ふうーと息をつき静かに目を瞑る。

剣人はさつきの出来事を頭に思い浮かべている。

(あれが・・・妖怪なのか・・・)

(ほんとにいるとはね・・・)

(・・・・・・・・・・)

(しかし・・現実離れしててるよな〜・・)

(よし、体洗おう・・)

剣人は湯船から出ると、水道場で蛇口を捻った。

あらかじめ置かれているバケツを手にすると、それにお湯をため始めた。

「バシャヤ！」

「シャカシャカ」

剣人は丹念に体を洗い始める。

石鹼が体を覆い尽くすと、バケツを頭の上からかぶった。

「ふ〜・・・」

「さてと・・あがるか・・」
「雲が待つてゐるしな・・」

剣人は風呂から上がると、はじめに案内された元の部屋に戻つてき
た。

「お先へ！」
「おお、斎藤はやいな」
「どうだつた？ 風呂は」

檜風呂の感想に目を輝かす鬼塚。

「いやあ～・先生最高つすよ」
「あんな大きくて綺麗なお風呂初めてです」
「だらだらーはははー！」

その剣人の言葉に上機嫌の鬼塚

「竹下も次入つてこいよ」
「肌が綺麗になるぞ」
「ええ・・そうなんですか・・？」
「そうだ、なんせあの風呂の水は」
「飛騨の山深くから、送つてもらつていてる水なんだ」
「美肌効果あるらしきぞ」
目を輝かす雲。

「すゞい～・・じゃあ・・行つてきますね！」
「うん、ゆつくり使つておいで」
「はい～」

雲はそつと重り、楽しそうに部屋を出て行つた。

「ふ～風呂の後の扇風機最高ー！」

剣人は鬼塚が用意してくれた扇風機にあたっている。

「先生！」

「ん？ なんだ？」

「先生つてさ・・・いつから・・・あの力身につけたの？」

「ていうか・・あの源信つて人の存在を知ったの？」

「いつだつたかなあ・・物心つく頃には」

「源信様の存在は当たり前だつたというか・・」

「じつちゃんが変わるぞつて言うと、それがサインでな」

「そしたら、別人格の源信様になるんだよな」

「それが、当たり前だと思つて暮らしてきたなあ・・」

「ただ・・」

鬼塚は少し口調を重くする。

「俺に力を与えるつて話になつた時は、さすがに驚いたな・・

「俺は妖怪や靈がいるつてことは」

「源信様に言われていたから、分かつていたんだけど」

「源信様の力の説明を受けたとき、世界が変わつたよ」

「だつてな・・この世のあらゆる道理を覆すような力を」

「自分のものにできるんだよ」

剣人は鬼塚の半ば現実感のない話に聞き入つている。

「どんな力ですか・・・？」

興味が少し沸いてきている剣人。

「どんなかく・・」

「そうだなう・・」

「でもこれは・・」

「これ以上は言えないんだよな・」

言葉を渋る鬼塚。

「もしこれ以上聞きたいのなら、お前は源信様の力を頂くしかない」

「それは即ち、源信様の要求をお前が呑むということだな」

剣人は少しガツカリした顔をしている。

「やっぱりそれしかないのか・・」

「教えてくれても・・いいのに」
ふてくされた顔で鬼塚を見る剣人。

「うわ～ほんと大きい」

雪は田を見開きながら、檜風呂全体を見渡した。

「最高～！」

「気持ち良い・・」

雪は体を洗い終えると風呂をでた。

雪は廊下に出ると、暗がりに人影をみた。

「あれ・・あの人・・さつきのおじいさん・・」

その人影が近づいてくる。

「おお、守が連れてきた生徒じゃな」

「あ・はい・」

「はじめまして・守の祖父の実です」

「はあ・・・・」

（さつき会つたんだけどなあ・・・）

「じゃ～ゆっくり～」

「有難うございます」

守は廊下の右側の部屋の障子を開けると

雪にお辞儀し、障子を閉めた。

（何だつたんだろ一体・・・）

雪は少し怖くなつて足早に元の部屋に戻つていつた。

「ただいま～・・」

「おお、竹下おかえり」

「檜風呂どりだった・?」

また感想を聞く鬼塚。

「え・・ああ・・よかつたですよ・・」

「そつかそつか～やつぱりな～」

鬼塚は顔満面に笑みを浮かべている。

「さてと・・もう遅いし」

「お前たちもう寝なさい」

鬼塚が二人に言つた。

「ええ・・先生まだ早いよ・・」

「バカ、もう〇時だぞ」

「子供は寝る時間だ」

「ちえ・・」

舌打ちをする剣人。

「悪いけど部屋は同じ部屋で寝てくれ」

「布団はそここの押入れにあるから、俺が出しどぐ
「はい～」

（零と同じ部屋で寝る・・！？）

少し戸惑つた様子の剣人。

「大丈夫！俺もお前達と寝るからな」

「斎藤！変な事するなよ！」

「するわけないって・・」

剣人は少し顔を赤くしながら言つた。

零はそのやり取りを笑つてゐる。

覚醒その3

「さてと寝るぞ～」

「お前等もちやんと寝ろよ」

「はい～」

一人にそう言いつと、鬼塚は立ち上がり電気を消した。自らも床に着くと、5分も経たない内に眠りに着いた。

剣人はまださつきまで起こつた出来事が頭から離れないでいた。

(妖怪、幽霊・・・つているんだな・・・)

(今、俺がこうして寝ている間にも・・・)

(俺の真横にいたりして・・・)

剣人はその事を考えると一瞬背筋に寒い物を感じた。

その頃零も同じような事を考えていた。

(さつきの・・・何だつたんだろう・・・)

(怖いよ～・・・)

(寝れないじゃない・・・)

零は布団を顔に押し付けると、体を小刻みに震わしている。

(剣人は怖くないんだろうか・・?)

ふと零の頭にそんな疑問が浮かんだ。

雪は布団から少し頭を出すと
剣人が寝て いる方向に目をやつた。

(寝てるわ・・)

(なんて 図太いんだろ・・)

(あんな信じられない事 あつたのに・・)

雪は剣人の寝姿に少し腹立たしいものまで感じている。

(いいなあ・・心臓に毛が生えてる人は・・)

(ああ・・もう・・無理やり寝よ!)

雪は布団の中に体全体を潜り込ませた。

二人は悶々としながらも、いつしか眠りについている。

「グゴオ～ガ～」

鬼塚の大きい鼾が部屋に響き渡っていた。

「チュンチュン・・」

カーテンを透して、太陽の日差しが部屋全体を薄つすら照らし始める。

「ンゴオ～」

物凄い鼾の轟音を部屋に垂れ流す鬼塚。

「ん・う～」

零が目を覚ました。

(眩しい・・・もう朝ね・・・)

「うへーん・・・」

朝の存在に気づきつつも、体が中々動かない零。

剣人はその零の声にも、動じることなくまだ睡眠の奥深いところにいる。

(起きるか・・・)

(今何時だろ・・・?)

寝る前に、腕から外して枕の横に置いた腕時計を持ち上げる。

(7時30分・・・)

(うへん・・・)

(しゃーない、起きるかー)

零は意を決したように、半身だけ体を起こす。

(良く寝てるわ、二人・・・)

(はへあ・・・)

(着替えなきや・・・って・・・)

(ここで着替えるわけには・・・)

自分が女であり、横に野獣が一人寝ていることを刹那の瞬間に
脳裏に思い浮かべる零。

寝る前に鬼塚に用意してもらつた浴衣を来た場所がふと思い浮かぶ。

(さうだ・・ 部屋を出て右元の部屋で着替えたんだっけ・・)

雲は静かに立ち上ると、一人が寝ていることを確認すると
忍び足で出口の障子に近付き、音立てないようにスーと開ける。

(よし・・!)

(脱出成功・・)

軽くガツツポーズを右手を握りこんで決める。

廊下は静寂に包まれ、まだ薄暗い。

雲はそんな事を気にする暇を自分に与えないように
有無をいわさず、三つ田の部屋にさつと入った。

(ふ・・さてと・・)

(服はどこだろ・・)

(あつた・・)

雲は暗い部屋に浮かび上がる黒い服の影を、どうにか見つけた。

(さてと、着替えて、一人起こしに行かないと・・)

ゆっくり服を肌に身に着けていく。

着替え終わると、もとの部屋に戻つた。

雲はふうへつと息をつくと、剣人たちに言った。

「もう朝ですよ、先生も剣人も起きて～！」

部屋に感高い声で雫の声が響き渡つたものの、一人の耳には届いていない。

(・・・起きて欲しいんだけどな～・・)

一階から何か物音がある。

(あ・・鬼塚先生のお母さん起きてるんだわ。)

(一階に行つてみよ~)

雫は静かにドアを開けると、忍び足で静かに一階へ降りていぐ。

(広いなあ・・)

「トントン」と

(これつて・・マナ板を叩く音だわ・・)

(行つてみよう・・)

音のする所へ歩いていく雫。

音所にやつてみると、確かにそこには留子が立っていた。

(やつぱつー)

「おはよ〜」やれこれかー

「あ〜、おはよ〜」

「竹下さんだっけ、早いわね」

「今、ご飯つくつてるから待つててね」

留子は一瞬包丁を止め、零の声に振り向くと笑顔でそう答えた。

「はい、有難うございます」

「あの・・手伝える事ないでしょうか・?」

「いえいえ、お客様にそんなことさせられないわ・」

「部屋でゆっくり御待ちください」

「すぐお呼びしますから」

「そうですか・・

「でわお言葉に甘えて・・

「失礼します。」

留子の優しい言葉に零は安堵すると、部屋に戻つていった。

「ん・・・うが・・」

鬼塚が目を覚ました。

「は～良く寝た・・」

「あれ・・竹下もう起きてたのか?」

「早いな・・もう着替えてるし」

鬼塚は零が既に着替えて、テーブルの椅子に
俯きながら座つている姿を驚いた様子で見つめる。

「ああ、すまないな、こり、齊藤起きるー。」

零のその様子に後ろめたさを感じ、齊藤を起こしに掛かる鬼塚。

「う・うーん」

剣人は鬼塚の野太い声に目を覚ました。

数分後、剣人も鬼塚も着替え終わってテーブルについていた。

「もうすぐ母さんが呼びにくるだろ? から」

「俺はらべつこべこ」・・・

「剣人つたら・・・」

「もう8時だしな・・・」

剣人は後ろに倒れこむと、お腹をさすり始めた。

誰かが階段を上がつてくる音がする。

「よし、お前等、こ飯食べに行くぞ」

鬼塚はその音を発する主を、留子と断定してそう一人に言った。

「おはよう、おまたせ、みんな一階の台所きてね」

留子は部屋を開けると、三人を見渡す様にそう言った。

「いただきま～す」

「どうだ・・つかの母の手料理は？」

「おいしいです！」

「うふ、おいしい！」

「もうだら、そうだろ」

玉子焼き、お味噌汁、ご飯、漬物、アジのひらき

純和風な心のこもった留子の手料理に零と、剣人は大満足である。

「どんどん食べてね」

「ご飯はまだありますから」

自分の作った料理を、とても満足そうな顔で食べてくれる二人の様子を見て、留子は笑顔が自然とあふれてくる。

30分後、三人は留子の料理のほとんどを平らげていた。

「う～ん、おいしいかつた

「うれしうちままです～」

「有難うござります」

「母さん、『あわせつわ』」

三人はお腹の空腹感が完全に消えて
それには変わって清潔しい満足感が心を満たしている。

「よし、じゃあ部屋に戻るぞ」

「はい」

お腹をさすりながら、少しがに股な足取りで部屋へ向かう剣人
三人は部屋へ戻ると、テーブルの近くにある座布団に
それぞれ座った。

「さあーてど、飯も食つたし、ゆっくりするか」

「ＴＶつけていいですか？」

「いいよ」

「何見ようかな」

剣人は、歯の間に爪楊枝を挟みながら

片手で、ＴＶのリモコンを使って番組を物色し始める。

「ニュースばっかりだな。」

「ああ、この漫画こんな時間にやつてる」

「あら、ほんとー。」

剣人は昔好きだったアニメが、朝の時間に再放送でやつてるのを見て

少し懐かしさと驚きを感じながらも見入る。

雲もそのアニメは好きだったので、一緒になつて見てこる。

「朝からアニメかよ、お前等いい年してるのにな〜」

「何言つてるんですか？僕達アニメで育つたんですよ

少し皮肉った鬼塚の言葉に、軽く切り返す剣人

皮肉を言つていた鬼塚も、いつしかそのアニメから田が離せなくなつている。

三人がTVに見入つてゐる間に、何者かが、障子の外で立つてゐる。
障子がすーーーっという静かな音を立てながら

徐々に開いていく。

「おはよう

三人は気づいていない。

「む・・・」

「おーい・おはようつて言つてんじゃろー。」

その声の主は声を荒げて存在をアピールする。

最初に鬼塚が気づいた。

「あ・・あ・・ああ・・」

鬼塚はその声の主の雰囲気で、誰であるかを悟つた。

「源信様！おはよつ!」ぞこますーー。」

「え?」

「ん?」

鬼塚の突然のおおきな声に、一人は下からそちらへ視線を向ける。

「源信様、どうされましたか?」

「どうせいつもないじゃろ」

「ワシは昨日の答えを、剣人に聞きたのじや」

「あ、ああ・」

頭の中で昨日の話を思い浮かべる剣人。

しかし、まだ決心がついていない様子で下を俯く。

「飯くつて、風呂入つて、良く寝たと思つんじやが」

「その顔振りだと、まだ決まってないようじやな」

源信は剣人の表情を見てそれを悟る。

「ん~・・・・・」

何か剣人に「うん」と言わせる方法は無いかと頭を捻り、考える源信。

雲はぽーっとしたかんじで一人の様子を見ている。

「そうじゅー！」

「剣人よー！」

「はい」

源信は何かいい案を思いついたようだ。

「お主、とりあえずな、妖怪や靈をやつつけろーとは言わん

「ワシの力を与えるから、試しに使つてみないか?」

「使つてみた後に、また答えを聞かせてくれればいい

「な～に、断るつていうのなら無理強いはしない。」

「その時は、力を返してくれればいいぞ」

剣人は力 자체には興味があつたが、妖怪や靈を相手に戦う事には踏ん切りがつかなかつた。しかし、源信の提案で敷居が低くなつたおかげで

心が揺らいでいる。

「どうしようかな」

剣人はもう力を使ってみたい衝動が押さえ切れない。

「お・・俺その力使ってみたいです」

「おお！」

剣人の決意に鬼塚は感嘆の声を上げた。

「フオフオフオ、やつと使う気になつてくれたか」

「じゃあ、さつそくワシの部屋に来てくれるか?」

「はい」

「じゃ来てくれれ」

源信は自分が先頭にたつと

「「」ひちじや」

先導をして剣人を部屋に引き連れていく。

零も興味津々で後をつけようと立ち上がる。

「また、竹下」

「え？」

「付いて行つてはならない」

「何ですか？」

突然の鬼塚の呼びとめに、戸惑つ零。

「力を『える』といふ神聖な儀式に」

「本人以外は、立ち入つてはいけないんだよ」

「源信様と斎藤の帰りを静かに待とうじゃないか」

鬼塚は目を細め、少し渋い表情で零に語りかける。

（うーん、私も気になるんだけど・・・）

（仕方ないか・・・）

（でも、気になるわ・・・）

どうしても、見てみたい衝動に駆られる電
少しそわそわしている。

「そこに座つてくれ。」

「はい」

剣人は源信の部屋に通された。

8畳ほどの部屋には、畳が敷かれていて
片隅にはタンス、真ん中には、檜のテーブルが置かれている。
少し外側に凹んだ壁には掛け軸が掛かっていた。

「さて、取り合えず、決心したお前に礼を言つとくか

「礼なんて、それに俺・」

「分つてある」

「陽の者としての任務を引き受けるかどうか・・

「その答えはいつでもいい・それに無理強いは、なじじゃ

剣人は自分の不安を打ち消す、源信の的確な言葉に
少し安堵の表情を浮かべた。

「じゃあ、今から力を与える儀式を行つのじゃが・・

「覚悟は良いか！」

「はい」

剣人は自分に迫るこれから起こる、未知の出来事を考えると心臓が高鳴る。

「さてと・・・何にする？」

剣人はその言葉に不意をつかれ、どう答えたらいいか分らない。

「実はな〜、ワシの力を『える』のだが、その方法はお前次第なん
じや」

「え？」

剣人はその言葉が良く飲み込めない。

「なんて言つたらいいじゃろ？ うな・・そうじや」

「守の例を出そう。」

「あいつがワシの力を使うところを、お前はみたはずじゃ」

「はい」

鬼塚が靈を自分に見せた時のことを、思い浮かべる。

「あいつは力を使つとき、どうしてた？」

「確か～・・」

「何か手に護符?のよつな物もつて、それに火をつけてた気が。」

剣人は記憶を探り、目に焼きついたビジョンを拙い表現で言葉にした。

「うむ、その通りじゃ」

「ワシが人間に力を与える時に、神字といつものを使つ。」

「要はワシが書いた文字じやな」

「ワシの力の名前を何かに書き示す。」

「その書き[写]す媒体は何でも良い。」

「無論、お前の体に直接書いてもいいのじや」

「その神字が書かれた媒体を受け取った者が、力を利用できるん
じや」

源信の言つてる事の半分も、理解できずに黙つている剣人。

「ワシは守のために、護符にワシの力の名称を一枚一枚墨で書いた。」

「これは結構面倒くさい作業じやぞ」

「書き終えると、その護符を束ね、守の魂がある場所へ投げ入れ

た。

「そうすることによって、護符は普通の物体から、ワシの力を宿した神物へと変貌する。」

「要は、ワシの力の名称を示す物体を何にするかってことだ」

剣人はなんとなく、その意味が分り始めてきた。

「それってつまり・・護符じゃなくても良いくつて事ですね」

「そ、うじや、お前の体に書いてもいいんじやぞ」

「ただ、それをすると、力を使うとき体に文字が浮かぶ上がるがな」

「複数の力を使えばまるで・・・そ、うじやの・・・」

「耳無し芳一みたいになつて、格好悪いじやろうな、フォフォフ
オ」

「だから、体に直接書くよりは、何か媒体を使つた方がいいのあ

「何が良い?」

「うーん・・・

剣人は何にしようか、迷つている。

「そうだ、携帯でもいい・?」

「携帯とな・・」

「面白い事思い浮かぶ奴じゃ」

源信は今だ経験のない物を言われて、試したくなつた。

「よつしゃー…やつてやううー・」

「お前の携帯かしてみな

「はい、これ」

剣人は源信に自分の携帯電話を手渡した。

「えーっと、こうじやな・・」

鳴れた調子で文字を打ち始める源信。
普段から携帯は使つているようだ。

「ちよつと全ての力の文字うつままで、時間かかりそうじゃ

「そのへんで寝てもいいぞ」

そつ良いながら、夢中で文字をうつ源信。

剣人は言われたとおり、横になると鼻をほじついている。

1時間経過した頃、源信は全ての文字を打ち終えた。

「さてと、試してみるか！」

剣人はその言葉に、体を起こすと源信の持つ携帯を眺めた。

「 わあ てと・ 」

「 剣人よ、ワシの前に座れ」

「 はい」

剣人は言われたとおり、源信と向き合いつゝに、座布団の上に正座する。

「ええつとな・・」

「取り合えず、お前に一つ聞いてくな

「携帯にワシの神字打つたんだけどな」

「ワシの力を携帯で使うときの、なんていうかな・・」

源信は頭で言葉がイメージできない様子で、俯き加減で、首を捻ると、声にならない声で
一人呟いている。

「 そ、うそ、ゲームでよく言つじやう、ヒュエクトじやう」

「 は?」

「携帯でワシの力を使える様になるまでの、見た目とこいつのかの
お」

横文字にあまり強く無い、剣人はその言葉にピンと来ない様子。

「ほら、守が力を使用する時な、あいつの護符は燃えて・」

「その後、粉々に散って、初めてアイツは力が使用できるんじゃや」

「あのエフェクト、つまり、力を使用できるまでの演出じやな」

「力を使うものに、ワシがどんなのが良いのか聞いて・」

「そのイメージをワシがプログラミングしてあーいう風に演出が
決まるんじゃ」

見た目はかなりの年寄りではあるが、その風貌とは対象的に、横
文字がバンバン飛び出してくる。

「だから、お前が携帯でワシの力を発動するときの、演出はどん
なのがいい?」

横文字を擱めて、拙い言葉で丁寧に説明してくれる、源信の言わん
とする事がようやく
剣人にも理解でき始めた。

「じゃあ、そうだなあ・・

頭の中で力の使用の時のエフェクトを練り始める剣人。

(・・・・・ そうだなあ・・・)

(・・・・・ 携帯が手から、浮き出るよつてきてまし・・・)

(・・・・・ 俺が携帯に文字つひとつのは・・・?)

(・・・・・いやいや・それだと、時間掛かりすぎだら)

(・・・・・こざつて時間に合わねーぞ・・・)

両手を胸で組み、頭を右に左に捻りながら考え続ける。

(・・・・・頭に力を思つかべると、携帯のディスプレイに文字が一瞬で表示されるかんじ)

(・・・・・で・その後、携帯が空氣に溶け込むように消えると力を使用可能になる)

(・・・・・これで行こう!)

大体のイメージを頭で描き終えると、源信をまつすべを見つめて、剣人は口を開いた。

「源信様、俺決めました。」

「おお、なんなりと言つてみ

「ふんふん・なるほど」

「ふんふん・なるほど」

「それでいいんじゃな？」

「うん」

剣人は自分の考えたエフェクトを、源信の耳傍に顔を近づけ、ひそひそと語る。

二人の頭の中のイメージは一致したようだ。

「よっしゃ・・・

源信は剣人のイメージを頭で描きながら、右人差指を軽く頭にのせると少しぶつぶつ言いながら、目を閉じる。

何かが終わったのか、人差し指を頭から離すと、携帯に人差し指を当てた。人差し指の先をしばらく携帯に当てながら源信は目を瞑っている。

しばらくすると、カツと目を見開き、携帯から人差し指を離すと言葉を口にした。

「これでいいはずじゃ！・・・

「じゃあ、最後はお前の魂のある場所へ・・・

源信はそう言うと、剣人の心臓の辺りに、携帯の頭の部分を垂直に押し当てる。

「いれるぞ？」

・・・・・痛くないだろ？

そんな不安が頭の中にこびきると、源信の目を怯えたかんじで見る。

剣人のその様子を氣にも留めず、源信は心臓に携帯を押し付ける。

その瞬間・・・・

「スボツ」

不安の大きさとは対象的に、源信の持つ携帯が、体の皮膚を通り抜け中にあっさり吸い込まれるように、入つていった。

「ええ・・

驚きとともに、携帯の入った辺りを、手で撫で回す剣人。

「これで、儀式終了じゃ！」

源信はニヤリと笑うと、今までの作業の疲れが出たのかふーっと息をついて、テーブルに置いてあるお茶の入っている容器に手を伸ばす。

「疲れた・・

「とりあえず、お前試しに、なんか力使ってみ

「え？もう使えるんですか？」

「もちろんじゃ

まだ半信半疑ながらも、剣人は力を使用したい衝動が先にたち
力を使用を試みたが、良く考えると、力の文字が頭に思い浮かばな
い。

(・・・・・俺全然しらないじゃん・・)

その事実に剣人は気づくと、源信に何かいたそつに口をもじりもじ
りさせる。

「ん・・? 何だ? 早く力使つてみるんじや」

「あ・・・」

「そう言え、説明書手渡してなかつたな!」

「アハハ・・こりゃうつかりしたわい」

源信は、少し苦笑いを浮かべ、禿げ上がつた後頭部を右手の手のひ
らで
軽くはたぐ。

「えーと・・どいやつたつけ・・」

「あつた。」

戸棚の引き出しを探り、巻物のような物を見つけると
源信は剣人に手渡した。

「ほい、これじゃ」

「その中のどれでもいいから」

「今使ってみるのじゃ」

剣人は巻物を開くと、ずらーっと墨で書かれた文字の列に
一通り目を走らせる。

(・・・・これ使ってみるか・・)

「よし源信様、俺これ使うよ」

剣人はそう言つと、地面の広げている巻物に墨で書かれている多数の文字の中から一つを指差した。

「守身の力か・・」

「それはそこに書かれている通りだが・」

「簡単に言えば、自分の身を守る力じや」

「まあ、物は試しじや、使ってみ」

源信の言葉に静かに頷くと、剣人は立ち上がった。

・・・えつと、さつきの文字を思い浮かべるんだつたな・

剣人が頭に文字を思い浮かべると、突然、手の中から携帯が浮かび上がると

守身の文字が携帯のディスプレイに赤い発光色で表示される。

そして、その後携帯は、空気に溶け込むように光の粒となつて消えていく。

その光の粒は剣人の体に吸い込まれていった。

「うーん、これで使えるのかな?」

「そりゃ

「使ってみ

……そう言われても、どうやって使うんだろ……

剣人は使い方が良く分からぬといつた様子で、源信を見つめる。

「イメージするんじや」

「お前が外からの攻撃から、身を守る時のイメージをしてみい」

「まあ、受動的な力だから、やりにくいくわな」

「よし、今からワシが、お前に剣で切りかかるぞ」

「え……ええええ……!?」

源信はそう言つと、目を瞑り気合のよくな声を短く発すると何も持つていな手に突然日本刀が顯れた。

「もう、お前はさつきの力の發動で、守身の力は備わつているんじや」

「見事ワシの剣を防御してみ」

有無を言わさず、剣を振りかぶると、剣人に襲い掛かる。

「うわ……わ……」

突然、日本刀で切りかかられた剣人は、咄嗟に反射的な人間の持つ防衛反応に従つて、両腕を頭の前で構えて身を守ろうとする。

「ガキーン」

源信の持つ剣の刃の部分が、剣人の腕に触れる数センチ外側で、何か目に見えないものに阻まれる。

「そうじゃ、それが守身の力じゃ」

「へ・・・?」

咄嗟に襲われた剣人は、目を閉じていた。目を開けると、なにか腕の部分を覆う、目に見えない鎧みたいなものに剣の刃が当たつて止まっているのが見える。

「これが・・・」

「そうじゃ・」

「ただ、お前はイメージが出来ていなかから」

「透明なものとなつていいがな」

源信は剣を引くと、剣人の目を見て静かに語り始める。

「一つ言つておくと、ワシの力は大体全てに言えることじゃが」

「使うものの、精神力、慣れ、イメージする力、陽の力の強弱で

「同じ力でも、その形や効果の大きさは全く違ったものなる」

「例えば……守の場合は……」

「アイツは戦国物の話が好きでな

「守が守身の力を使つと、戦国時代の武将が着てるような、甲冑を体に纏うんじゃ」

「へへ・・・・ふ」

まだ鬼塚のその姿をみていない剣人は、その格好を頭に連想すると少し噴出しそうになる衝動に駆られた。

・・・・見てみたい・・

「まあ、大体今ので分かつたじゃろ」

「な・・なんとなく・・」

その自信のなさそうな剣人の答えに、源信は片目をつぶり観察するように見つめる。

「まあ、イメージトレーニングは自分でやつてもいいし

「守とでも一緒に訓練すればいい」

「あ・・・一つ言ひ忘れておつた

なにか思い出すと、軽く自分の頭をはたく。

「ワシの力の効果はその日限りじゃ」

「その日の〇時から次の日の〇時までじゃな」

「いつ使おうが、〇時を過ぎるとセットされるから」

「次にまた同じ力を使う時は、発動しなおさないと駄目じゃ」

「そのへんはきつたり覚えておくよ」

「はい」

源信は一通りの説明を終えると、座布団を枕代わりにして横になる。

「あ・もう全部言つたんで、出て行つていいぞ」

「話しあは終わつじや」

「分かりました、えーっと・有難うござります」

剣人は、あまり力を得たという実感がないまま、終りを告げられ少し戸惑つた様子できょろきょろしながら、部屋をでていく。障子を開け、横になつている源信に会釈すると、源信は左手を挙げ横にふらふら振つた。

部屋を出た剣人は両腕を組んで、俯き加減になにやら考え込んでいた。

・ さつきの力は使えたけど・
・ 他は良く分からぬし・
・ 色々試したいな・
・ そうだ・先生に聞いてみよう。

剣人は鬼塚と雲がいる部屋へ、少し胸の高鳴りを感じながら帰つて
いった。

剣人は鬼塚達がいる部屋へ戻つてみると、音を立てずに軽く障子を開けると、中の様子を隙間から窺つている。零はテーブルに頬杖を付きながら、俯き何かを考えるように、静寂を保つっている。

・・・いるいる

「あ、おかえり～」

零が剣人が覗いてるのを見つけると、言葉を投げかけた。

「ただいま」

「お、斎藤帰ってきたか」

二人の声を耳にすると、座布団を折りたたみ、枕代わりにして横になり、

半分夢の世界の住人だった鬼塚が、朧気な意識の中、剣人に枯れた声で言葉を掛けた。

「ただいま 先生

「どうだった？」

2時間ばかり、この部屋を空けてた間に剣人が体験し、それによ

つて受けた心の変化を聞く事を鬼塚は待ちわびていた。雪は良く分からぬ儀式で、剣人の性格まで変わつていなければ、剣人の口調や喋る内容で確認しようと、息を呑んで聞いていた。

「ん~、別に大したことなかつたよ」

「大したことないつてお前」

「ちやんと、力を受け取つたんだろう?」

「はい、確かに」

「じゃあ、お前はもう力の自由に使えるわけだ」

「そういうことになりますね」

鬼塚の率直な言葉を受け取り、それに返すたびに、力が備わつていると言う事を

徐々にだが、着々と心に刻んでいく。

「まあ、どうことは、もうお前は俺と同等であり」

「そして…普通の人間では既に無いわけだ」

「え・・?」

「そうかもしませんね・・

・・・普通の人間ではない

剣人の心にその言葉は鋭く刺さつてきた。

非現実的な力を手に入れるということは、現実の世界の外へ足を踏み出すと言つ事を、実感せずに入られなかつた。

「剣人、あなた・・何か変わつた?」

「ん~、特に・・?」

「そつか」

鬼塚とのやり取りを聞き、自分との会話の感触で、性格自体は変わってなさそうだと

分かり始めると、ほつとした顔を浮かべ、雲は少し不安が和らぎはじめていた。

「たゞ、先生やつぱり俺、今のまじや」

「良くわかんないんだよ」

「じうじたら良いくと思つ」

「この世に存在しないと思つていた、非現実的な力を手にしてその力をどういう風にこれから使えばいいのか、既にその力を持つている

鬼塚に問いかけるような目で、剣人は鬼塚に言葉を発した。

「そうだな~・・」

「取り合えず、普通に暮らしたら良いよ」

「飯くつて、風呂入つて、朝起きて、学校行つて」

「日常生活で少しずつ、力を確認していくことが重要だ」

「分からぬ事があれば、俺に聞けば良いし」

「なんなら、俺が指導してやつてもいいぞ?」

「できれば、お願ひします」

剣人は力の先輩である鬼塚の、淡々とした歯に衣をきせない言葉に思つたほど、大したことじやないような気持ちになつてくると段々、地に足がついていくような感覚を覚え始めた。

「じゃ、取り合えず、お前達帰れよ」

「そうですね」

「うん」

一人は静かに頷くとゆっくり立ち上がり、横においているカバンを持ち、障子を開けて、出ようとした。

「待て待て!」

「普通に帰るな」

「は?」

二人は帰りかけた足を止めると、鬼塚の放った言葉に少し戸惑いを見せる。

「源信様の力の中に、瞬移という力がある」

「それを使って、帰ると良いよ」

剣人はその言葉を聞くや否や、源信からもらった巻物を力バンから取り出すと、その文字を探し始める。

「あ・あつた」

「ええつと・・

「行つた事のある場所を思い浮かべる事により」

「瞬時に移動する力」

「そうだ」

「簡単に言うと、テレポーテーションって奴だ」

鬼塚が少し驚いた顔を浮かべる一人を、にやつきながら眺めると更に言葉を続けた。

「気持ち良いぞ、俺なんかいつも使ってるだ

「今その力を使って、一人とも帰るといいよ」

二人はほぼ同時にお互の顔を向き合わすと、ただただ、信じられないと言った表情を浮かべその場で固まっていた。

剣人は取り合えず、瞬移の力を使ってみる事にした。

「試してみるか・・」

そう静かに言うと、剣人の手から携帯が浮かび上がり、ディスプレーに瞬移の文字が映りエフェクトが終わると、力が体に宿る。

「さてとこれで使えるはずだ」

「お、斎藤格好いいのにしたな」

鬼塚がそのエフェクトを見て言った。

一瞬の間に剣人が行った一連のエフェクトを目の辺りにして雲は目を丸くして黙つている。

(…剣人の手から・・携帯浮き出てきたわ！？)

(…何今の～～！！)

「あ、そうそう、それな、お前が右手で触れる物なら

「一緒に移動してくれるから」

「竹内に右手で触れるといいでぞ」

「へ～・やつてみる」

「えつと～・・・」

鬼塚のアドバイスを受け、剣人はやつてみようとするが、雲のどこの触れようか悩んでいる。

(…肩とか・・?腰・・?それってセクハラじゃん・・・)

(…無難に頭にしどくかな・・・)

「雲、頭触るな」

「え・ええ」

雲の頭に静かに右手の平を置いた。

「わてと、どこに移動しようかな・・・」

「俺の家の前でいいか

自分の家の前の景色を頭でイメージしはじめる。

「いくぞ・・・」

「またな～竹下、斎藤！」

座布団に胡坐をかきながら、煎餅をかじりつつ、笑顔で右手をこつちに向かつて振つていて
鬼塚の姿が目に映る。

剣人はそれを軽く一瞥するが、何分この能力に慣れていないため

イメージすることに精一杯で、挨拶まで気が回らないでいる。

次の瞬間・・

今いる部屋の景色が、瞬時に自分の家の玄関前の景色へと入れ替わる。

剣人は思わず、驚きの声を漏らす。

そして右手に温もりと頭の感触がある事に気がつくと、雲が隣に確かに立っていた。

「ええ、すごい、ほんとに一瞬で移動してる・・

驚きとともに、未知の力で簡単に移動できた事に少し興奮気味の雲。

「いじんなことが・・・」

「まあ、無事飛べてよかつた」

それとは対照的に剣人は比較的落ち着いている。一度守身で非現実的な力を使い、この瞬移の力もそれと同じ物だと理解しているからだ。

「そんじゃ、雲、またな」

「え・・ああ、じゃ帰るね」

剣人の言葉にふと我に帰ると、雲は手を振ると体に震いみたいなものを感じながらも、自分の家へ帰つていった。

剣人は家に帰ると、母祥子が玄関に出てくる。

「剣人、おかえり～」

「先生の家渝しかつた～？」

「うん、まあね」

「お昼(じ)飯あるわよ」

「お、ありがと～」

母と会話を少しすると、上着を脱ぎベルトを緩めると、洗面所へ行き水をため始める。

顔にざばっとその水を浴びせかけると、その清涼感に思わず、感嘆の声が口から漏れた。

タオルで顔を拭くと、首に巻き台所に足を運ぶと、祥子が椅子に座りソバをすすつていた。

「剣人のも用意してるわよ～」

「早く食べなさい」

「うん」

席に着くと、透明のガラスでできた清涼感漂つ冴に盛られたソバを箸でつまみ

その横に置かれた付け汁の入った青い綺麗なグラスにソバを浸すと勢い良くそこから引き上げ、口に流し込んでいく。

食べている間、どこからか、風鈴の微かな音が染み入るよつに耳に

入ってくる。

あつという間にソバが皿から消えうせると、剣人は母に声を掛ける。

「今日暑いね」

「母さん、今日予定あるの？」

「ああ、午後からちょっと買い物いくてくるわ」

「そっか、いらっしゃーい」

そう言いつと、食べ終えた食器を洗面台に運び、食器用洗剤を泡だたせお湯をかけると、洗いはじめる。

その間、剣人は早く自分の部屋へ行きたい衝動に駆られていた。

（…色々力試したいぜ・・・）

全て洗い終えると、部屋へ繋がる階段を音を立て駆け上がっていく。自室のドアを開けると、荷物をドカッと大きな音を立てて置きさっそく巻物を中から取り出した。

（…さてと、何を使おうかな…）

（…ある意味これって、嬉しいよな　）

（…未知の現実社会でりえないとされた魔法みたいな力　）

（…それを俺が自由に使えるなんて夢みたいだ…）

剣人は鼻歌交じりに、巻物に書かれた色々な力の説明を読んでいる。

「これ使ってみようかな！」

「対象となる人、物、場所などを思い浮かべると
「今のその状態を目あたかも間近にあるように見ること」が出来
る力」

「視感・・・」

「よし使ってみるぞ」

またいつも携帯のエフェクトが現れると、ディスプレイに視感の
文字が赤く表示され
その力が体に宿る。

「えーっと、何思い浮かべるかな・・・」

「取り合えず、雰でも」

剣人は目を閉じ雲を思い浮かべる。
すると、映像が暗闇の中に流れ込んできた。

「おお、いるいる」

「なんか愉しそうに、家族と喋つてゐな

「ん・・立つたで・・」

「え・・トイレ・・?それはまずいだろ

思わず剣人は目を開け、零の映像を頭から排除し視感の力を一旦解除すると
息をふーっと付く。

(…危ない危ない、痴漢と変わらないよ)

意外とジエントルマンな剣人。

「次は鬼塚先生でも見てみるかな」

また目を閉じ鬼塚のイメージを、頭に思い浮かべ始める。

「庭で竹刀振ってるな」

(…鬼塚、体鍛えるのに余念がないな・・)

剣人はこの後も視感の力を使い、様々なものを見て楽しんでいた。

口算1（前書き）

ネタ不足なので充填中。

(…まぶしい…)

剣人は目を覚ますと、生欠伸を3回連續でつくと半身を起こした。昨日の夜、深夜2時まで力を色々試していく、まだ寝たり無いといつた
面持だ。

「面倒くさいなあ・・・」

一言さう呟くと、半そで短パンを脱ぎ捨て、夏の学生服へと着替え始める。

着替え終わると、母と2・3会話を交わし、洗面所に行き顔を洗い氣だるいと言った様子で、いつものように朝食を取り始める。
母祥子が忙しそうに、スープ姿のまま食器を洗っている。

「剣人、母さん、もうすぐ会社いくから、戸締りだけはきっちりね」

「あいよ~」

剣人の家はいわゆる母子家庭で、5年前に交通事故で父を亡くし母一人の収入で生計を立てている。なので、朝から晩7時遅くて9時までは祥子は外に出かけていて、剣人が家に帰つてきても、誰もいないのはざらだった。

「いってらっしゃーー」

靴べらで窮屈そうな黒い靴に足をねじ込み、祥子は剣人に早口で色々話しかけると

玄関を開け、忙しそうに外へ出て行く。剣人の耳に玄関の外にあるスライド式の門が閉まる音が聞こえた。鍵を閉めると、虚ろな気だるい瞳でテーブルに座り、朝のＴＶをぼーっと見ている。

「今田も夏田になるでしょう」

朝の番組で、爽やかな笑顔でアナウンサーがそのままいつと剣人は顔をげつそりさせて、一つため息をつく。

（…やだな…しかし、もうそろそろ夏休みだし…）

剣人は夏休み何しようか頭で色々巡らせている。

（…やつぱり、海かプールいきてーよな…でも、男友達と行くのもいいけどなんか、むさ苦しいよな…）

しばらくすると、その夢想から我に返り、まだ夏休みまで5日あまりある事を思い出すと取り合えず、今日学校である夏休み前の期末試験の準備をし始める。今日行われる科目は4科目、剣人はそれぞれの教科書や、ノートをちらちら

読み始める。勉強は何日か前からしていたおかげで、ちら見程度に見終えると

それをカバンに詰め、肩から紐を提げると、玄関に歩いていく。

（…今日は東向かいに来ないな…俺からたまには誘つてみるか…）

剣人がだるそうに、ドアを開けたかと思うと、ほぼ同時にチャイムの音がした。

「お、零、おはよ～」

「おはよ～…」

零もなんだか眠そうな顔をしている。少し目の人下に黒いくまが出来ているのが分かる。
それを見て、零に問い合わせる。

「どうした零、眠そうな顔して」

「ううん・・昨日眠れなかつたの」

零は先日までに見て感じた想像を絶する体験を、夜思ひ浮かべているうちに

興奮状態に陥り、中々眠れなくて、朝4時まで起きていた。
零のその様子を見て、剣人は薄々そういうことだと悟ると、一言発した。

「まあ、とりあえず行こうか・・」

生氣なく学校へよたよた並んで歩く一人。
その間欠伸が止まらなくて、大口開けそうになるのを、零は手を当てて押さえ込む。

剣人は普通に何回も大きく口を開けて、欠伸をしている。
ふと、零が何か思い出すと、剣人に言葉を掛ける。

「剣人、昨日のあれで、学校行かない？」

「あれってなんだ・・・？」

零の抽象的な発言の意味を気だるい頭で考え始める。しかし答えを導き出せない剣人。

「あれって言われてもなあ・・・」

「昨日帰った時のあれよ」

「ああ・・・」

零の言葉でやつと思い出す剣人。

力の種類が色々ありすぎて、全てを覚えているわけではなくまだ体に馴染んでいなくて、臨機応変に使えるとここまで至つていなかつた。

「分かった、じゃ使ってみるか」

剣人はそう言いつと、零の手をひっぱり人気のない路地へと入っていく。

右手を突然ひっぱられ、剣人の行動が理解できない零は路地で立ち止まり剣人の右手を払うと、少し訝しげな田で言葉を発する。

「ちよつと、何すんの・・剣人」

「何するつて、瞬間移動するんだろ?」

「あんな目立つところで使えるかよ・・・

剣人はそれなりに考えていた。あの派手なエフェクトと、そして突然人前から消えるイメージを考えると、とても人前でそれをするわけにはいかなかつた。

「それもそうね」

「じゃ行くぞ」

雲が納得すると、剣人は頭で学校のどこに飛びか色々イメージし始める。

(…えーっと、人に見つかる場所は駄目だよな・・・いきなり飛んで人がいたら驚かせてしまうからな。トイレ・・?それはまずいな・・入っていたら・・)

(…うーん…そうだ…体育館の階段の下にある空間にしよう、あそこなら

体育館の壁で死角になっているし、上から見られることもない)

剣人は無言で一人頷くと、少し冗談めかしで、雲の細いきゅうとしまった腰に手を回し触れる。

突然の剣人の奇行に虚を突かれ、体を一瞬びくつとさせると、顔を赤くしながら雲が言葉を口にする。

「ちょっと・・・剣人いきなり・・・

「まあまあ・・・」

剣人の手から携帯が浮き出ると、エフェクトの後力が宿る。それを慣れてきたとは言え、まだ少し驚きの目で零はみていた。

剣人は頭にさつきの場所のイメージをし力を発動させると一瞬でイメージそのままの場所に移動した。

景色が急に変わった事に零が気づくと、思わず驚きの声が漏れる。しばらく、呆けていたが、腰に撒きついた剣人の手がいつまでも、離れないのに

気がつくと大きな声で怒鳴る。

「剣人・・・それセクハラつていうのよ！――！」

「バチ！――！」

「イタ――！」

二人は教室に向かうため、運動場を横切り、別館へと移動し始める。もちろん、さつきの零の強烈なビンタで剣人の頬は赤くなっている。苦笑いを浮かべながら右手を後ろ頭に当て、零に軽く頭をさげる。少し揉めながらも、一人は館内に入していくと、教室までたどり着いた。

「おい、剣人今日の試験いけそうか？」

高木が剣人が席に座るなり駆け寄つてみると、朝の挨拶を交わし、次に出たセリフがこれだ。

眼鏡を掛け、黒髪の短髪に少し長い顎、その顔立ちからは知性の高さが滲み出でている。

今日の試験も相変わらず自信ありそうな顔をしている。

「まあな・・でもお前ほんじやねーよ・・・」

高木は剣人と小中高と全て同じ学校で過ごしてきている親友だ。剣人は十分高木の頭の良さをこれまでのテストの結果で思い知らされている。

未だに点数で高木を上回った科目は一つも無かつた。

「今日は試験頑張るよー！」

H.Rで鬼塚がいつものように、独自の蘊蓄を述べた後、そう最後に生徒達に

励ましのよつよつ言葉を送ると、部屋を出て行く。

その姿を見つめる剣人の目は、この所の一連の鬼塚との交流で少し前まで外から見ていた

ただ、怖いだけのイメージとはまるで違つるものに変わっていた。

一見長く感じる4時間という試験時間は、受けている生徒たちからすれば

あつというまの時間であつて、釣瓶式に試験は終わつて行き、気がつけば、H.R.の時間を迎え
教壇の前には鬼塚が立つていた。

そして、それから何日か試験が続いたものの、光陰矢のごとじと
言われるようになつたといつまに日には過ぎていき、夏休み最後のH.P.を迎えた生徒達は笑顔を絶やすことなく
鬼塚の暫く見ることができなくなる顔を眺めていた。

「じゃあ、お前達、また新学期な、宿題忘れんなよ！」

鬼塚が一言生徒達にそう言つと、全ての前期の課程は終了し、長い長い夏休みに
突入していく。

鬼塚がいなくなつた後、すぐに帰宅するものもいるが、教室に残つて友達同士で
暫く雑談する者もいた。剣人達はは後者だ。

「高木よー、夏休みどうするよ?」

「俺か?特に決めてないな・・・」

「海でも行かない?」

「お、いいね」

剣人達が一人で、男同士の海への計画を練つていたところ
突然、その会話に分け入つてくる一人がいた。

「剣人君、高木君なんの話してるので？」

「あ、もう…」

木戸巴が帰ろうとしていた零の右手を引っ張りながら剣人達の所にやってきて話題に無理やり混ざってきた。帰宅を邪魔され、すこし怪訝な眼をしている零。

「海行こうかつて話してたんだよ」

「いいねー！」

「私達も一緒に行つてもいい？」

「え・・？ 良いけど」

巴の突然の想定外の言葉に男どもの目の輝きが一層強いものとなる。

「ちょっと私達って私も？」

「あつたりまえでしょーー！」

強引に『私達』の中に引きずり込まれ、後ろで困惑しながら俯いている零。

巴はその零の方を振り向き、したり顔で笑みを浮かべている。悩んでいる零に巴は近付き右手の平で壁を作り、二人でぼそぼそ話し始める。

「…チャンスじゃない 煮え切らない剣人くんとの関係を変えれるかもよ？」

「ちょっと…何言つてんのよ…別に私と剣人は…」

「いいの！いいの！はい決まりね！」

しじろもどろしている雫を押し切ると、巴は剣人達と話をとんとん拍子にまとめて

7月25日に近くの海へ一緒に行くことになった。

4人はその後一緒に帰路を辿る。

高木と巴は二人で絶え間なく楽しげに話していたが、そのテンションの高い一人に

ちょっとずつ会話を投げかけながらも、剣人と雫は比較的大人しめに歩いていた。

やがて、巴が家路が別れ、剣人たちに笑顔で手を振りいなくなる、

高木も同じように
いなくなると、結局家路が同じ一人は並んで一緒に帰ることになる。

「海か・・」

少し憂鬱そうな顔で、一言口にする雫。

雫は少し剣人の事をいつもより意識する気持ちが高ぶっていた。巴の言葉が頭に残っていたからだ。ずっと幼馴染として小さい時から近所で遊んできた一人。まったく恋心に似た気持ちが無いかと言えば嘘になるかもしない。

剣人はいつもと違つて、少し雫が静かすぎる所以場を和ませようと悪戯に言葉をかけてみる。

「海楽しみだな~」

「霧と海行くなんて何年ぶりかな」

「そういえば、小学校以来ね」

「そんなに経つか~」

会話が途切れると、剣人は口笛を吹きながら間を保つていたが
昔、霧と海へ行ったことを頭で思い浮かべているうちに、ふと気が
なった事を
言葉にしてみる。

「といえば、あの時お前変わった事言ってたよな?..」

「海の中へ変なあじへさんがいたって

「ああ・・・」

…そういえば、あの時私海の中で…

霧がその言葉に反応するか、歩きながら頭の中で昔起しつた奇怪な出来事を
回想しはじめる。

「剣人どこにいたやつたんだろ・・・」

幼い雫は、剣人を追いかけて海の中へ足を踏み入れたが見失つてしまつた。

「あの岩場辺りに隠れていたりして・・・」

「行つてみよ」

近付いていくと、海から突き出た岩場の影に、何か丸い人の頭のようなものが浮かんでいた。

それを見て雫は笑うと、静かに平泳ぎで距離を縮める。

「剣人！！みつけた！」

小さな手で掴んだその頭の持ち主は、頭に薄っすら白い毛が生えていて

黒い髪が鬱蒼と生える剣人と違う事に幼い雫はすぐに気がついた。やがて、その頭が手を離れ、海面に沈んだかと思うと、視界から完全に消えさせる。

雫は何か怖くなつて、砂浜へと戻るつとした時、足に海草のようなものが絡みつくのを

感覚で捉えると、水面の中へ顔を浸し中の様子を覗き見る。そのとき雫は見てしまったのだ。

海草と思っていた、絡みつくものの正体、それは朽ち果てて骨をむき出しにした

人の手のように見える。それを見て慌てて視線をずらした先に、額

からドス黒い血を流し、田の周りに骨を露出せているお爺さんの不気味な顔があつた。

その田のぐぼみにある灰色がかつた田玉が雫の視線とかち合つ。

「~~~~~」

雫は過去に見た鮮明な記憶の臨場感に、思わず体をふらつかせた。

「ん? なんだいきなり」

「え・・・いえ・・・別に・・・」

(…あれ、怖かつたわ・・・たぶん幽霊みちやつたんだわ・・・)

(…思い出しだけでも寒気が奔る・・・だけど・・・)

(…かなり前の話しだし、今更ね・・・)

気分を変えるように、顔を両手の平で挟むように軽く叩くと
ふつきたような表情を浮かべ、剣人の横顔を見つめ囁くように言
葉を掛ける。

「剣人、今度はいなくならないでね」

「はあ?」

剣人は突然の言葉に首を傾げていたが、雫の方に視線をやると、優しい微笑みを浮かべ見つめ返してくるので、少し照れ臭くなり顔を上にむけた。

(…雲は笑うと可愛いな…)

剣人は雲と別れ家に帰ると自室に閉じこもり、源信の巻物に目を凝らし張り付いていた。

まるで、試験前の勉強でもするかのような必死さを漂わしている。色々な力の存在を知り、それを自由自在に使えるようになるまで体に馴染ませるのが

しばらくの剣人の課題というか・・楽しみでもあった。

「今日はこれ使ってみるかな・・」

「靈視か・・・靈を見ることや話しを交わす事が出来る力か・・
そのまんまじやん・・」

（…なんか怖いな・・だけど、全ての力を身につたいし・・避けては通れないな・・）

剣人は正直なところは、まだ靈的な存在と向き合えるほどの度量は持ち合わせていなかつた。

しかし、徐々にではあるが、慣れて行きたいという前向きな気持ちもあって

そういう意味では今回の力を使う意義は大きい。

なぜ、靈的なものに慣れて行こうと思い始めたかと言えば・・・

佐伯達の一件で意識を奪われ、人を殺しかけた事実が、ずっと心

の底で燃り続けていた。

目に見えない陰の者の姑息な行動に、元々陽の力を体に宿す剣人は、普段あまり意識はしていないが、潜在意識の中でそれに対し燃え盛るような憤りと正義感のようなものが溢れていて、それに抗う術を見つける事を意識する心へ投げかけ始めていた。

「よし使つてみるぞ・・・！」

剣人の手に携帯が現れ、赤い靈視の文字がディスプレイに浮かび上がり

携帯は瞬時に消え、眩い光の粒が体に吸い込まれていく。

「えっと・・・説明書によると・・・」

巻物を見ながら、使い方を学ぶ剣人。

「人に見えない靈を見ることが出来、言葉を発せずに心で語りかけ、靈の言葉を受け取ることが出来る力」

「ふむ・・・声に出さなくともいいわけだ・・・」

「力を宿すと同時に自然に力は発動し、靈を見れる状態になると・

「え・・・」

剣人は既に力を宿しているので、周りに靈がいれば目に映る事に気がつくと

自分の部屋をまるで幽靈屋敷でも見渡すように、慎重に視線を流していく。

(…とりあえず、この部屋にはいないみたいだ・・)

強張った体を弛緩させ、胸に手をつき軽く息を吐いた。

(…一階にも降りてみるか…)

剣人は立ち上がると恐る恐る扉を開け、隙間から廊下を見渡した。何もないことを確認すると、静かに歩み出で、前屈み気味に歩をゆっくり進める。

こめかみに冷たい汗が滴り落ち、体は小刻みに震えていた。四方八方に素早く視線を飛ばしながら、ホラー映画でありがちな背後から突然現れる靈をイメージしてか、時折、激しい勢いで、体を180度回転させて振り向く。

その一連の動きを繰り返しながら、一階へと階段を降りていった。

(いらないな・・・・)

(ここは・・・!)

剣人が見据える先に部屋の扉があつた。

ここは以前祖父が使つていた部屋だ。

その祖父も亡くなり、今は応接間として使われていた。

(なんか、この扉開けるの怖いぞ・・・いそづなきがする・・)

(馬鹿・・これから慣れようつて時に、ショッパンから怯えててどうするんだ・・)

剣人は自分に考える暇を与えないように、勢いよく扉を開いた。

日の光がほとんど通らないこの部屋は、まだ暁の3時だというのに暗闇が覆い尽くしていた。

目がなれない剣人はしばらく、暗がりを恐怖に押しつぶされそうになりながらも

見据えたまま佇んでいたが、やがて目が慣れてくると、部屋の隅に人影のようなものを捉える。

(・・・いる・・何かいる・よ、と・・当等)対面ですか・・・

静寂が奔るこの部屋で、自分の喉を鳴らす音だけが剣人の耳に届いていた。

(何かいる…)

剣人は暗闇に目が慣れてくると、部屋にある照明の紐を手繰り寄せ、ゆっくり下方に引っ張り明かりを灯す。

小さな金属音と共に部屋全体が光に照らされ、そこにある全ての物を浮き上がらせた。

(ん?誰…)

先ほど影を捉えた場所に視線を下ろすと、中腰で座り込む若い男性の姿があった。

黒い制服を着てているところから、学生のようにも見える。

その面長な横顔にはどこか悲壮感が漂っていた。

さつきの剣人の心の声が、彼に届いたのだろうか。

しばらくして、その姿勢のまま、頭だけ横に捩りその哀愁に満ちた眼を向けてくる。

剣人はその眼に見据えられ、一瞬生きた心地を失い体を強張らせた。

『お前、俺が見えるのか?』

目の前にいる学生が、幽靈である事は、第六感のようなものですがに理解できただが

その存在を受け入れ、交信をする度胸が中々湧き起こらない。

『何か言えよ』

『見えてるんだろ?』

囁くような声を幾度か放ちながら
その体をお越し立ち上ると、畳の上から少し浮いた状態で
徐々に距離を縮めてくる。

(来るな・・)

その顔が覗き込むように接近してきた時
何かが剣人の中で大きく弾けた。

「近寄るな――！」

心だけではなく外にもその声が大きく漏れ響くと
その幽霊は驚いた様子で、後ろへすーっと素早く水平移動した。

『びっくりするじゃないか…』

少し怪訝そうな眼をして剣人をみつめ呟いた。
しかし、剣人の様子がさつきまでとは違う。
恐怖を許容する限界を超えてしまったのだろう。
破れかぶれとも言うような強気な気持ちを全面に押し出し
眼を血走らせながら、踵を浮かせた状態で幽霊に詰め寄り始める。
今にも襲い掛かりそうな雰囲気を醸し出していた。

「この～、気持ち悪いやつめ！人が大人しくしてれば
いい気になりやがって！」

息は荒く火照った体に怒りの様なものを充満させながら

自分を睨みつけてくる剣人に、恐れを成したかのか、幽霊は慌てた様子で言葉を投げかける。

『お、ちょっと、落ち着け！待て！話せば分かるー。』

「あ〜？」

剣人は血が頭に上つてしまつて、まともな思考ができない。そんな剣人の様子を見て、危険を感じたのか、壁に尻を押しつけ土下座じだした。

『ほんと、ごめん、つい調子扱いちゃって……』

「何様のつもりなんだよ」

『悪かつたつて、ごめんよ、取り合えず落ち着いて……深呼吸して……』

何故か幽霊に宥められる剣人。

その低位な姿勢を見ているうちに、だんだん、落ち着きを取り戻してくると

荒くなつた息をゆっくりにした物へと変えていった。

そして、一回深く息を吐き、その幽霊を静かに見下ろすと、さつきまでの恐怖が消えうせ

冷静に見れる事に剣人は気づいた。

「ふー、しかし幽霊ついているんだな」

剣人は額に汗を滲ませ、力が抜けた様子で後ろに体を軽く逸らす。

『はい、貴方の前にいますよ』

剣人の足元で正座をして、静かな口調で話す幽靈。さすがに幽靈だけあって、既に死んでいるせいか、気持ちを整えるのも早い。

失う物が無い余裕とでも言つべきか。

「ところで、えーっと、取り合えずなんぞここなの?」

自宅に不法侵入していた幽靈に、じく普通の疑問を投げかけた。

『空を漂つてましたら、2階の窓が空いてたのですから』

『なんとなく、そこから入ってきました』

「虫じゃないんだし、なんとなく入ってこられてもね~…」

『そうですね』

暫く、お互ひを探るように、言葉のやり取りをする二人。

幽靈の屈託ない率直な物言いを聞いていたうちに、剣人も地面に胡坐を搔いて座り

腹を割つて話し始める。しばらくして、二人は微妙に心が打ち解けてきたのか

友達とも話すように気軽に言葉を交わしていた。

『なるほど、あなたは特殊な力を持つていて

『それで私を見たり、話を交わす事ができるんですね』

「うん、これ内緒な」

「そういうや、お前名前聞いてなかつたな？俺は斎藤剣人だ」

『私は森大路浩太と言います』

「仲よくつて言つたら変だけど、まあ氣楽にしてくれ」

剣人はそう言つと、部屋の隅に置いていた座布団を持つてきて幽靈に座るように顎で促した。

その丁寧な対応に笑顔を浮かべると、ちょこんとその上に座るというよりは、風船がのっかかるみたいに、正座のままふわっと移動した。

「お前何か飲む？」

『いえ、幽靈ですから』

『できれば、お線香など炊いてもらえれば』

「そつか、ちょっと待つててな」

剣人は香皿と線香、ライターをこの部屋に置いてある仏壇から持つてくると、浩太の前に皿を置き線香を挿して、ライターの火を先端に近づけた。

線香の先が紅く燃えたかと思つと、ふーっとそれに息を吹きかけ煙を漂わすと辺りに独特の匂いが立ち込める。

『いいかんじ…心が洗われるようだ…』

何か悦に入った調子で呆けた顔を浮かべる浩太。剣人はその反応に満足げに笑顔を浮かべていた。

「ところで、こんな事聞いちゃ悪いかもしれないけど

『なんでしようか?』

「お前なんで死んだの?」

その言葉を聞いて、急に顔を曇らせ俯く浩太。

剣人はその様子を見て、言い放った言葉に後悔の念を禁じえなかつたが

取り合えず聞いてしまったものはしそうがないという事で、更に言葉を続けた。

「なんていうか、取り合えずこれも縁だと思う」

「話してしまえば、楽になるって事もあるんじゃないかな」

いじめられっ子を諭す教師のような剣人。

浩太はしばらく押し黙っていたが、やがて剣人の優しい眼に促されるように

押し込めていた感情を放ち始める。

『じゃ、聞いてください』

「何から話してよいやら・・・」

「そう、私は半年前に死にました」

「高校三年の冬です」

浩太は視線を下方に向けたまま、幽靈になつた今微かに残る現世の記憶の断片に身を浸しながら、それを剣人に漏れ伝える。

・・・

私は病院を経営する父がいます。病院の後釜に私を据えようと考える父は

私に医学の道を強制しました。その期待はとてもなく大きくそして重いものでした。

医学系トップクラスの大学に受かるため、それはもう、毎日毎日勉強していました。

しかし、思うように成績が伸びない。そんな私を父は勉強不足だと一蹴しました。

私は落ち込みました。こんなに頑張つてゐのに、なぜ成績は伸びないんだろう。

そして、結果が出ない自分を責めもしました。落ち込む私を見て、母はまだ頑張れと

言い続けます。日を重ねることに、私の中でどうしようもない不安と悲しみ、やりきれなさが増大していき、私を着実に追い詰めていき

ました。

ある日、私はその重圧に耐え切れなくなりました。限界でした。もう自分の存在意義すら

曖昧になるほど、何もかもが嫌になつていきました。

「そうだ、このまま死んでしまえば・・・
いつそ楽になれる。そんな風に思い始めたんです。

私は天井に横たわる梁にロープを垂らし自殺を図ろうとしました。
しかし、私は臆病だった。とても自ら命を絶つことができなかつた。
毎夜毎夜、何度もそれを繰り返すも失敗に終わります。そうしてい
るうちに死ぬのも
なんだか馬鹿らしくなつてきました。

・・・しかしある夜、私は父に成績が悪い事で2時間くらい説教を
受け罵られました。

私は部屋に戻ると、枯れ果てたと思っていた涙がまたあふれ出てきて
散々泣きじやくりました。やがて、その涙も止まり抜け殻のように
なつた私は、また机の中に仕舞い込んでいたロープを手にしていま
した。

もう駄目だ、生きていても仕方が無いって静かに心で呟きました。
電灯をつけず、ただ机の光だけが部屋を薄つすら灯しています。
上方に暗く映る梁を見て、ロープを投げかけようとした時・・・

「ん？」

「あれ、なんだろ」

梁の下に視線を落とすと、何か人影のようなものを視界に捉えま
した。

三角の帽子、淵がギザギザに擦り切れた袴のような物を来た

謎の人影。私はそれを見て恐怖しました。

私の部屋は3階に有ります。部屋の鍵は閉めていました。

泥棒が上がつてくるのは不可能に近いです。窓の外側には足をかける場所もなければ

隣接する家もありません。

その人影が私に近付いてくると、机の微かな電灯に照らされ、その正体を浮かび上がらせました。そして私は見てしまったんです。

青白い顔をしたお坊様の顔を。

黒い袈裟に身を包み、深編み笠を頭に被つた虚無僧のようなその姿。右手には黒い錫杖を握っていました。

私は腰が抜け、その場に崩れ落ち震えていました。
その坊様が急に錫杖を持ち上げたかと思うと、地面に突き立てました。

その際、錫杖の上部の丸い金属の飾りが擦れあり、不思議な音を部屋に奏でした。

そして私を静かに見下ろし、地から響くよくな低い声で言つたんです。

「首を吊らんのか？」

そう言われても、私は恐怖に体が竦み言葉を発する事ができません。

息をじくりと飲んで様子を窺うことしか・・・

そのお坊様は更に錫杖を床につき、同じ質問を何度も繰り返してきました。

「首を吊らんのか？」

「首を吊らんのか？」

「首を吊らんのか？」

私は恐怖のあまり目を瞑り体を震わせ黙る事しか出来ません。

しかし、しばらくしてその音が止んだんです。

それに気づいた私は、恐る恐る瞑っていた目を慎重に開けようと努めました。

徐々に部屋の様子が映し出されました。全てを目に映そうと瞼を完全に開け切ろうとした時、急に首を絞められる感触を覚えたんです。その力はとても強く、そしてあつといつ間に私の意識を現世から遠ざけてしまいました。

「眩しい」

朝日の光が瞼に直射したのでしょうか。眩しさに意識を取り戻した私は半身起こしました。朝日の強烈な日差しが部屋全体を照らしていました。
私のその時の気分はとても爽やかなものだつたんですね。
体も軽く絶好調でした。
勢いよく立ち上がり部屋の中心に視線を送りました。
しかし、何か田の前に遮るものがある事に気づきました。

「なんだこれは？」

「足？」

私は一瞬驚いて体を逸らしました。

そのせいで上方に視界がずれた事で、足の先にあるものを確認できました。

梁に結び付けられたロープの輪に首を吊つて、青くなつて死んでいました。

る自分の姿を・・・

私は呆然とそれを眺めていました。
初めは理解できませんでした。その不思議な光景に、ただ視線を置いていたまま呆けていました。

中々私が降りてこない事に気づいたんでしょう。

母が大きな声をあげ扉を叩く音がします。鍵を回して過激な金属音を垂れ流していました。

しかし鍵が掛かっていて開きません、そして母は諦めたのか一階に降りていきました。

時間が流れています。口が高く上り、徐々に西に傾くと夕日が空を染め始め、そして夜の闇が辺りを包みました。

父が帰ってきたのでしょうか。チャイムの音が上まで聞こえてきました。

下で騒がしい声が聞こえています。暫くして、階段を大きな音を立てて誰かが上がってきました。扉の外まで来ると、またあの金属音と共に大声で中に怒声を浴びせ続けています。

その声が止んだと思つたら、突然扉が開かれました。
父が蹴破つて入ってきました。

そしてその後は・・・

私は葬式で棺おけに横たわる青い顔をした自分の姿を、空に浮きながら上から

眺めていました。この時私は死んだんだなって強く実感しました。

私はその後は家に戻らず、あちこち漂っていました。

ふわふわと空中を舞い、空の上からあらゆる景色を眺めていました。
ぼーっと浮いている間、ある事を思つていました。

死んだら天国か地獄か行くはずなのに、なんで現世に残っているのか?

暫く考えましたが、その答えは出ませんでした。

その後も、一向にあっちの世界からのお迎えは来ないし、行く当ても分からないので雲が流れるように、自分も気まぐれに流れていきました。

「なるほど、そうしてる間に

「おれんちの窓から侵入したという事か？」

「そういう事になりますね」

剣人は幽霊の長い話を、静かに聞いていた。
とても不思議で非現実的なその話は、ある意味、源信から聞いた話と重なるような気さえしていた。

浩太の憂鬱。

「まあ、長々とじ」静聴有難うござりました

「わてと、僕はそろそろお暇しますかね」

浩太は取りあえず話を全て聞いてもらつた事で、さっぱりしたのか表情から曇りが消え、さばさばした表情で言つた。

「ちよつと待てよ」

立ち上がろうとした浩太を呼び止める。
さつきの話を全部聞いた後、剣人の脳裏に何かひつかかるものがあつた。

「お前、これから先もずっと空を漂つていいくのか?」

「はあ……、たぶんそうなりますかね」

「いやさあ、それは良いと想つんだけど」

「よく connaît ジャン、現世に残る幽霊つて何かこの世に未練というか……」

「やり残しみたいな物があつて残つてるとか、TVで言つてるよな」

「お前、自分でも言つてたけど、この世に残つている事に疑問があるんだろう?」

剣人は浩太の目を真直ぐ見つめて、彼の心に残る闇、たぶん彼自身でも自覚していない暗い部分を掘り下げるよう言葉を重ねた。

「はー、疑問……、疑問か……」

浩太は腕を組み頭を右に左へと傾けながら、悩む素振りを見せる。

「でな、俺が思うには、お前の話聞いたかんじじゃ」

「その坊さんの幽霊か妖怪か知らないけど……」

「たぶんそいつに殺されたのだと思うんだよ」

「はー、なるほど!」

浩太は左手の平を水平にして、その上を右握りこぶしでポンと一度叩いた。

剣人はその様子を見て呆れた表情を浮かべていた。

まあ、幽霊だし、多少ずれてるのかな……。思考能力も生きて
いる時よりは
あれなのかもしねー……。

気を取り直して剣人は更に話を続ける。

「お前はたぶん、その事で無意識のうちに現世に縛られてるんじ
やねーのか?」

「だから、あっちの世界にもいけないんだよ」

「なるほど…………」

剣人の話を聞いていたうちに、なんとなくそつなかと思い始めた
浩太は
頭をうな垂れ、絶望にくれた表情をしていた。

「そうだったのか……、私は被害者なんだ」

「殺されたんだ……」

浩太は完全に膝に顔を埋めてしまい、泣き始めた。

「おいおい、何もそこまで落ち込まなくても……」

その言葉を聞いて浩太は突然、泣き止んだかと思つと背筋をピンと
して

剣人に向き直り平然とした顔で口を開く。

「それもそうですね」

「今更ですね」

「死んじゃったもんは仕方が無い」

「いいつ……、相変わらず変わり身早いな。
幽霊ってみんなこんななのかな？

浩太を顔を歪め見つめながら、頭の右側を搔き鳴る剣人。

「しかしな、ちょっと俺は気になり始めたぞ」

「そんな危険な奴がうろうろしてちゃ」

「怖いしな…………」

剣人は顎に人差し指を当て、何かを考え始めていた。

たぶん悪い靈か妖怪、正体は不明。

だけど、現に浩太はそいつに殺されていて被害は出ている。

果たしてほつとていいものだろつか？いや良い訳ないよ…………。
でも、居場所も分からぬし、俺にはどうにも出来無さそうだ
。

困った時は……、源信のじっちゃんだ！

剣人は浩太の話をまとめているうちに源信に行き着いた。
彼ならそういう類の事には詳しいはずだ。

鬼塚って線もあるけど、鬼塚がそういった靈と
会つたことがあるか、分からぬわけで。

「よし、浩太」

「俺と来いよー」

「え、どこへですか？」

キヨトンとした表情を浮かべる浩太。

剣人は立ち上がり、浩太を見下ろしながら自信に満ちた笑みを浮か

べていた。

「言つても分からぬだらうから」

「ただ、お前の悩みが解決されるかもよ？」

「黙つてついて来てくれないか？」

「悪いようにはしない」

表情から笑みを消し、真剣な表情で浩太を見つめる。

浩太は今までのやり取りから、剣の人となりをそれなりに理解し始めた。

なんか良くなき分からぬけど……、この人は私みたいな野良幽霊の話を

とても親身に聞いてくれた。それにどこか頼もしい。

この人について行けば、何かが変わるかもしれない……。

「私行きます、憑いて行きます！」

剣人は浩太の決心を聞くと、静かに頷いた。

そして、携帯を手から浮び上がらせる。ディスプレイに瞬移の赤い文字が

浮かび上ると、携帯は消え、光の粒が剣人の中に吸い込まれていく。

この間0・5秒。

「うわあ、なんですかそれ……」

「俺の力だ！」

「すごい……」

剣人は得意げな表情を浮かべ言つた。
驚いた様子で剣人を見る浩太。

「ふ、すごいのはこれからだぜ」

剣人はそう言つと、浩太の幽体に触れようとすると
すり抜けてしまう。

「あれれ、幽靈はどうなのかな……」

「まあ、肩の辺りに手を置いてみるか」

幽体の肩に触れるというよりは、手を中にいたかんじで
瞬移を試してみる剣人。

浩太は少し怯えた目で、剣人を見上げている。

「大丈夫、俺を信じじろ」

「は、はい！」

頭の中で鬼塚家の玄関前をイメージすると、剣人が一言呟いた。

「行くぞ！」

「着いた」

剣人は触れていた右腕の先に視線を送る。

「うわ、ここどこだ？」

浩太ちゃんと憑いてきてるな、幽霊でも。OKと……。

瞬移は触る対象がいかなるものでも、一緒に連れてくることが出来るようだ。

「さーっと、中入るぞ」

「ん~、開かねえ」

「留守か?」

剣人が立派な大きな木の門を何度も揺するが、鍵が掛かっていて開かなかつた。そんな様子をよそに浩太が得意げに、門をすり抜け向こう側に行つたかと思うと、また帰ってきて更に行つてと往復を何度も繰り返し、優位性を見せ付けていた。

「はいはい……幽霊はいいね」

これみよがしに見せ付ける、浩太の無邪気な姿に呆れ氣味に目を眇める。

「門にチャイムついてないぞ」

剣人は門を見渡すがどこにもホンが設置されていない。

「なんでないんだよ……」

「誰かいませんか――――――！」

大きく息を吸うと中へ向けて大きな声を放つた。
しかし返事は帰つてこなかつた。

「うーん、仕方ないなあ……今日は帰るか」

剣人は諦めて家に帰ろうと、浩太に手を振つて呼びつけようとした時

突然上空から聞こえた老人の声で足を止めた。

「あ、すまなんだな」

その声のする方を見上げると、源信が地上から十メートル程の高さに浮いている。

「うわ……」

その姿に驚き思わず尻餅をつくと、口を開いたまま源信を見上げた。

「源信様！ な、なんで空に浮いてるの……？」

震える指先を源信に向けた。

「ふん、馬鹿たれ、勉強不足な奴だ」

「せつかく力『』えてやつてるのに、空舞の力も知らんのか」

「空舞？」

剣人が急いで巻物を調べようとするが……

「それは後でいいから」

源信は剣人を諫めて玄関前に下りてきたかと思うと、右手で剣人の肩に触れた。

瞬移で中に入ってくれるのか……あ！

「あ、あそこにいる幽霊もお願いします」

「ん？ あいつか？」

「そう」

剣人は浩太を指差すと源信に瞬移の対象に加えてもらうよう頼んだ。

源信は視線を幽霊に向けると、大きな声で浩太に呼びかける。

「おい、そここの幽霊」

俺の事か？と言わんばかりに、自分の鼻を右人差し指で差す浩太。

「そうじゅ、こいつちゅこい」

源信が左手の平を幽靈の方向に翳し、手をひらひらして呼びつけ
る。

浩太は静かに頷くと、滑るように源信の真横までやつてきた。
その左手がそつと浩太に宛がわれる。

「一ノ名様ご案内～」

源信の間延びした口調を皮切りに、瞬時に畳みの部屋へと三人は
移動した。

「はい到着～、御二人様1000円になります」

おどけた調子で源信は言つと、手の平を一人に差し出す。

「じつちゃん……なに遊んでるんだよ」

剣人は余程暇こいてるんだな～つと暗に思った。

「か、必ず払いますから！」

「私の母に言えば……」

浩太……、涙浮かべながら……〔冗談通じない奴……〕。

「じりじり、間に受けるな、幽靈」

源信は罰の悪そうな顔を浮かべて、持っていた節くれだつた杖の
先を浩太に軽く当てた。

「いて」

その先が当たると、浩太の頭が少しだけ下にずれる。剣人はそれを見て、思わず源信に言った。

「じつちゃん、幽霊に触れるのか？」

「触れるぞ、はあ……しかし、お前本当に勉強不足じゃの～」

目を瞑り頭を左右に振つて、剣人の無知に呆れていた。

「

「なあ、じつちゃん」

「話があつて来たんだ」

「聞いてくれるか？」

源信は剣人の言葉に返事をせず黙つたまま、お茶つ葉を湯のみに入れて、ポットのお湯をそれに注ぐ。

向かい側に座る剣人と更にその横に座る浩太に、時折細い眼で視線を飛ばしていた。

「剣人、ちょっとじつちいい」

「ほい」

源信の言葉に頷くと、立ち上がりテーブルの向かい側に回りこんで、傍らに来て正座した。

右手で陶器の茶碗にお茶をいれながら左手を剣人の頭に当てる。

「幽靈は線香でいいか？」

「僕は特に……」

「遠慮するな」

お茶を注ぎ終わると、剣人の頭から手を離した。

古びた木箱から線香と香皿を取り出し、線香を皿に挿すと、指先からライターみたいに火が出たかと思うと、それを線香に近づける。炎が線香に燃え移り赤くなると、皺くちゃの唇を細くし、ふつと息を吹きかけた。

周りに立ち込める線香の匂いに、浩太はうつとりとした表情を浮かべている。

「源信様つてマジシャン？」

その様子を見ていた剣人が思ったことを口にした。

「ふー、お前つて奴は……」

「まあ、修行不足は目を瞑るとして、取りあえず、お前の言いたいことは分かったぞ」

「へ？」

「お前はこの幽靈を殺した影坊主の事を聞きたきたわけじやろ？」

影坊主？ 浩太を殺したかも知れない坊さんの事か……しかし、まだ何にも言つてないのに、何で分かるんだ？

「た、たぶん、そうだよ」

確信がきつちりもてないが、剣人は取りあえず肯定をしてみた。

「で、お前はこいつも思つてるだろ？」

「出来れば影坊主を倒したいと」

源信は目を眇めて剣人の反応を見ていた。

剣人は初めは源信の全てを見透かした言葉に驚き、啞然とした顔を源信に向けていた。

しかし、徐々に太い男らしい眉毛を吊り上げ始めると、真剣な表情に変わっていく。

「俺、許せないんだ……」

「浩太の命を奪つた奴を絶対許せない」

「それに、放つておいたら、第一、第三の被害者が……」

「そんな事させるもんか……」

正座した太ももの上で両拳を握り締め俯く剣人。浩太は空を見つめながら、静かにそれを聞いていた。
そんな剣人の姿をして、源信は何か確信めいたものを直感した。

「いつは、やはり……だが、まだまだ未熟、さてどうしたものか見開き

剣人を見据え一際大きな声で話し始める。

「剣人よ、はつきり言つぞ」

「今のお前では影坊主にはどう転んでも勝てない」

源信は剣人に厳しい目つきで現実を語つた。

剣人は動搖した様子で、源信に力ない目を向ける。

「奴は妖怪の中でも底辺に位置する下級妖怪」

「わしは妖怪や靈体の強さによってランクをつけていての」

「S S、S、A、B、C、D、E、F、それ以下に分けてい」

「ワシが見立てた影坊主の強さは、F級、そうF級妖怪じゃ」

「そして、そのF級妖怪にすら、今のお前では勝てない……」

源信の言葉が胸に突き刺さる。

視線を太ももに置いた握りこぶしに向け、体を強張らせた。自分の非力さに体を震わせ憤りを顕にしていた。

その様子を見て取り、源信は表情を緩めて柔らい口調で言葉を切り出す。

「取りあえず、お前、基本を覚えていくか？」

「つまくいけば、上級クラスくらいなら倒せるようになるかもしね」

「え、本等ですか？」

「うむ」

右拳を持ち上げ内側に力強く握りこむ。

失いかけた自信を取り戻したのか、強気な表情を浮かべていた。

俺はやる……絶対強くなる……

「あら、剣人も来てたの？」

まさかの声に慌てて振り向く剣人。

見ると、零が柔道着を着て、顔に汗を滲ませながら立っていた。

「あれ～～、お前なんでここにいるの？」

「ああ、今日ね、私も源信のおじーちゃんに力もひったの」

「えええええ」

田を大きく見開き、源信と零の両方へ素早く視線を往復させる。源信は口端を右上に引っ張りにやけていた。

「源信様、どうこうことだよ

「力は陽の力を持っている奴にしか与えないんじゃないの？」

剣人は半ば混乱氣味に源信に聞いかけた。

散々長話を交わし色々言われて、やつと力を手にした剣人。手にするまでの時間はさほど長くは無かつたが、その過程がとても重く感じられたのも事実。

そんなやつと手にした特別な力を、あっさり雲にも分け与えたと言つ。

軽いんじやない？って剣人が思つても不思議ではなかつた。

「まあ、二人座れ」

源信がそう言つてその場に自ら先に座つた。

剣人は源信に顎で促され、立ち上がりかけた体を、座布団の上にお尻からゅっくり落としていく。

道場でさつきまで稽古でもしていたのだろうか、雲は顔や手に汗が滴り落ちていた。

首に掛けていたタオルでその汗を軽く拭いさると、剣人の横に静かに座つた。

一人が向いに座るのを確認した源信は、真剣な表情を向けて語り始めた。

「雲はな、自ら力が欲しいと、ここへやつてきたんじや」

「しかも、力を得るためになら陰の者とも戦つていいと」

その言葉を聞くや、雫の方へ振り向きざまに、強い口調で剣人は言葉を投げかける。

「雫、なんで力欲しいんだよ」

「それに陰の者と戦うつてどういうことだよ？」

剣人は真剣な表情を向けて、強めの口調でその真意を問いただす。

「私……」

雫は何かを言いかけたが、言葉をすぐに引っ込め下を向いた。その真意は実は単純なものであつたが、今、剣人の前では言ひづらかった。

「わ、私の勝手でしょ、ほつといて……」

雫はその理由を今は言いたく無かつたので、剣人と反対方向に顔を背けて突っぱねた。

「なんだよ……」

多少不機嫌そうに低い声で言つたが、雫の性格は良く知っていた。これ以上言つとケンカになるのは目に見えている。

「ま、いつか……」

剣人は問いただすのを止めて、その場で軽く頭をうな垂れた。
言いたいことは山ほどあつたが、それを敢て感情と共に抑え込んだ。

源信はその二人の微妙な空気を、意に介せず話を続ける。

「ワシも初めは面食らつたぞ、だが、零が本気なのは一目で分かつた」

「そして、その時零の体に溢れんばかりの陽のオーラが湧き立つのを見てしまった」

何！？ 零にも陽の力が……？

剣人は零の横顔に思わず目を向けた。

「ワシが力を与える者の条件、それは性別でもなければ、力の大小でもない」

「要はいかに、本気であるか、そして、陰の者に立ち向かえる心の強さを持っているのか」

「その一点がとても重要なんじや、そしてワシは零がその二点を兼ね備えていると判断した」

零が……

零は真面目な顔で宙に視線を置いたまま、黙つて話を聞いていた。
普段のどこかおつとりとした、零の雰囲気とは何かが違う。
剣人は凜とした表情を覗かせるその横顔から、それをひしひしと

感じていた。

源信は一人の様子はなんのその、マイペースで次々に言葉を並べ立てていく。

「 霊はな、お前ほじじゃないにしろ、陽の者としてのポテンシャルは並ではないぞ」

「 こいつが～？」

「 なによ～！」

田を丸くしながら、靈の横顔に疑念の目を向けた。

靈は多少蔑が含まれた剣人の言葉に、不機嫌な顔を向け口を尖らせる。

田を細くして剣人を観察していた源信が、おどけ気味に口を開く。

「 はは～ん」

「 お前あれか～、靈より陽の力はずつと上だと思つてるんだな～」

「いや、そんなこと……」

押し殺し気味に言葉を発する剣人。

テーブルに視線を下ろして、手を足の太ももの上で遊ばせていた。

靈より力を先に使つてゐるんだし、今日使い出した人間よりは、自分が上だと呟つ気持ちは諫めない。

「確かに、先に力を使い始めたのはお前だし、ポテンシャルじゃお前の方が遙かに上だが……」

「零の吸収力と勤勉さは大したものじゃぞ」

「現にここに来て能力を使えるようになつてから、5時間しか経っていないが」

「その間ワシの話を真剣に聞き、主たる力の名称とその効果を頭に叩き込んで、それをワシとの組み手で実践した事によつて」

「既にその実力はF級妖怪を軽く凌ぐじやろつな」

源信に色々褒められて、零は照れ臭そうに微笑んだ。

しかし、その零とは対照的に剣人の心中は、大波が激しく浜に押し寄せるが如く、荒々しく揺れ動いていた。

剣人はなんといつても男だ。そして保守的な父母から、男は強くあるべきという理念を植えつけられていたため、今の源信の言葉に火がついたのは言つまでもない。

「それってつまり俺よりこいつが強いつて事ですか？」

「そうじゃ、今のお前よりずっと強いぞ」

「なんなら、組み手でもして試してみるか？」

「そんな……」

その流れを聞いて一番驚いて、そして困惑を見せたのは零だ。

じよ、「冗談じゃないわ……なんで剣人と……」

零は源信の顔を見つめて、手を合わせて苦悶の表情を浮ばせる。言葉は発していないが、剣人と戦う事に対する強い拒否を源信に送っていた。

「はー、仕方ないの~」

「じゃ、それは無しにするか、それじゃあ……」「

「いや……」

源信が零の意を汲み取り、違う話を切り出そうとした時、剣人が立ち上がり叫んだ。

「零、俺と戦つてくれ!!」

「ええ……」

「お前の力が見たい……」

剣人の目に熱い炎が渦巻いているかのように、やる気を全面に押し出していた。

男の意地みたいなのが滲ませている。
その暑苦しい視線を一身に受ける零。

困惑氣味に顔を引きつらせ、両手の平を宥めるように、剣人の顔の前に力なく出していった。

苦笑を浮かべながら、源信の方にちらちら視線を送る。

ちよつと……本氣だわ、剣人。どうじょ――――――！？ 源信
様なんとかして――！

「雲、もう男がここまで言ひては、止まるもんじゃない」

「返り討ちにしてあげなさい！」

雲が困っているのは分かつてたが、剣人のこの面ぶつた様子は
とても治まる様なものではなかつた。

源信は半ば諦め氣味にそう伝えると、最後には口元を綻ばせ、雲
にやけつけばかり氣味な言葉を飛ばしていた。

「そんなん……」

「これはワシの命令じゃ――！」

「拒否すれば力返してもらいうさぎ？　いいのか？」

その言葉を聞き、雲の表情が一瞬曇る。

そんなん、せつかく力を得て、結構分かつてきたりって頭の中
で葛藤していた。

しばらく雲は困った表情を浮かべ、顎に人差し指を当てて頭の中
で葛藤していた。

「うだ――すぐに負けちゃお……

「雲、本氣でかかるこよ――！」

「手加減したら絶交だかんな」

剣人の言葉でさつきの案が、早くも打ち崩される。
窮地に追い込まれ、苦悶の表情を浮かべる零。

どうしよ――――!?

地獄界、セラ洞窟。

「よし、お前たちこいつちやーいー」

源信の部屋の壁に立て掛けられた古めかしい大きな鏡台。真正面に接近して立つ人間の姿が、すっぽり入るくらいの大きな鏡の前に、源信は真直ぐ向き直りその場で足を止めた。

「じゃあ、この鏡の中に入るぞ」

「はい……」

雲はその源信の突飛な言葉に、慌てる様子もなく頷いた。

「え？ 鏡の中って何だよ？」

剣人は雲が源信の言葉に何の動搖もなく頷いたので、驚いて周りにその意味を問いかけるも返事は返つてこない。

「ほんじやわしから

「お邪魔しまーす」

源信は鏡に向つてひょいと小高くジャンプしたかと思うと、鏡の中へ小さめの体が吸い込まれていった。

その後を他人の家の門口で挨拶するかのようにして、続いて中へ雲も入つていく。

「うわ、なんだそれ

二人が鏡の中へ淡々と入つていくのを目の辺りにした剣人。

呆気に取られた表情を浮かべる。

そして、鏡の正面で右往左往しながら、踏ん切りがつかない様子でその場に留まっていた。

「まあ、あの妖怪じーさんの家だし、これくらいあつても不思議じゃないよな~」

剣人が源信に聞こえてないだろ?と思つて、その場で言いたいことを言うと

「ちゃんと、鏡の中にも声届いてるぞ」

「うわ~や~いや~言つてないで入つてこんかい」

「よ~~わ~~む~~し~~け~~む~~し~~ウヒヤヒヤ」

鏡の中と外の世界は密接に繋がつていて、音は鏡の内からも外からも聞こえるようになつていた。

中々警戒して入つてこない剣人に向つて、怒りの琴線に触れるだろ?と思われる言葉を源信はおどけて外へ投げかけた。

案の定、剣人はそれに顔を真つ赤にして反応した。

「弱虫だと~、言わせておけば~!」

「浩太! ちよつと中つてくから、その辺散歩してくれ」

部屋で静かに正座したまま動かない浩太に向つてそう告げると、浩太は何も言わず、静かに頷いて、壁をすり抜けどこかへ飛んでい

つた。

「さーって、行くぞ〜、オラー——！」

部屋の後ろに3歩下がると、助走をつけて中へ踏み込む剣人。鏡に当たる瞬間思わず、胸の辺りで身を守るように手を交差させ目を瞑る。

中に入ると、何か地面にある出っ張りに足を引っ掛け、前のめりにこけそうになつたが、右足で持ちこたえ、たらたらを踏みながらも、倒れこむのを拒否した。

「welcome」

源信は相変わらず軽いかんじで、英語で剣人に話しかけた。

「よつこや、地獄の3丁目、セラの洞窟へ」

剣人は地獄という物騒な言葉を耳にして、真顔で源信に問い合わせる。

「地獄つてなに？ 洞窟つてなんなのさ」

「なーに、簡単なこつた、こゝは地獄にあるセラ洞窟の一部を間借りした空間なんじゃ」

「閻魔大王に頼んで、あの部屋とここの空間を大鏡で繋いでもらつてある」

剣人は相変わらずなんでもありだなつて思ったが、今までの経験上、さもありなんつと納得し、大して動搖を見せなかつた。

もう妖怪だろ？が、地獄だろ？が、天国だろ？が、何でも来いといつた心境で開き直っていた。

「外で修行すると、建物やら、地面やら、石燈籠やらが壊れてしまふんだな」

「激しい戦いや修行は、ここにある事にしていい」

「なるほど」

剣人は話を聞き終えると、まじまじと周囲に視線を這わせながら、この場所の全体像を把握しようと努める。

赤い岩肌が地面や周囲から天まで覆うドーム上の広い空間。大きさ的には学校の運動場くらいはあるだろうか。小さな岩が地面にあちこち伸びているのが分かる。

足場悪いな……」けなこよつにしなこと。

#

「ああ、お前たち夫婦喧嘩始めなさい」

源信がいやらしい笑みを浮べながら、一人に視線を巡らし言つた。

「夫婦喧嘩つて……」

「お前たち両思いじゃね？」

「え……」

剣人が源信の唐突な言葉に反応したかと思つと、更に源信は真顔で一人に鋭い言葉を投げつけた。

次の瞬間、お約束の言葉が一人から、ほぼ同時に源信に向けて放たれる。

「そんなわけないです、ただの幼馴染ですよー。」

「んな」とあるかよ、ただの幼馴染ー。」

ほぼ、同内容の言葉を同時に言つた事に気づいた二人は、少し罰が悪そうに周りに顔を向けたり、口笛を吹いたりしてしまかしていた。

「おほん……、それより零勝負だー！」

今の雰囲気を嫌つてか、先に剣人が零に向つて口を開いた。

「ええ、うう、本氣でやるの？」

「当たり前だー！」

剣人は鏡に入る前の熱い闘争心を思い出したのか、急に顔つきを変え零に強い口調で言った。

駄目だわ……これは何言つても聞かない目よ、仕方ないな。

「ああ、零よ、お前『陽力』と『守身』の力だけ使用しなさい」

「今の剣人に『神器』まで使うと死んじゃうかも知れないからな」

「分かりました」

源信は怪我でもされでは困ると思い、力を二つに絞るよう零に指示した。

剣人は一人の会話の中で聞きなれた力の名称一つと、知らない力の名称一つがある事に気づいた。

しかし、今巻物を調べてる時間も無さそうだし、取りあえず聞き流して、零の動向に目を向けていた。

「仕方ないけど、剣人……いくよ」

零は低い声でそう剣人に告げると、覚悟を決めたのかその場で両足を隙間無く閉じて、足元を揃え神妙な面持で佇む。

剣人は零が力の発動のエフェクトをどういうものにしたのが気がになり、その発動の瞬間を逃さないように目を凝らしながら、その時をじつと待っていた。

零は両手を前に突き出し、まるで、水道の蛇口から流れれる水を溜めるようなかんじで手の平を合わせた。

その受け皿のように模つた両手の平を水平にしたまま口元にもつてくると、そこへふーっと息を吹きかける。

すると、手の中から2枚の小さな紙ふぶきみたいな物が空に放たれると、空氣に溶け込むように消えて、光の粒が零の体全体に吸い込まれていく。

なんか、地味だけど、かつこいいぞ……

剣人はその美しささえ漂わす、零のエフェクトに目を奪われていた。

光が零の体に吸い込まれると、光の蛇みたいなものが零の足元から伸びてきて、幾重にも零の体に巻き付き、やがてその姿を完全に光で包んで隠してしまった。

次の瞬間、零を覆っていた光が体から離れ、無数の小さな光の粒子となつて四方に飛び散つたかと思うと、零の姿が剣人の目に飛び込んできた。

「巫女さん？」

零の姿を見て直感で剣人は言った。

「うん、そうだよ」

白い小袖に紺袴、足袋に草履、典型的な巫女装束を零はその身に纏つっていた。

「お前なんで巫女？」

剣人は零のその姿を見た第一印象は、『とても似合つていて、かわいい……』だった。

取りあえず、巫女ルックを選んだ理由を尋ねてみる。

「私、子供の時から毎年正月に神社参り行くんだけど、そこにはいつも巫女さんの姿を見て、いいな～ってずっと憧れてたの」

「ほー」

「まー、あれだ、やろつか……」

剣人はあまりに清楚で可憐らしい巫女さん姿の雰に、どこか戦意を削がれてしまっていた。

「じゃ俺も」

剣人はそう言つと、力を発動しようとしたが、一旦でた携帯のディスプレイに赤い文字が一つも灯らないうちに、すぐに携帯が消える。

能力発動を途中でキャンセルしたようだ。

剣人はそれなりに力の種類を知つてはいたが、戦闘系の力の知識がほとんど無かつた。

これから零と戦うにしても、守身以外思いつかないのである。その事を能力の発動中に気づいた剣人は途中でそれをキャンセルし、その場で腕を組んで小首を傾げていた。

「何してるの？」

剣人のやるきがあるのか、無いのか判別つかない様子に、少し不機嫌そうに零は言った。

実際の所、本当は剣人と戦いたくは無い零。

剣人の強い要望に合わせて、力まで発動させてるのに、その零の目の前で力の発動を止め、あまつさえ、背中をこちらに向けて悠長に物思いに耽る剣人に、温和な零でもさすがにいらいらしていた。

「そうだ！ 取りあえず、守身は当たり前として、あれも追加だ！」
「これでいいこう。

「零悪い悪い！」

剣人は何か思い出したのか、顔をあげて向き直り、呆れた顔を浮

かべる零に愛想笑いをふりまき手を振った。

そして、一転して真剣な表情に変えると、両足を開き氣味に地にどしどと構え、力の発動を試みる。

携帯が剣人の右手の平から、開いた状態で浮かび上ると、ディスプレイに赤い文字が映される。

それが手からふわっと離れ、空気に溶け込むように消えると、光の粒が剣人の体の中へと吸い込まれていく。

「OK!」

剣人はその場で屈伸運動をすると、あっけらかんとした顔を零に向けた。

一応守身は発動しているものの、イメージが曖昧でその姿に変化がなかつた。

透明な防御壁が、体を纏つていてる状態だ。

零の巫女姿を眺めながら、今度この力を使うまでに「格好いい戦闘服」でも考えておかないといけないといけないなつと暗に思つ。

「さてやろうか」

前屈み気味に対峙し、多少緊張気味に動きやすい姿勢で構える二人。

剣人は足元が気になっていた。

さつき、この世界に来たときに足を引っ掛けたような小さな岩が、そこかしこに点在していて、とても足場が悪いからだ。

「ふふふ、零いい物見せてやろう」

剣人は零に不敵な笑みを浮かべ言つた。

足元と天井に視線を往復させながら、距離を測り何かを試そつと
しているように見える。

大体把握したのか、視線を足元に向け深い息を吐くと、意識を集
中し始める。

次の瞬間 剣人の足がすーっとその場から上離れたかと思うと、
地から1Mの付近まで浮かび上がっていた。

「ははは、どうだー、見たか！」

零をその位置から俯瞰し、得意な表情で吠える剣人。

「へー驚いた、空飛べるんだ」

「さつきワシが見せてやつたからな」

零はこの力は知らなかつたようだ。

目を丸くして剣人に物珍しげな視線を向けていた。

源信は退屈そうに剣人を見上げている。

御託はいいから、さつきと戦つて欲しいと言つのが本音だろうか。

#

剣人は空に浮いたおかげで、足場の悪さを気に留める必要がなく
なつた。

取りあえず、試運転とばかりに、地から1M付近に広がる空間を
アイススケートでもするかのように、比較的早い速度で体を滑らせ

る。

洞窟内の冷たい空気を顔で受けながら、気持ち良さそうな顔ではしゃぐ剣人。

大体空を飛ぶ感覚が掴めて来ると、零から10メートル程離れた場所に、弧を描くようにして止まり、宙に浮いたまま向き直った。

「じゃこいつかな……」

空手のように両手をずらして構えるものの、型はでたらめだ。ただ、やはり戦うと言つても相手は女の子、しかも零。躊躇する心もあるし、手加減もしないといけないかなと思いつながら、最初の一撃をどうこつたものにしようか頭を悩ませていた。

まー、取りあえず、守身もある事だし、ダメージなんて『えられない』んだから、軽く蹴りから行くか……

「ほんじや、行くぜ！」

剣人は大きめの声で零に向けてそう言い放つと、零に向って素早く空を滑走していく。

その勢いを体に乗せて、右足を零の胸の辺りに蹴りだした。

「うわ、ぐは」

滑走する勢いと共に全体重を乗せて放つた蹴りが、零の守身でイメージ化された巫女服に触れると、ダメージを『えるび』ころか、逆に剣人の体ごと反対側へ弾き飛ばされてしまった。

「なんだ今のは!?」

剣人はこの結果は想定していなかつた。

いくら守身で守られていようとも、ダメージは無理にしても、その壁に蹴りこむくらいはできるだろうと思っていたからだ。

しかし、実際は雲の巫女服を蹴った感触すら覚えないまま、何か見えない力に後方へ吹き飛ばされた。

その様子を何か気が抜けた表情で眺める雲。

「どうじゃ、剣人よ」

「雲の守身の違いに気づいたか？」

空でこめかみに汗を流しながら留まり、雲に動搖した目を向ける剣人に、源信が唐突に聞いてきた。

「うーん、違いつて？」

「やれやれ、もっと分かるまで色々やってみなさい」

多少呆れ気味に目を眇めて剣人に言った。

「よーーし、それなら…」

そう言つて、雲からどんどん後方へ空を移動し離れていく剣人。

「よしこっから」

剣人と雲の距離は既に30㍍くらいありそうだ。

空に浮いたまま足をがに股に開き、頭の前で腕を交差させた。

そして、雲に向き直り何かを叫びながら、さつきより幾分早めに

雪に突進する。

その勢いを田にして零は思わず、両手を内側に引き身を固める。

「ダイビングクロスチョークアップ」

何かのプロレス技の名前だらうか、スピードを乗せたまま滑走し、雪に接触する手前で、頭、背中、足の先まで水平になるように浮かして、クロスした両手の一一番堅固な部分を零の胸の辺りに突き当たった。

その衝撃は先ほどとは、比べ物にならないはずだった。

が、結果は変わらなかつた。

剣人は音もなく後方へ弾き飛ばされ、その勢いで体勢を崩し、空でくるくる回転しながら、最後には地面に背中から激しく叩きつけられた。

「大丈夫〜！？」

あまりに盛大に吹き飛んで地面に叩きつけられた剣人を見て、思わず零が驚嘆の声を漏らした。

安否が心配になり急いで駆け寄る。

「糞、 いてて……」

普通なら大怪我をするところだが、剣人も守身は張つてゐるため、ダメージはない と思われたが、背中を軽く何かに打ちつけたような痛みを感じて低く唸る。

「どうか怪我した！？」

「ば、馬鹿、真剣勝負の最中だぞ……」

剣人は仰向けに倒れた自分を、心配して体を起こそうとする雫の右手を払った。

「そんな……」

「すまね、でも自分で起き上がる」

雫は本当に剣人の様子が心配で起こそうとしたのに、手を冷たく払われ、悲しみを瞳に浮かべていた。

そんな雫の表情を見て、剣人は後ろ指を指される思いに駆られ、罰が悪そうに頭を撞いて雫に呴いた。

剣人は震える右腕を傍らについて半身を起こすと、体を捩り倒れた辺りに目を凝らした。

すると、その場所にあつたであろう出っ張った岩の残骸があるのが見てとれた。

守身の壁が無ければ、背骨が折れていたであろう。その岩の残骸の砕け具合が、それをまじまじと物語っていた。思わず背筋に寒いものが駆け抜けていく剣人。

「剣人よ、今ので分かつただろ」

「雫とお前の守身の圧倒的な防御力の差が」

相変わらずのマイペースな口調で、源信は剣人に向けて言った。剣人は二度の失敗でその意味を理解し始めていた。

その場に落ちている石を拾って、握りこみ悔しさを顕にする。

そんな萎えかけた剣人をよそに、源信は言葉の刃を切りつけていく。

「言つておぐがの、まだ零は攻撃すらしておらんぞ」

「ただ突つ立つていいるだけじゃ、それなのに、お前は既にボロボロ」

「力の差は歴然、これ以上戦いを続けても意味はないぞ」

剣人はその言葉に自尊心を傷つけられ、悔しさに唇をかみ締め、体を小刻みに震わせていた。

そんな様子を意に介せず、更に留めと言わんばかりに、源信の口から重大な事実が言葉を通して紡がれる。

「ワシはな、神器の力なしなら、零の攻撃を受けたとしても……」

「大丈夫だろ?と思つていたんじゃが、思つた以上にお前の守身の力が貧弱すぎる」

「お前零の攻撃受けたら死ぬわ、話にならん」

「「」の勝負終りじや、零戻るぞ」

「はー……」

剣人は源信が吐き捨てるように矢継ぎ早に放つた言葉に、強い衝撃を受け、空に視線を置いたまま固まっていた。

源信は洞窟の岩肌に出来た七色に光る、鏡との世界を繋げる空間に身を投じ、外へと出て行つた。

「こー……」

力ない顔を浮べ呆然と、座り込んだまま動かない剣人。心配になり零が声を掛けるが、押し黙つていた。

「じゃ先行くね」

今は声を掛けても無駄だと判断すると、零は立ち上がり剣人にそう告げた。

出口の空間の前までゆっくり歩み寄り手前で止まる。

零は振り返り、俯く剣人の姿を沈痛な面持で眺めていた。

しかし、外から源信の自分を呼ぶ声が聞こえたので、仕方なくその場を後にする。

源信と雲は茶の間に帰つてみると、テーブルを囲んでお互い顔が向き合ひ位置に座つて、沈黙の時間を共有していた。

鬼塚守や、その母は今日は外出しているのか、この家の中に止める音源は、源信がお茶をする音と時計の針が動く音くらいだった。鏡の中から音は聞こえてこない。おそらく、まだ剣人は絶望に暮れ放心状態で俯いてるんだろう　と二人は暗に理解していた。

「どいか元気のない田で、雲は源信に頂いたお茶の入った湯のみを手にして、それを口に運ぶ手前で止めたまま、黙りこくっていた。その様子が多少源信も気になつたんだろうか、雲の悲哀に満ちた眼の先にあるものは分かつていた。

源信は、髪を摩りながら雲に向き直り、取りあえず、重苦しい雰囲気を変えるべく、雲に軽く声を掛けてみる。

「雲、そんな心配せんでええ」

源信の不意の言葉に雲は顔を上げた。

「あいつの事じや、すぐこ氣づくじやう」

「何ですか？」

雲の問いに源信は目を細めて、いつになく神妙な面持でお茶をする。

お茶を飲み終えると、多少強めに湯飲みをテーブルに音を立てて置き、雲に視線を合わせて口を開いた。

「自分の内に秘められた怪物性にじや」

#

剣人は洞窟の中で胡坐を搔いて、両足の関節にそれぞれの手を置いて、瞑目し何かを考えていた。

雲はまだ力を使い出して5時間しか経っていない。それなのに、先に力を使い出した俺より、守身の防御力はあいつの方が桁違いに強い……それは何故か？

剣人はさつきの組み手の最中の様子を頭の中で再現していた。

複雑に交錯する思いと共に、様々なイメージが明滅する。

そんな心に浮ぶ映像のある一場面を思い出し、剣人ははっとして目を開ける。

そうだ、陽の力は俺が上、使い出したのも俺が先。ならば絶対俺のほうが有利。

その状態でこちらが劣勢を演じてしまったのは、出すものをしてないからだ！

剣人は胸の奥から何か熱いものが込み上げてくると、その場につと立ち上がった。

さつきまでの力ない剣人の目とはまるで違つ。

懐から巻物を取り出すと、ある力の文字を調べ始める。

『陽力』

体内に秘められた陽の力を解放し、それをオーラとして練りだすことが出来る力。

剣人は源信が零に言つた言葉を思い出した。
あの零との会話の中に出でてきたこの力の名称。

「ふむ、良く分からぬが、発動してみるか」

巻物をまた懐にしまいこむと、その場で仁王立ちになる。
そして手の平から携帯が現れ、そこに陽力の赤い文字が浮かび上
がると、いつものエフェクト完了後、力が剣人に宿る。

さて、どうしたらしいものか？ オーラを練りだす？

剣人はその使い方が今ひとつ分からないが、取りあえずその場で立つたまま、体全体を力ませてみた。 が何も起こる様子がない。

「うーん、何か違うのか？」

じゃあ、逆に力抜いてみるか。

その場で軽く跳ねて、両手の平を宙でぶらぶら振つて、体の力を抜き、気を楽にしてその場で立ち尽くす。

落ち着いた空気が剣人の周りを包み、静寂が辺りを覆う。
練りだすという言葉から、なんとなく、剣人は体から何かを発散させれるようなイメージを頭に描いてみる。

すると 体の中心部分に何か温かい物が集まると、それが体全
体に行き渡り、更には、それらが外に肌を通して、吹き出るような

感覚を覚える。

その違和感が気になつて、おもむろに閉じてた目を開けると、剣人は驚嘆の声を上げた。

体全体に視線を這わせる剣人。

手や胸や足から炎のような色をした湯気が吹き出て、全体を覆つゝように立ち込めているのが分かつた。

「こ、これが陽力？」

「そうじゃ、それが全ての力の源たるもの、陽力じゃ」

突然洞窟内に響いたしやがれた声に驚き、その声のした方へ視線を送ると、源信と雫が七色の扉の前に立つて、こちらを見ていた。

「やはり、お前はとんでもない陽の力を秘めているな

剣人の体から溢れ出る陽のオーラを、目を細くしてでみつめる源信。

その目にはどこか厳しさすら漂う。

「剣人よ、もっと意識を集中して、力をお腹に溜めるようにして、そこから对外へ放出するようなイメージをしてみなさい」

源信の言葉に剣人は静かに頷くと、目を閉じ、言われたイメージを試してみる。

思いつきりお腹に、そして一気に外へ放出するイメージ！

そのイメージを頭で描いたのと、ほぼ同時に 剣人の体から爆

風のようなものが吹き荒れ、周りへとつむなし空氣の圧力を放出していた。

「なにこれ、やあああ」

雲はその余りの風圧に吹き飛ばされやつになつて、源信の肩を咄嗟に掴んだ。

源信はその風圧を諸共せず平然と佇み、吹き付ける風に一匁田を細くしてこる。

「ひつや、とんでもないな

「これほどとは……まるで台風じや」

源信は細くしていた目を多少開いて、口元を緩ませ呪気に取られたような表情を浮かべた。
また目を細くすると、一息ついた後、堰をきつたよつて言葉を力なく連ねる。

「お前、もう、雲と戦っちゃダメだぞ、組み手もダメ」

「雲が死んでしまつわ……」

「へ?」

剣人はその意外な言葉を聞いて、意識が散漫になるとオーラの発散が止まる。

きょとんとした顔で源信を見やつた。

さつき、源信が部屋を出て行くときに吐いた言葉と、まるで逆の事を言われ、少し困惑氣味にその場で立ち去つてしまつた。

「剣人よ、取りあえず茶の間に来て、色々教えてやろう」

「陽の力と他の力の関連性についてな」

源信はそう言い残すと、またひょいと七色の扇跨いで、向こうの世界へと小さな体を吸い込ませる。

#

源信を一人向い側に置いて、剣人、雫と並んで座る。

鏡に入る前と同じ席の配置。

源信以外の二人は少し落ち着きが無い様子で、肩をそわそわさせていた。

特に剣人はさつき陽の力を使つたばかりで、興奮気味なところがあり、早くその説明を聞きたそうに、テーブルに右手の平を置いて、人差し指で表面をトントン叩いていた。

「落ち着かんかい、剣人」

テーブルを叩く音を耳障りに感じた源信が、訝しげな目を向けて戒めの言葉を放つ。

剣人は罰が悪そうに苦笑し、手を膝元に即座に引っ込んだ。

「まあ、話始めるか」

少しテーブルに体を寄せると、源信が一人、特に剣人に向けて長くなりそうな話の口火を切った。

「陽力とは、全ての力の源とさつき話したが、そのまんまじや」

「「」の力は発動しただけでは、余り意味を成さん」

「要はこの力は単体にあらずじや、他の力と組み合わせることにより、初めてその力の真価を發揮する」

一呼吸おいた後、更に言葉を紡いでいく。

「例えば、守身じや、初めお前と対峙した時、雲は陽力を発動した上で、守身の力をその体に纏っていた」

「雲は陽の力があるとは言え、まだまだ未熟な上に、剣人ほどそのポテンシャルは高くない」

「だから、あの時お前は、雲の体から微かに溢れ出る陽のオーラを目で捉える事ができなかつたはずじや、それほど、か細く、薄いオーラじやつた」

雲は少し恥ずかしそうな顔で下を向いた。

「しかし、その薄い陽のオーラが作用した雲の守身のパワーを、お前は身を持つて味わつたはずじや」

剣人は息を呑んで、黙つて頷く。

だんだん、剣人の脳裏にこの力の意味とそれを使うことの重要性

が分かつてきていた。

そして

……

「この力は何も守身の力にだけ作用するわけじゃない、他の戦闘系の力や、防御系、また別の力の大小や範囲にも影響する」

「言わば、わしの力を使う者の優劣は、陽力で練りだしたオーラの絶対量で決まるといつても過言じやない」

「そして、剣人よ、お前の陽の力は並じやない、いや、あのとてつもない陽のオーラを見て確信した、お前は怪物じや」

そして その危険性にも剣人は気づいていた。

もしあのオーラの全力を拳にこめて、相手を殴った場合、相手は

……剣人の背筋に冷たいものが走る。

「その陽の力を全てオーラとして練りだし、訓練を重ねたお前なら、高等妖怪にも遅れはどらんじやろうな」

あっけなく源信が放つた重い言葉に、剣人は弾かれたように、顔を上げ視線を源信に向けた。

まじかよ？ 僕が……高等妖怪と互角に？

散々自分の非力さに嘆いて塞ぎ込んでいた剣人に、新たな思いが割つて入ろうとした時 源信がそれを戒めるように楔の言葉を放つ。

「だが、心して聞け、その力決してむやみに使うなよ」

「お前はまだ未熟じや、力のコントロールができない」

「お前はまず力の使い方、力をセーブする方法を覚えるべきじや」

「その特訓にはワシが付き合ひおつ」

源信は長い話の最後をそう締めぐくると、剣人に厳しい目を向けて袖を捲くつた。

神に近い存在の源信が、これほど気合をいれて立ち向かわないと行けない剣人の実力とは？

誤算、ふりだし。

「剣人よ、遠慮はいらん、思いつきりかかってこい！」

茶室にいたまんまの和服に、細い木の杖。とても戦うような格好に見えなかつたが、前に対峙した剣人は怯えていた。

目の前にした者だけが分かる、異様な迫力に後退りさえし始める。

やつぱり、只者じやないな。茶室でいた時とはえらい違ひだ。

剣人は覚悟を決めたのか、陽の力を放出し始める。
さつきと同じように、剣人の体から放出されるオーラと共に、強烈な空気の流れが発生し、洞窟内の淀んだ空気をかき回す。

「うむ、大した力じや、そのオーラを拳に集中しワシを殴つてみろ

「分かつた、行くぜ、源信様！」

剣人は地を蹴ると、オーラを纏つたまま源信に向つて全力疾走をする。

あつという間に源信の前まで、間合いを詰めると、右拳にオーラを集中するイメージをし、そのまま拳を源信の腹部へと叩きつけた。

「「あり？」」

ほぼ同時に二人が同じ言葉を口にした。

オーラを纏つた岩をも碎くであろう剣人の一撃は、源信の腹部にめり込むかと思われたが、

和服の表面でその威力が完全に相殺され、その動きを止めていた。

「なんじゃ？ そのへなちょこパンチは？」

「おかしいな～」

剣人はオーラをその場で搾り出し、何回も源信の頭部や腹部、肩へとオーラをこめた拳で打撃を与えるものの、まったく手ごたえがない。

「剣人ちょっとお前、そのオーラ持続したまま、守身に意識集中しどけよ」

源信がそう言つたかと思うと、突然、拳を剣人の腹に突き出した。軽く前に押し当てたように見える拳。

その軽いと思われた拳の衝撃を受けた剣人が、後方へ嗚咽とも呻きとも言えない声を発しながら、背中から凄い勢いで、洞窟のかなり奥まで弾き飛ばされていく。

「こりゃ、いかん！」

源信が慌てて叫んだかと思うと、その姿を一瞬にして、弾き飛ばされていく剣人の先に移動させ、向つてくる剣人の背中に手を突き出す。

激しい勢いで飛んできた剣人の背中を、両腕で樂々と受け止めた。

「ゴボ、グボ」

剣人は口からドス黒い血を吐き出し、お腹を押さえたまま声ともならない声を発していた。

その目に宿る輝きがどんどん薄くなつていぐ。

その様子を見て、死にかけている事を源信は瞬時に悟る。

「まざい！」のままでは死んでしまつ！ ならば

虫の息の剣人を足元の地面にゅつくり置き、仰向けの剣人の体に、屈んで右手の平を素早く置くと、裂帛の気合と共に、何か白いオーラのようなものを剣人の体に注いでいった。

#

「剣人しつかりして！」

「うう……」

水中で田を開けたようなぼやけた視界の中、零の甲高い声が薄つすら聞こえてくる。

曖昧な意識の中それに反応し、視界をはっきりさせようと目に意識を集中させていく。

だんだん田の焦点が合い始めたのか、ぼやけた影の輪郭がはつきりし始めると、

「零……？」

「源信様！ 剣人気がついたよー！」

剣人が零の名前を掠れる声で漏らす。

零はそれを聞いて口に手を当て涙を浮べ、喜びと安堵が混じった面差しで、源信に振り向き、意識を取り戻した事を大声で伝えた。

布団の上でが横になっている剣人の傍らで、泣きじゃくる零。目を覚ますまで剣人の様子を、不安に押し潰されそうになりながら、ずっと見守っていた。剣人の無事が分かり、それまでの不安と安堵する心が入り混じって、涙が止め処なく溢れてくる。そんな零の隣に、源信は罰が悪そうに小さく体を縮めて座り、剣人を見下ろす。

「剣人大丈夫か？ 本当に悪かった……」

源信は声量を押さえ気味に、静かに剣人に語りかけた。
さつき源信は剣人に治癒の力を施し、瀕死だった剣人を死の淵から呼び戻した。

傷ついた体、特に腹部から伝わった衝撃で破壊された肋骨や、内臓はその力によって完治していた。

それでも、思慮浅い自分の目論見が外れて、剣人を殺しかけた事には違いない。

「源信様、俺、なぜ？」

剣人は意識が明確になつてくると、体にはもうダメージは残っていないため、半身を勢い良く起こした。

「話してもいいのか？」

剣人の疑問とする内容は、源信は分かつていた。

ただ、まだ自分への嫌悪感が渦巻く中、話しづらい。

一応、剣人に話す事への許可を求める。

源信が珍しく見せる気遣いを感じた剣人は、快活にそれに答える。

「もちろん！ ゼひ聞かせてください！」

中に立ち込める沈鬱な空気を払うよつた、剣人の大きな明るい声が部屋に響き渡る。

その勢いのある快活な声に、弾かれたように顔を上げ、氣後れする一人。

だが、剣人が二力つと笑い元気な姿を見せ付けてくるので、徐々に一人に穏やかな笑顔が戻り始める。

「じゃ、話そつか」

剣人は掛け布団を完全に体から払うと、正座をして源信に向き直つた。

「簡単に言うとじゃな……お前から溢れ出るオーラの激しさに惑わされ、本質を見抜けなかつた。ワシの失敗じゃ、すまぬ」

源信がまた顔を俯かせて謝るのを見て、咄嗟に元気づけよつと葉を放つ。

「良くわかんないけど、源信様謝らないでいいよ、誰にでも失敗はあるさ、人間なんだから」

しかし、その言葉尻に微妙に違和感を感じる源信と剣人。

「ま、わし、ほら、人間じゃないしな」

「はは、そうだった……」

顔を見合わせ苦笑いをする一人。

その様子を見やり、雪は頬に一筋汗を流し、きょとんとした目で眺めていた。

薄ら寒い空気が部屋を包みかけると、

「それは置いといて……」

源信は口に手を当て一度咳き込むと、一言放ち会話の舵を取り本題に戻す。

「要はじや、お前から吹き出たオーラは確かにすこいものがあった。しかし、いざそのオーラを使って攻撃や防御の力に回そうとするとき、お前の未熟さが表面に剥き出しどなる」

源信は更に色々説明しようと思つたが、言葉で全て語るのは大変だと思い、大まかな言葉で剣人に伝える。

「簡単に言つとじやな！ 練りだしたオーラを操る事に関して、お前はずぶの素人だつてこつた」

それに対して、剣人が何か言いたげに口を開きかけると、それを遮るかのように矢継ぎ早に言葉を紡いでいく。

「それでな、それをいちいち言葉で説明するのは大変じや。実践や

修行を通して教えていくから、お前今日ここに残つてワシ等と特訓
じゃ、うまく行けば、F級妖怪くらいは倒せるくらいには仕上がる
じゃらり

「ええ！？」

剣人は自分の源信の見立てが、さつきより随分落ちている事に驚きを隠せない。

ちょっと前までは、上級妖怪とも渡り合えるとまで断言した源信。納得がいかないので、源信にその事を聞いかようとするが、分かつてたとばかりに、

「上級妖怪に勝てるといったのはじやな、オーラのコントロールに磨きをかけ、熟練に熟練を重ねたお前ならってことじゃ、修行不足の今のお前じや、とっても無理、絶対無理、F級妖怪にも零にも勝てないわ！」

その言葉に打ちのめされ、見開かれた目が閉じていくのに比例して、ピンと伸びていた背筋も前に傾いていき、額をテーブルに付きうな垂れる。

ふりだしかよ……

そんな剣人を視界の端に捉えて、零がくすくす笑い始めると、テーブルで頭を転がし、零の方に顔を向け剣人が睨んだ。

閃き。

「ほら、拳が当たる瞬間、お前のオーラ消えちまつてんじゃ」

源信と剣人はセラ洞窟内で猛特訓中だった。

陽の力のポテンシャルは相当高い剣人であるが、その使い方においては、全くでたらめで、源信はそれを軽い組み手の中で、剣人に自覚させようとしていた。

「みてみい、お前は攻撃にオーラを持つていくと、根こそぎそつちに練りだしたオーラ全てが行ってしまい、守身を強化するオーラが一個も残つておらん。だから、ワシの軽い攻撃で死に掛けたんじゃ」

「そんな事いつてもよ……」

四苦八苦する剣人。

息をハアハア言わせながら、汗を顔に大量にかき苦悶に満ちた顔で、源信にふらふらした拳を投げ出していた。

「それにな、ここ入つて10分で、疲労しそぎじや。オーラを無駄に出してるから、疲れるのも早いんじや、まあ零も似たようなもんじやが、20分くらいならオーラ出したまま戦えるぞ」

零の名前が出るや、剣人は眉毛の端を吊り上げ、また拳に力を入れ始める。

今のところのライバルと言つた所か。

「零に何も特別な事は教えておらんぞ、たつた5時間だしな。単に、

オーラを体に均等に張り巡らせる事だけを教えてだけじゃ

「源信様、そういうことは早めに言つてくれよ！」

剣人は拳を止める、その場で尻から落として胡坐を書いて座り込んだ。

初めに練りだしたオーラは既に切れかけていて、再度練りだすには、休憩をとるしかなかつた。

剣人は座つて息を整えながら、源信に不満の目を向ける。

その視線に気づいた源信は軽く受け流し、平然とした顔を保つていた。

零と同じ方法を初めから教えたのは、剣人の底力みたいなものを確かめるためだつた。

#

「よし！ 源信様やるぜ！」

「ん？ あ、ああ」

剣人はついさつき息切れ切れで、座り込んだかと思つていたら、3分も経たない内に力強く立ち上がつた。

その様子を見て、源信は多少驚いた。

オーラを使い切つた後の体の疲労は、数分くらいで回復するようなものじゃ無いと経験則で分かつていてつもりだつたが、剣人は既にピンピンしていて、瞳の輝きも更に増したかのように見える。

剣人は両拳を握り締め、肩幅くらいに開くと、腰のあたりにそれ

らを置いて目を瞑つた。

「深く息を一回吐いたかと思つと、目をかつと見開き、気合の声と共にオーラを練りだす。

「おお、またどんでもないオーラじゃな」

最初より更に剣人を覆つオーラの厚みが増していた。

それを目を細めて、本質を見極めようと源信の鋭い視線が投げかけられる。

「うむ、確かに凄いように見えるが、散漫じやの～、所々に隙間が見えるし、体を覆うオーラのウエイトもむらがある。薄く弱いところに強い攻撃がヒットすれば、お前は大きなダメージを受けることになる」

源信は剣人に近付き、体のオーラの薄い部分を杖で指摘する。
そして更に言葉を連ねた。

「イメージとしてはな、体全体を均等に覆う服を着える感じがいいな、そうじや、お前もこの場で守身使用時に身に纏う好きな服を頭で描いてみる、あれと原理は大差ないから」

「うへん、ま、やってみる」

剣人はまだその事について悩んでいた。

どうせなら見栄えのいい、格好いい物を身につけたかった。

オーラの発散を一旦止めて瞑目しながら、頭でイメージを構築し始める。

何にしようかな～？ 格好いい服つてどんなのがあったっけ…

…拳法着？ みたいな、いやいや、良く知らないしな。なら、鎧？
辞めておこう……

鬼塚の格好悪い五月人形みたいな姿が頭をよぎり、すぐにイメージを消し去った。

「うーーん」

小首を傾げ、頭を悩ます剣人がふと何かを思いついた。
それを試したくて、思わず笑みが毀れる。

「よし！ 決まった！」

剣人が大きな声でそう言つと、オーラを練り出す時と同じ構えを
とつた。
深く息を吸うと、体を眩い白い光が覆いつくし、その姿を変えて
いく。
それをぼーっと眺めていた源信の瞳孔が一瞬大きく開く。

「な、なんじゃ！？」

白い光で覆われた剣人の体が、どんどん膨れ上がっていく。

「お、お前は！？」

白い光が消え、剣人の体が外に晒されると、それを見て源信が思
わず呟いた。

源信の体に大きな影が被さる。

「熊？」

一匹の大きな熊が目の前にいた。

茶褐色の体毛に覆われた筋肉隆々の大きな体、口から覗く大きな牙と手から伸びる鋭い爪。

しかも

「熊だよ、強そうでしょ」

しゃべる熊。

剣人は格好良い服がどうしても思い浮かばなかつた。
普通の服が駄目ならと、氣ぐるみに思いを馳せていると、そのうち何かの生き物の姿になつても良いんじゃないだろうか と閃き、身近で強そうな動物を思い出した結果が熊だつた。

「じゃ行くぞー！」

剣人が熊の姿のまま、源信に向つて突進し始める。
四つん這いで走る剣人のスピードは並ではなかつた。

源信の間合いに瞬時に入ると、鋭い爪を伸ばした太く逞しい腕を上に振り上げ、それを源信に勢い良く振り下ろした。
杖でそれを素早く受け止めるが、その衝撃は今までの剣人の攻撃の比ではなかつた。

受け止めた杖を握る左腕に思わず力が入る。
眉を潜めて、表情を険しくする源信。

「いっは……

杖で受け止めたその腕を払うと、剣人熊のがら空きの腹部に杖の先端を突き出す。

鈍い音がして、杖の先が多少めりこんだものの、それを意に介せず、剣人熊の横からなぎ払う左手の鋭い爪が、源信の顔の間近に迫る。

源信は舌打ちをし、右腕を折りたたんでそれを防御に回す。重く骨がしなるような衝撃が来ると、多少の痛みを源信は覚悟していた。

しかし、実際受けたのは蚊が止まつたような軽い衝撃だった。

「なんじゃ？」

思わずそのギャップに声が漏れる。

前を見ると、熊でなく、人間の姿の剣人の拍子抜けした顔が目に映る。

「あれ？ 元の姿に戻つてゐる」

剣人は源信に押し付けていた左拳を離すと、両手の平を顔に向けて自分の体全体をきょろきょろ見渡していた。

その様子を見て、源信が嘆息を漏らすと、呆れた顔で剣人に口を開く。

「エネルギー切れじゃな……」

「あ、そう言つことか、ハハ」

剣人は源信に呆けた顔を向けて、頭の髪を何度も搔いていた。

闇の山道。

「雲、後どれくらいだ？」

「もうちょっと登らないとね」

剣人は修行を一通り終えた　と言つには、心細いものがあるが、取りあえず、オーラを体に均等に張る事を覚え、雲並の強さは身に着ける事はできた。

源信は修行が終った後一人に言つた。

『もつ、お前等さつさと影坊主倒してこい、後は実戦じや、慣れじや、命を懸けた戦いで力を使用せねば、何の意味もなさん』

源信はそれだけ一人に言つと、地図を渡した。

影坊主が棲みつく場所、千甲寺の場所が載つた地図だった。その地図で場所を教え、影坊主の簡単な話を一人に聞かせた。

元々影坊主は、こここの寺で修行を続ける一人の僧だつた。

影坊主は努力を嫌い、真面目に修行に打ち込む事をしない坊主だつたと言つ。

そんな彼に腹を据えかねた住職は、彼を破門にした。

それを逆恨みした坊主は、ある日追い出された千甲寺の本堂に夜の闇に乘じて忍び込み、その中で首を吊つて死んだと言つ。

破門された寺に自分の死体を晒す事が彼の復讐だったのだろうか。

『まあ、こんなしょーもない理由で生まれた妖怪じや、死して妖怪に転じてまで、尚、その曲がった性格は直らず、それどころか、受験に苦しむ学生達をターゲットにして勘違いな逆恨みを晴らそうと

までしておる。野放しにはしておけんわな。ただこんなしょーもない奴と戦うのはワシも嫌じや、本来なら守に任せるとこじやが、あいつ今留守にしてるんでの、お前等で行つてちやつちやと倒してくれ、なんとかなるじゃん』

千甲寺がある寺間山は剣人の家からそう遠くない場所にある。剣人は寺間山へ学校の遠足の時、山登りに行つた事を思い出した。景色も多少覚えていて、山の中腹辺りにある三重の赤い塔の事が目に焼きついていた。

名称は知らないが、そのイメージさえあれば、瞬移は可能だ。剣人が瞬移を使って零に触れた時、右肩に実体のない手もかぶさっていた。

浩太も一緒に行きたいと言つ。剣人は事件の当事者だし、特に断る必要も無かつたので連れて行くことにした。

瞬時に源信の家からその場所へ移動した三人は、この山の頂上にある無人寺となつている千甲寺を目指して、薄暗い山道をひたすら登つていた。

「おい、しかし、もう山道も真っ暗だぞ」

「暗いし、怖いね、何か色々いるみたいだし」

現在 PM 6 時過ぎ。

本来なら、家に帰つてご飯を食べる時間だ。辺りは薄つすら暗くなり始め、電灯も何もない山道は不気味さを増していた。

「怖いですね」

浩太は幽霊の癖にこの暗がりに怯えていた。

零も『靈視』の力を剣人に教えてもらい、それを発動して、浩太の姿も周りに蠢く幽霊や、妖怪の類をその目に映つていた。

「あ、また、ほらあそこにも仲間が、あそこにもほら！」

「辞めろよ！ できるだけ俺は見ないようにしてるんだから、指摘するな！」

「ひ～いるわ、変なのが」

剣人は山道の土と砂利がまざつと凹凸の激しい道を歩いていたが、その脇に広がる森林や、暗がりに目を配る事をしなかつた。

あちこちで怪しい影がうろうろしていて、ほとんど幽霊屋敷ならぬ、幽霊山道と化してたからだ。

浩太には慣れたが、まだ幽霊や妖怪と言つものに完全に慣れているわけでは無かつた。

そんな剣人とは対象的に怖がりながらも、零は興味深げに怪しげな者がいる方へ視線を流していた。

そんな時突然　剣人は首筋に冷たいものを感じた。

瞬時に体を硬直させる。

恐る恐る首を捻ると、白い手が巻きついているのが目に入る。

その手の先に怯えた視線を這わせると、

「お兄さん、どこいくんかい？」

江戸時代の遊女のような着物をきた女が、上空に漂いながら手を巻きつけているのが目に入る。

愛嬌のある笑みを浮かべて、気をくに剣人に話しかけてきた。

「うわあ、気持ち悪い！」

剣人はまるで毛虫が突然、背中に落ちてきた時のように、顔に汗を搔いて体をバタバタさせる。

右往左往してその手を払おうとするが、女の幽靈は、絡ませた手を剣人から離そうとしない。

剣人は耐え切れなくなると、右手に陽のオーラをためると、その手を乱雑に振り払った。

「もう！ つれない人！」

「『めんなさい、お姉さん、この人まだ幽靈に慣れていないんですよ』

「『めんね～』

幽靈は悲鳴をあげて後ろに弾かれると、態勢を整え剣人に体を向けてぶつくさ呟いた。

乱暴に剣人がその幽靈を振り払うのを見て、浩太と零が代わりに言葉を付け加えて謝る。

その低い姿勢を見た女の幽靈は、ニコリと笑うと、闇に消えていった。

道を歩いていた。

剣人はバッグから、源信に持つていかされた、小さな折り畳み提灯を取り出し、マッチをつかって中の蠟燭に火を灯した。

白い提灯にオレンジ色の光が灯ると、辺りを薄つすら照らした。多少明かりを得た事で、心に余裕が出来たのか、剣人はある事を思い出し口を開く。

「なあ、雲、お前さ、何で受けたんだよ」

「え?」

「やっぱわかんねーよ、お前が陰の者と戦う必要がどこにあるんだ?」

剣人は足場の悪い山道を歩きながら、隣を歩く雲に心の内でずっとくすぐった疑問を投げかけた。

本来なら、雲をこんな危険な戦いに巻き込みたくないのが本音だった。

雲はどう言おうか迷う。

剣人が心配だつたつて言うのもなんかね……

雲は剣人が力を得た時から、いずれ陰の者と戦う事を予想していた。

昔から剣人の事を良く知る雲からすれば、当然出てくる答えだつた。

正義感の固まりのような剣人。

男気に満ちてはいるが、無鉄砲なところがある。

いずれ、一人で無茶をすることだってあるに決まっている。そんな事を見透かしていた雲は、剣人をほっとけなかつた。

自分が傍について、彼の暴走を戒め、なんらかのサポートが出来たらと考えてゐるうちに、それなら やはり同じ立場に身を置くしかない、そう結論づけると源信の家に向つて無心で走っていた。

「う～ん、ほら、剣人一人じゃ何しでかすか分かんないでしょ！」

雲はおどけた口調で、その意味を曖昧にしながらも本音を語った。

「なんだよ、それ～、俺だけじゃ心配だつていうのか？」

「その通り！ 私はあんたが陽の力使って、人様に迷惑かけないための監視役よ！」

雲はうまい事言えたと心で呟いた。

「ちっ、いつまでも子供扱いしやがって、ふー」

剣人はもやもやが晴れたわけではないが、取りあえず、納得したようだ。

それは雲の強さもそれなりに知つてゐる、今だからと言つといろもあった。

今の実力は一人とも大差無かつた。
強く言えないのは、そのためだ。

「あ、着いたみたいですよ」

先を浮びながら進む浩太が、一言呟いた。

その言葉を聞いた二人の表情と雰囲気が一転した。

「お堂の中に入つてみるか

「うん」

隙間から雑草が生える石畳の地面を進み、古びた木の階段に足をかける。

一步上がる」に軋む階段を上り終えると、賽銭箱があり、その上に備え付けられた鈴を鳴らす鈴緒が長く垂れ下がっていた。

その脇の足場をぎしぎし言わせながら通ると、眼前に格子型の古びた木の扉が目に入る。

「ここの中にいるんかな?」

「そ、まあ

剣人はあまりこういった場所に踏み込んだ事がないため、どうしていいか分からぬ。

格子の隙間からそーっと中を覗き見る。大きな仏像が提灯の光に照らされその姿を不気味に映し出していた。

お堂の中は閑散としているかのようにみえた。

だが、一緒に覗き込んでいた零が突然大きな声をあげた。

「お堂の天井見て!」

「え、ビービー? うわ!」

零が指差す方へ剣人が恐る恐る視線を送ると、天井に胡坐を搔い

た不気味な坊さんが、「ウモリのようにぶら下がっていた。

重力を全く無視したその様は、幽体ならではの芸当か。

二人は息を呑んでその坊主の動きに注意していた。

暫くして、坊主が胡坐の足を崩す。剣人たちに気づいたのだろうか。

ゆっくり立ち上がった後、天井からそのまま側面の壁をよたよた歩き、お堂の床に降りてきて、扉越しに剣人たちに向き直ると、

「何者だ……？」

低い声で一人に囁いた。扉越しに観察するように覗き込んでいる。生氣ない青い顔の細い瞳に、赤みのようなものが滲む。坊主に見据えられた時から、一人は体を硬直させていた。異様な雰囲気に呑み込まれ、黙つていたが、剣人が喉から搾り出すように言葉を紡ぐ。

「お、お前が、影坊主か？」

「…………」

影坊主は無反応で顔を上げ宙に視線を置いたまま、押し黙つていた。

「うん、那人ですね」

この重々しい静寂を、さくっと切り裂く浩太の言葉が、一人を束縛する絡まるような圧迫感を幾分和らげたのか、

「やつぱり」いつか！

剣人が大きな声を放つと、途端に後ろに後ずさり、階段の下まで降りる。

足元が危うい狭い場所を嫌つた。それを見て同じく零も剣人の隣まで降りて、守身を陽のオーラで強化し巫女姿に変身した。剣人はそのままの私服姿で身構える。まだ服装は決まっていなかつたが、オーラは均等に張り巡らせる事はできていた。

影坊主は心ここにあらずといった表情で、視線を宙に置いたままにしていたが、体だけはすーっと格子をすり抜け賽銭箱の上に乗っている状態で突っ立っていた。

「なあ、零、どうする?」

「え、どうするたって」

「一応いきなりケンカうるのもなんだし、ここに来た理由教えとか?」

「うん、お願ひ」

剣人は影坊主にここに来た理由を事細かに語る。

影坊主はそれを聞いているのか聞いていないのか、見た目では判断しにくい。

「お前が受験生を狙い、逆恨みして殺している事を俺は許す事はできない」

剣人は最後にここに来た唯一つの理由を、告げて話を締めくくった。

そこまで聞いた影坊主は、突然ふわっと上空に舞つたかと思つと、剣人たちを飛び越え、背後の広場に着地した。

すぐに剣人たちが体を向き直り、体を屈ませ緊張した面持で、神経を研ぎ澄ましていく。

二人は感じていた。言い知れぬ殺氣のようなものが、影坊主から発散されていくのを。

影坊主は右手に持つていた癪上を石畳の地面に軽く打ち立てた。その際、癧上の先の金属の輪が擦れあり、独特的の神秘的な音が響く。

「……………陽の者が一人か…………」

影坊主は地から響くような低い声で、呴いた。

「零、こいつ俺達を陽の者とか言つたぞ」

「うん、分かるんでしょ」

剣人は影坊主から飛び出した言葉に、零に顔を向けずに言葉を交わした。

動搖は多少していたが、オーラを乱さないよう意識を集中している。

零は影坊主を強く睨みつけながら、警戒を強めていた。

「陽の者は……生かしておけない……」

影坊主がそう言い放つと　　いきなり癧上の先を剣人に素早く突き出してきた。

間一髪でその攻撃を右に避けて交わす。

しかし、剣人はその突きの速さを見て、瞬時に顔を強張らせる。　　こいつ、動きが早いぞ。

「今のを良く避けたな……」

影坊主はそう言つと、癪上を素早く懷に戻し、また地に打ち付けた。

「次は私たちから行くわよ！」

零が大きな声で叫ぶと剣人は相槌をうち、影坊主に一人で突っ込んでいく。

オーラを右拳に溜めて、気合の声を発しながら、影坊主の間合いに入つて、腹部にそれを勢いをつけて突き出した。

影坊主はその攻撃を少し後ろに引く事で交わすが、横合いから零の薙刀の鋭い刃が迫っていた。首をかしげて何とかそれも交わす影坊主。

多少体を揺らめかせ、態勢が崩れると、後ろに下がつて距離を取つた。

「おい、零、その武器なんだよ！」

剣人が零が手に持つ薙刀を見て、思わず問いかけた。

「これは『神器』の力よ、靈体に関わらず、全てを切り裂ける武器を作り出す力、拳にオーラ溜めるよりよっぽど強いわよ！」

「ええ、知らなかつた……教えてくれよな～」

「ちょっとは自分で調べなさいよね」

剣人はそういうえばそんな力の名称前も聞いたなと思ったが、今初めてその意味を知つた。

確かに勉強不足だと、自分を戒めるが、この切羽詰つた状態で暢気に構えてもらはず、携帯を出して発動させようとする

「隙あり！」

携帯のエフェクトが始まる前に、影坊主が癪上を剣人の腹部に突き出してきて、諸にその攻撃を受けてしまう。

ガキーン！

しかし、剣人は鋭く突き出されたその一撃に、全く体を後ろにずらす事なく立ち尽くしていた。みると、癪上の先が守身の見えない壁で、完全に威力を相殺され止っていた。

それを見た剣人が、拍子抜けした顔で癪上を掴むと、

「なあ、お前つてもしかして弱い？」

「く……」

影坊主が初めて見せる焦りの色、表情からは読み取れないが、短く呴いた言葉から滲み出していた。癪上を剣人の手から引き抜くと、胸元にそれを引き寄せ体を庇うように水平に持つ。

二対一の状況、しかも相手の力量は自分より少し上と判断すると、影坊主は大きなジャンプをして、一人を飛び越えると、お堂の中へ向けて低いが中まで通る声で誰かを呼んだ。

「兄貴、助けてくれ！」

「兄貴……いねーのか？」

影坊主は格子の扉を癪上で押し開けて、声を掛けるが中は静まり返っていた。

「そりいや……猪狩つて来るとか言つてたな……く……」

「おい、なにしてるんだ？ 恐氣づいたか！」

背中を向けて何か呴く影坊主に、剣人が強気に言い放った。
さつきの影坊主の一撃が、守身の壁に完全に阻まれるのを見て、
剣人は影坊主の攻撃が大したことないと悟つてからは、完全に相手
の方が弱いと思いこんでいた。

影坊主は剣人たちに向き直つて、小さく跳ねると舞い降りて同じ
地に両の足をつけた。

「確かに……お前たちは強い……しかし侮るなよ

影坊主は癪上を頭の上に持ち上げると、くるくる回し始めた。

零は後ろに距離を開けて、薙刀の切つ先を影坊主に向けて構える。
剣人は神器を発動していなかつた。それは相手が弱いと悟り、オー
ラをこめた拳でも倒せるだろうという判断からだつた。

影坊主の両肩が下がつたかと思うと、次の瞬間　零と剣人のす
ぐ目の前にいた。

横から薙ぎ払ってきた癪上に、剣人は突つ伏したまま微動だにし
ない。

ガギーン

「ほり、やっぱり弱いよ、全然効かない」

剣人の守身の見えない壁の前に、癪上の威力がまたも相殺されて動きを止めていた。

それを見て影坊主は、慌てて後ろに小さく跳ね退く。

糞、……俺はスピードには自信があるが……

影坊主はF級妖怪の中ではスピードはずば抜けていたが、力の方は自信が無かつた。

剣人は警戒心を多少緩めて、足取り軽く影坊主にすたすたと歩み寄る。

完全に舐めきっていた。だが、雫は何か嫌な予感が心の底で燻つていた。

相手は妖怪、しかも得体が全く知れない、そしてさつきの仲間を呼ぶ素振り……鋭く思考を研ぎ澄ませながら、神妙な面持で警戒を緩めていない。

雫の予想は間違つていなかつた。突然鳥の鳴き声のようなものが闇の中に響き渡る

「剣人！ 後ろに避けて！」

雫は空を見上げると、月明かりに薄つすら浮ぶ黒い影をその目に捉えていた。

大声で叫ぶと、剣人は体をびくつかせ咄嗟に半歩後ろに下がる。

ドスン！

目の前を大きな鉄の固まりが掠めたかと思うと、足元の地が大きく振動した。

地震のような揺れと同時に、波紋のように広がる見えない風圧と砂煙が剣人を襲い、否応が無しに体が後ろへ弾き飛ばされる。剣人は悲鳴のような声をあげると、数メートル後ろの岩畳の地面に背中から派手に打ちつけた。その衝撃は守身を通して剣人の体に伝わり、思わず小さく唸る。

「剣人大丈夫！？」

素早く剣人に駆け寄ると、零は心配そうに見下ろして言った。
しかし、その間も影坊主ともう一つの影に、目配せしながら薙刀を構えて警戒を怠らない。

「だ、大丈夫、ビックリしただけだ」

零の声に反応できたおかげで、剣人は敵の強烈な一撃を間一髪で交わし、背中を地面に打ち付けたダメージも大したことは無かつた。剣人は右手で地面を強く押して、その反動ですぐに起き上がった。

「どうした？ 影坊主」

「冗貴……！ 帰つてきたか、こいつら急に襲つてきたんだよ、しかも一人で……助けてくれ……」

「なんだと！？」

お堂の前の広場の月明かりが差す一帯に、影坊主の後ろから何者かが姿を現す。

その姿を目にして二人が思わずぎょっとした。

鳥のような顔に人間のよう体がくつついた、半鳥半人とでも言つべきか。

上半身は裸で筋肉隆々、その逞しい右腕には金属の大きなハンマーのようなものが握られていた。体の2倍ほどあらうかと思われる大きな鉄の固まりに繋がる長い柄を右手で軽々しく持ち上げている。

「何者だ？ おまえ！」

剣人はその大きなハンマーを見て、圧倒されていた。しかし、それにびびって気圧されでは負けだと思い、気合を入れなおしきな声で妖怪たちに言った。

「わしか？ 金槌坊といつもんだが、言つた所でお前たち分かるのか？」

「いや、知らないけど……」

「なら、聞くなよ坊主」

金槌坊は饒舌に語る。影坊主と違い、流暢に話すさまには余裕さえ感じられる。

その言い知れぬ迫力に、剣人はどこか子供扱いされているような気さえしていた。

「それはそうと、影坊主は俺の弟分でな、何の恨みがあるか知らないうが、こいつを苛める奴は見過す事はできないんだ」

金槌坊の雰囲気が変わった。幾分重々しくなつたのを、剣人と零は声から感じ取っていた。

緊張した面持で二人は足を少し開き氣味にして構える。

「そこでお前たちに一択だ、このまま戦つて死ぬか、大人しく去るか、どちらか決めてくれ」

金槌坊はハンマーの柄で自分の背中をぽんぽんと叩き、返答を待つていた。

剣人は生睡を飲み込んだ。答えは最初から決まっている。雲も同様の思いだ。

「既に決まってるさ、このまま戦いは続行だ、だが、やられるのはあんた達だけだな！」

剣人が右手を突き出して指差して、妖怪たちに言つと、金槌坊は一度俯いた後、

「馬鹿が！」

雄たけびのような大きな声をあげたかと思うと、影坊主もその後を追つて二匹で襲い掛かってきた。

金槌坊はドスドス重い足音を立てながら、襲い掛かってくるがスピードはそれほどでもなかつた。その金槌坊を追い越し、最初に二人の間合いに入ってきたのは影坊主だった。

癪上の先を連續して剣人に向つて突き出してくる。

それはまったく効いていなかつたが、ひつこくその先を剣人の胸を中心当てていた。

剣人はそれを全く意に介せず、右拳にオーラを溜めた後、前に突き出そうとすると、突然影法師が横に素早く避ける。

「剣人上よー！」

剣人は零の声に反応し見上げると、頭上に大きなハンマーの平面がすぐ近くまで迫っていた。咄嗟に後ろに素早く退く。少し遅れて、剣人が立っていた石置が地響きをたてて、粉々に砕け散り、強烈な風圧とともに無数の石片が剣人に向つて飛んでくる。剣人は前方に張つている守身の壁をオーラで瞬時に強化させた。

弾丸のように飛んでくる無数の石片がその壁に当たつて弾かれる。隣にいた零にも石片は容赦なく降り注ぐが、同じく守身で多数のそれを弾き、大きな石片は薙刀を鋭く振るつて叩き落としていた。

「ふ……後ろが甘いぜ……」

突然一人の後ろから低い声が届いたかと思つと、鋭い痛みが連續して背中に走る。

思わず、二人は低く呻き前に体が弾かれた。

しかし、剣人は右足を前にふん張り、前に倒れる事を拒否すると、倒れかけた零の袴の端を掴んで引っ張り持ち上げた。

「ありが……」

零が剣人のほうを振り向いて、言葉を掛けようとしたとき、剣人の横から襲い来るハンマーを見て悲鳴を上げた。

「吹き飛べ！」

真横で聞こえた大きな声に剣人は瞬時に反応して肩を突き出し、オーラを左方に全力で溜めるが、ハンマーの平面が肩にあたると、物凄い衝撃と爆裂音とともに、体ごと宙に舞い隣にいた零も巻き込んで、お堂の扉に向つて弾き飛ばされた。

一人の体はピンポン玉のように弾かれ、木の扉を勢いよく突き破り、お堂の中の床に体をあちこち打ちつけながら、最後は壁に激しく

く激突して、前に弾かれ床にごろりと転がった。

「零……大丈夫か……？」

「う、うん、なんとか……」

剣人は半身を起こして零に弱弱しい声で言った。先ほど受けた金槌坊のハンマーの衝撃で左腕は痺れていだが、全体的にはそれほどダメージは受けていなかった。それは体を覆う守身の堅牢な壁のおかげである事は言いつまでもない。しかし、それとて、短い時間とはいえ、修行で得た陽の力のコントロールがうまく成し得てなければ、もっと深刻な怪我をしていてもおかしくは無かつた。零はふつとばされた剣人に巻き込まれたものの、直接攻撃を受けたわけでなく、格子扉を破り壁に激突したとは言え、それくらいの衝撃は、守身の壁を均等に体全体に張つていいだけで防げるレベルだった。なので、ほぼ無傷と言つていい状態だつた。

「しかし、どうするよ？」

「うーん……どうする？」

剣人は相手が強すぎるのは思つていながら、勝てる気も今の時点ではしなかつた。影坊主だけなら、なんとでもなつたかもしれない。しかし予想外の敵が現れて、戦力的には拮抗……というよりは押されていた。零も同様の気持ちで、剣人の質問に質問で返す事しかできず、打開策が見当たらなかつた。二人はまだまだ未熟だと痛感していた。

『もう、あんまり無理しないほうが……』

突然床からにゅっと伸びてきた浩太の顔に、剣人は心臓が飛び出るかと思った。

「こら、浩太！　お前な～、ちょっとは今の状況考えろよ！　びびつたじやねーか！」

剣人の心臓は早鐘を打っていた。胸を押さえながら息を整える。大きく息を吐いて目を半分細めて、浩太に軽く怒気をこめた言葉を浴びせかけた。浩太は頭を撫でながら、無言でお辞儀をした。

雲は既に体を起こして、その様子を近くで見ながら声を殺して笑っていた。

格子扉を破壊して、中へ激しく突っ込んだため、お堂の内部は木片が四散して床に転がっている。古いお堂だけに、床もあちこち痛んでいて、雑草も諸所に生えている。お堂の内部を外の月明かりが白々と照らしたいた。剣人は外へ出て行こうか迷っていた。迷う事ができるほど、余裕があった。それは直ぐに、追い討ちとばかりに襲つてくる雰囲気がないせいもあった。お堂の外では、影坊主と金槌坊が何やら話し込んでいる。それは本堂の中にいる一人の耳にも届いていた。

「なあ、影坊主、心当たりあんだろ？」

「はあ……そういや、俺が殺した受験生がどうたらこうたらって

「おい！　てめえ！　人間に手かけたのかよ！」

金槌坊は大きく怒鳴ると、影坊主を蹴り飛ばした。

影坊主は地面に横倒れて呻くと、左手をついてすぐ半身を起し、
金槌坊を見上げて、

「「、「めん、兄貴つーなんか、昔の恨み思い出してやつちまつた
んだ、許してくれ！」

と、震えた声で金槌坊の足元で土下座をしていた。

「馬鹿！ 僕に謝つてもしゃーねーだろ！ ちょっと待つてる！」

金槌坊はお堂の前までやつてみると、深く息を吸つて、言葉と共に吐き出した。

「おー、陽の者達よ、生きてるだろ？ やつきの攻撃くらいこじや大
したことないのは分かつてんだよ、ちょっと話あるんだ、出てきて
くれねーか？」

お堂の中の剣人と零は顔を見合させた。一人は少しの間を空けた
後、ほぼ同時に小さく頷くと、立ち上がってお堂の格子扉があつた
辺りからゆっくり外へ出て行く。浩太はまた床に潜ると、お堂の下
の方からその様子をぼーっと眺めていた。

「よう、やっぱり余裕だな、全然ダメージも受けなーつけだし、
さすが陽の者だ」

「あんた、陽の者に詳しいのか？」

剣人は金槌坊たちから普通に出てくる、陽の者といふ言葉に違和
感を感じていた。

一匹の口ぶりから前にも、他の陽の者と戦った事があるのではな

いかと考えていた。

溜め口で問い合わせる剣人を、雫は横目で内心ひやひやして見ている。

「そりや、詳しいさ、俺何年生きてると思つてんのだ？」

「三〇〇年ぐらう？」

「俺もいちいち数えてないから、正確なところは分からねえが
一〇〇〇年以上は確かに生きてるはずだ……」

鳥頭の金槌坊は額と思われる部分を、右人差し指で擦っていた。
放った言葉への確信は無いらしく曖昧さが漂っている。

それでも剣人は驚きを隠せないらしく、

「うへえ、漫画とかでよく見るけど、やっぱ妖怪って長生きなんだ
な～すげえ！」

少し興奮気味に大きな声を漏らしていた。金槌坊はその反応に戸惑っているらしく、背中をハンマーの先で器用に搔いていた。影坊主は後ろで体を竦ませ、終始無言で縮こまっている。

「とこりうどよ～」

金槌坊の雰囲気がまた変わった。重々しいプレッシャーが辺りに立ち込める。剣人は少し浮かれていた顔を改めて、多少体に力が入る。雫もいつでも後ろに引けるように、足の位置に気を払っていた。

「影法師から話は聞いたよ、お前たち、うちの影坊主が人を殺した事に腹を立てて、やつてきたんだろ？」

「そうだ」

剣人は力強く言い放った。

「うむ、困ったな、だがよ、殺した者はもう生き返らないよな、でよ、そこで相談なんだがよ、俺はこいつの兄貴分でさ、一応こいつに言つてたんだよ、人間を殺めるなってな。だけど、こいつは人間達を殺しちまつたようだ。だからよつ、今更、罪償える訳じゃないんだけどさ、もう同じ事は絶対させないからよ、今回は見逃してくれないか？」

金槌坊は最初の饒舌ぶりから少し口調が変わっていた。声量を押さえ気味に、途切れ途切れに言葉を繋ぐ様子から、どことなく後ろめたさのようなものが剣人達に伝わっていた。

剣人は考えていた。妖怪とは言え、それなりに仲間を思う気持ち、人間を殺す事への配慮や後悔の念、それはひしひしと伝わってきていた。しかし、死んだものは返つてこない。そして、影坊主が本当に人を殺す事をしなくなるのか、それを約束できるのか、そこをきつちり聞いておかないと駄目だと思い、重々しい口調で話し始めた。

「金槌坊、お前の話は分かった。ただ俺たちも、俄かにそれを鵜呑みにすることは出来ない。

だから、影坊主と話をさせて欲しい、聞いておきたい事がある」

金槌坊はふーっと息を吐き、後ろを振り返ると影坊主に手を振り、前に呼び寄せる。影坊主は体をびくびくさせながら、前に重い足取りで出てきた。

それを見て影坊主の顔を睨みながら、剣人は口を開く。

「影坊主、あんたの親分の話、そして俺が今言つた事なんだけど、もう人を殺めないと約束できるか？」

「ああ……一度と人を殺めねえよ……神様いやえーっと、閻魔様に誓つて……」

「どことなく頼りなく聞こえる。剣人は大丈夫かなつとは思いつつ、お堂の方を見て叫んだ。

「浩太二つち二二一」

「はへへへ……」

お堂の方に声をかけると、足元から浩太がにゅーっと現れた。剣人は思わず体をびくんとさせて、体を傾ける。

「つたく、お前つて緊張感ないよな……しかも怖い出方ばかりするなよ」

「すみません~」

謝つてはいるが、表情は常にポーカーフェイスを保つていて、感情があるのかないのか、剣人は幽霊つてみんなこうなのかなつと暗に思うが、山道の幽霊達を見た限りじや浩太限定だと結論づけると、気を取り直して話し始める。

「こいつな、この幽霊な、影坊主、あんたに殺されたんだよ、最後にこいつに謝つて欲しい、それで俺は一応気が済むんだ」

金槌坊が顎で影坊主に謝る事を促した。

しかし

「ケツ！ 何で幽霊！」とモゴモゴ謝らなきやならねーんだよ！ ふざけるな！」

影坊主は突然態度を変えた。剣人の顔が一瞬で強張る。拳にオーフを溜めて影坊主を殴ろうとしたその時

ドスン！ グチャ！

大きなハンマーが先に影坊主を叩き潰していた。悲鳴を上げる間も無く、この現世から命の火を消した影坊主。その横で金槌の柄を握る金槌坊が、沈鬱な空気を漂わせながら俯いていた。

その突然の出来事に、剣人も、零も、浩太も声一つあげる事が出来なかつた。

「ふ……こんなのを仲間だと思つてたとはな……」

金槌坊が大きなため息をつくと、影坊主のペシャンコになつた亡骸からハンマーを持ち上げ肩に担いだ。その亡骸はしばらくすると、砂のように粉々になり、塵となつて、吹き付ける冷たい夜風に溶われていった。

「じゃあな……」

金槌坊はそれを見届けた後、一言剣人たちに低い声で呟くと、鳥のような鳴き声をあげて、木々が生い茂る中へ姿を消した。剣人達はしばらくその場で、静寂の中に身を浸し無言で佇んでいた。

「剣人、行くわよ……」

「さつきまで寝てた?」

「おつせーよ、剣人ちゃん」

突然というよりは、鳴るべくして鳴ったチャイムに、剣人は顔を歪めながら、インター ホンにでた。ホンを通して騒がしい声が聞こえる。そう、今日はもう7月25日、夏真っ盛り、4人で海に遊びに行く日がやつてきたのだ。メンバーは親友の高木光一、雫の友達の木戸巴、雫、そして剣人。しかし、剣人は冴えない表情で応対していた。それも当然かもしれない。

昨日、妖怪と死闘を繰り広げた次の日に、海へ行くというハードスケジュールに体も心もついていかないようだ。当然、外にいる雫も、目のしたに限を作っていた。インタホーンのディスプレイに映る雫の姿にも生気が感じられなかつた。

「ちょっと待つてな……」

低い声で剣人は言つと、ホンをいきなり切つた。一応バッグに今日もつて行くものは詰めてある。一週間前までは、浮かれていて、鼻歌口ずさみながら準備していたものだ。

しかし、今日は、昨日の影坊主達との戦いで、体中あちこち痛いし、打ち身擦り傷といった身体的なものの他に、精神的にもそれなりにダメージが残つていた。

倒したというよりは、仲間に殺された影坊主。自分たちの眼の前であつという間にその命を散らした。妖怪とは言え、命を奪われる

所を目の辺りにしてしまった。剣人と雫の精神的ショックは計り知れない。海で楽しく なんて気分には到底なれなかつた。しかし、約束を今更破る事はできないし、もしかしたら海へ行く事によって癒されるかもしれないという淡い期待も抱いてた。

「さあ、行こうか……」

半そで半ズボン、麦藁帽子と行つた、多少古風な姿で剣人は家から出てきた。

手を振つて、合流すると4人は海へ向つて歩き始める。ここから海水浴場は目と鼻の先だつた。

雫と剣人は並んで歩く。一人の暗い様子にどことなく気をつかつて、高木と巴は二人並んでぼそぼそ話していた。

「ね～……なんか変じゃない……剣人君と雫……」

「そうだよなあ……なんか元氣ないよな、これから海へ行くつて言うのに……」

完全に雰囲気をぶち壊していた。とても今から海へ行く高校生の顔では無かつた。

4人で来ているのに、2人に分かれて歩く。しかも距離を少し空けていた。

亡霊のように歩く一人の暗い雰囲気に、近付き難いものを感じていたからだ。

「巴ちゃんは、どんな水着持つてきたの？」

「え、あ、見てのお楽しみ~」

突然高木が話題を変えた。というよりは方針を変更した。あの雰囲気では剣人達に突つ込みをいれて明るくしようとすれば、逆に飲み込まれて自分たちまで陰鬱になるのは目に見えている。ここは、巴と楽しく話して、一人だけで明るく盛り上がり という高木の機転のいい判断だつた。

それが功を成したのか巴と高木の組みは、会話に花が咲いていた。元々高木は巴と話すことが一番の目的だつたので、それなりに楽しんでいた。

そんな陽気な巴達とは対象的な陰気な二人組みは、とぼとぼと歩みを進めていた。

一人ともぼーっとした様子で、暗い顔で力なく歩いている。

剣人は少しこの状況にも飽きてきたので、零に顔を向けて低い声で言つた。

「なあ、俺たちも元気だそうぜ」

「え、そうね」

俯き加減で平坦な返事を、零は返した。それを見て剣人はため息をついた。しかし、気を取り直して、湿りきった零の顔に火を灯そうと言葉を出鱈目に連ねる。

「零も、どんな水着持つてきた?」

「ビキニ……」

零はまだ心ここにあらずといった表情で淡々と答えた。

しかし、剣人の心は揺れ動いていた。多感な高校生、しかも男である剣人は、ビキニ姿の零を想像していた。

ビキニか……零スタイルいいから、ちょっと楽しみになつて

きたな……

「どうしたの?」

「いや……」

剣人が顔を背けて歩いていたので、零が不審に思つて声をかけてきた。

低い声で返すものの、背けた剣人の顔は緩んでいた。鼻の下を伸ばしているのを零に悟られないために、顔を反対に向けて「ごまかして」といた。

#

「零～、胸大きいね～」

「そ、そり?」

零は顔を赤らめながら、白いビキニの紐を背中で結つ。

さつきまではけーつとしていたが、よくよく見ると大胆な水着だなあつと、思いながら少し照れ臭い思いがしてきていた。

巴は、じく普通に体を覆つた、腰の辺りにヒラヒラがついた薄桃色の水着を着ていた。

露出度は零の方が断然高い。その落差に零は少し後悔を顔に表す。

「男子諸君、お待たせ～」

「つま～～！」

巴が陽気に剣人達に言つた。剣人の力ない目に光が宿り始める。浩浩と照りつける陽光を受けて輝く二人の白い肌、特に零のプロポーションには目を見張るものがあった。

ビキニから漏れる大きなバスト、きゅっとしまつたながらかな曲線を描くウエスト、後ろに突き出たお尻、男性達は零のビキニ姿に目を奪われていた。

嘗め回すように視線を這わせる一人に、零は耐えられなくなり、巴の影に隠れて大きな声で、

「あんたたちー、じろじろ見るなー！ 变態ー。」

「ルルのん」

「ははは、女性は見られて美しくなるんだよん！」

剣人は思わず、顔を後ろに逸らして謝った。これではおっさんだと自戒した。

元々は口を呂めへ

高木は鼻を伸ばして、事実たかを明るくしようと努力もしていた。

ない事に、多少女としては悲しいものがあった。

く！ もうと露出度高いのにすれば良かつた！ 失敗！

海辺の少女。

4人はビニールシートを敷いて、パラソルを2本差して安息場所を確保していた。

巴は焼けたくないらしく、白い薄地のカーディガンを肩から懸けて、足を折りたたんで座っている。きつちりその姿はパラソルの影に収まっていた。

その隣に高木は座り、海で楽しそうに泳ぐ一人のことを巴と話していた。

「ちょっとあれ何〜？」

「だよな〜、何か氣使うだけ馬鹿みたいといふか……」

剣人と零は来るまでは、周囲が心配するほど元気がなかつた。だが、海に来てから二人の様子は一変した。青々と水を湛える海をして、最初に喜び勇んで走つていったのは剣人だった。さつきまでの様子が嘘のように、砂浜を駆けて海の中へ足を踏み入れていく。水中に潜つたり、クロールをしたりして、子供のように無邪気に遊んでいた。そして、その姿を目にした零も、笑顔で剣人に手を振つてからは、同じように海へ走つていって、剣人と一緒にはしゃぎ始める。水から出てきた剣人の頭を水中へ押し込んだり、押し込まれたり、水をお互いバシャバシャ掛け合つて楽しそうにしていた。そのあまりの変わりよつを、巴と高木は呆然とビーチから眺めていた。

「剣人〜、少しあそこの沖の岩まで競争よー。」

「望む所だ！ 3・2・1、スタート！」

剣人は泳ぎが得意だった。クロールでじんじん沖へと泳いでいく。冴え渡る手の回転、絶妙の息継ぎ、水泳の選手かと見間違つほどのスピードで、零を離しにかかる。

しかし、零も負けていなかつた。バタフライ泳法で、両手を大きく広げ、飛び魚のように水面を跳ねる。体のバネをうまく利用しながら、水面を搔き分け進んでいく。最初少し離されかかつたが、今は剣人の直ぐ後ろまでやつてきていた。

「ゴール！」

それでもやはり、最初に岩にタッチしたのは剣人だつた。右拳を高々とあげ、勝利の雄たけびを上げていた。少し遅れて零が岩に触る。悔しそうな顔で、右拳で水面を叩く。

「まあ、こんなもんや」

「フライングよ、ずるい！」

「馬鹿！　どこがだ？」

零があまりの悔しさに、剣人に理不尽な絡み言葉を投げかけると、剣人はむきになつて反論した。子供のけんかのような言い合いがその場で展開される。

その姿を砂浜で見ていた一人が、何やら冷めた目で話していた。

「あいつら、仲いいよな～」

「うん……」

雫と剣人は散々泳ぎ回った後、砂浜へ帰ってきた。二人とも爽やかな顔でシートの上に、ほぼ同時にドカッと音を立てて座った。

「おい、お前等、海きたのに泳がないのか？ もつたいないな～」

「剣人も竹下も楽しそうだな」

「そりゃ～海久し振りだからな～、な～雫？」

「うんうん、やっぱり氣持ちいいよね！ 巴も一緒に泳げりよ～！」

雫はカーディガンを羽織ると、巴の横に移動した。何か元気のない顔で座る巴を心配して、盛んに海に行こうと誘っている。

剣人は家から持ってきた黒のサングラスをかけて、頭の後ろで手を組み背中をシートにつけて寝転がる。

いつの間にか立場が逆転していた。なんだか冴えない顔を高木は浮かべていた。しかし、それも一時の事で、何か吹っ切れたように立ち上がると、

「巴ちゃん、行こう！」

「ええー？」

「ほりー！」

精悍な顔を巴に向けて大きな声を放ち、右手を巴に静かに差し伸

べる。巴は一瞬顔を赤らめ躊躇つたが、高木が白い歯を光らせにこりと笑うので、思わず微笑んで右手を握り返した。

そして、剣人と雫を置いて、一人で海へ駆けて行つた。その様子をみていた雫は、少し呆気に取られていた。

「あの二人、仲いいわね……」

「ん？ そろみたいだな」

雫がそう呟くと、剣人は頭に載せていた麦藁帽子を指で少し上げて、浅瀬で遊ぶ二人を見て同調した。

#

「なんだあれ？」

「ん？」

剣人は砂浜を鋭い目つきで、練り歩く少女を見て言つた。鋭い目つきだけなら、剣人は話題にも出さなかつただろう。しかし、その少女の服装が独特なため、目を奪われてしまった。

砂浜とあまりに場違いな巫女姿をした少女が、赤い袴の裾を上げながら、海岸で泳ぐ人々に何か怒鳴りたてている。

「うわ、海に巫女姿つて何考えてるんだる……」

「そりいや、お前も巫女姿だつたよな！」

剣人は守身を発動させた時の零の姿が、少女と重なった。それを口にすると、零が少し罰の悪そうな顔で一言、

「私は本物じゃないし、もし本物着る事あっても、場所選びます！」

強い口調で言い切つた。変わった少女と一緒にされて怒っているようにも見える。

「まあそうだわな～」

剣人が間延びした口調で、少女を眺めながら言った。

#

「ほら、だから、あなた！見えないの～？」

「はい？」

少女は海から上がりってきた若い男性に、強い口調で捲くし立てた。男性はきょとんとした目で少女を見降るす。少女は小柄だった。度のきつそうな茶褐色の眼鏡、その奥に光る円らな黒い瞳が、男性の肩の付近を食い入るように見つめていた。

「ふむふむ、あんた、去年ここで溺死したのか、悪さするつもりはないよ、でもね～」

少女は男性の肩の付近に顔を近づけて、ぶつぶつ一人で呟いてい

た。

「 もう行つていいかな？」

「あ、ちゅうとまつて、あおむつ、面倒くせこから……」

少女は少し低い声で呟くと、男性の肩を何かを払つよつて優しく撫でた。その突然の奇行に男性は氣味悪ながらも少し照れていた。少女が比較的可愛いせいもある。

「はー、じつもお世話様、いもうへつびうわ~」

少女は気が済んだらじしく男性にぶつかりながら離つて、辺りに鋭い視線を流しながら練り歩き始めた。

剣人は泳ぎ疲れたのか、いつの間にか、まどろみの奥深く意識を沈め寝入っていた。

影坊主……金槌坊……ちょっと一人でよつてたかつて……

夢の中で剣人は、この間の妖怪たちと一人で戦っていた。暗闇の領域で、一人での手ごわい一匹と戦闘を繰り広げていた。その強さは剣人の潜在意識に強く焼き付けられていて、今悪夢となつて剣人を苦しめていた。

ちょっとたんま……まつてつて……

『問答無用』

二人の妖怪が一斉に倒れた剣人に向つて武器を振り落としてくる。

「こり、一人がかりは反則だぞ、まつてつてば！」

剣人は悪夢の妖怪にたんまの意味で手の平を強く突き出していた。その瞬間、不意に目が覚める。サングラスを通してパラソルの裏側が目に映る。はつとして素早く半身を起こし前を見渡すも、砂浜は見えるが妖怪達の姿は無かつた。剣人はこの時やつとさつきのが夢だと分かり、安堵の息を漏らす。

「剣人……」

「あの～、ちょっと、あなた……」

剣人は零の声を聞き取ると、首を左に捩つた。少し怪訝な目を零は剣人に向けていた。

そして、右側からも声が届く。零よりは幾分声色が高い。そちらへも振り向いてみると、さつきの袴姿の女の子が右膝をついてこちらを見んでいた。

「えーっと、何か用？」

女の子があまりに自分を強く睨むので、剣人は少し氣後れを覚えながらも言葉を搾り出した。

尚も、女の子は睨み続けていたが、ふーっと深い息を吐くと低い声で言った。

「さつき、あなた、寝ぼけてたとは言え、私の胸三度揉みました……」

「ええ！ 知らねえよ……」

「まあ、そんな事はいいんですね」

剣人は一瞬赤面したが、記憶に無い事なので、口を尖らせて首を横に振った

女の子は剣人の表情から、故意ではない事を悟るとゆっくり立ち上がった。

そして、剣人の直ぐ後ろの砂場を見て、人差し指をそれに向ける。剣人は体を捩つて向き直り、きょとんとした目でその場所を見つめたが何も見当たらなかつた。

零も何も見えないらしく、少し奇異な眼差しで女の子を眺めていた。

「……」です、見えますか？」

「はあ？ 何にも……」

剣人は面倒くさそうに答える。変な女の子に絡まられて、少し不快な表情を浮かべていた。

女の子はそれを聞くと、だんだん顔つきが険しくなり始める。

「ほら、ここにいるでしょ！ 間の抜けた顔の年若い高校生風の男が！ 顔だけだしてあなたたち見てますよ！」

「いや、見え無いんだけど、ん、ちょっと待てよ……」

剣人は女の子の指先の示す場所に、何も見えてはいなかつた。だが、『間の抜けた年若い男性』が妙に頭の中で引っかかる。

えーっと、普通では見えない間の抜けた高校生風の男つて……
幽靈……間の抜けた……幽靈……高校生風の男……つてまさか！？

「ああ、ちょっと待つてね、今見るから……」

剣人は何か思い当たつて、咄嗟にある能力を発動するため携帯を取り出そうとした。しかし、すぐに慌ててその発動を押さえ込む。周囲には他にも海水浴客がいるし、直ぐ横には女の子もいた。

愛想笑いを女の子に向けた後、きょろきょろ辺りを忙しく見渡す。どこか力の発動を見られない場所が、無いものか探していた。零は剣人の手の平に、一瞬携帯の端が浮ぶのを捉えていた。そのため、剣人がどうしたいのか分かつたらしく、同じように辺りを見渡して

いた。

「剣人、トイレは？」

「おお、雲、ナイスだ、じゃちょっと便所いってくわ」

「ちょっと、君も待つててな」

剣人は徐に立ち上がると、雲に笑顔で言つた後、女の子に手の平を軽く一三度突き出した。

さつき胸を驚づかみされた事もあり、女の子は少し後ろへ体を逸らす。剣人は身を翻すと、近くの砂浜にある仮設トイレへと駆けていった。

#

「お待たせ〜」

「おかえり、剣人！」

「長かつたですね〜……」

女の子は待ちくたびれたといったかんじで目を細めて言った。

「悪い、便所混んでてな、前の奴大してたんかな〜長かつたし、臭かつたしよ〜たまんね〜よ！」

女の子はそれを聞いて少し目を閉じて閉口していた。

零も同じ気持ちなので、その態度は理解できた。剣人は初対面の女の子の前で「デリカシー無を過ぎる」と心で思うも、古い付き合いの零からしたら許容できる範囲だった。

「で、どう?」

零は雰囲気を変えるため、話題の転換を図る。

「あれ、いないじゃん、幽靈どこいった?」

剣人がさつきの砂場の辺りに田をやるも何もいなかつた。首を傾げて辺りに視線を這わせる。目を閉じていた女の子がそれを聞くや、素早く体を浮かせさつきの場所を覗き込む。

しかし、そこにはさつき捉えていた者の姿が無かつた。

「あれ?、消えたのかな?」

「ふー、あの野郎……」

剣人は頭を搔きながら目を細めた。そして、面倒臭そうに深く息を吸うと、大きな声で叫んだ。

「浩太、出て来いーー!」

怒声を孕んだ声が辺りを突き抜ける。

『はい、呼びましたか~?』

すると、零の背後からひょろりと顔をだし、その間の抜けた顔を剣人に振り向ける。

「また、とんでもないところから」

零は剣人が自分を見下ろして話しているので、浩太が自分の近くにいる事に気づいていた。

女の子は剣人と浩太が淡々と言葉を交わすのを、呆然と眺めていた。

「なるほど〜、あなたは特殊の力を持っているってことですね」

剣人は詳しくは話さなかつたが、女の子に軽く靈が見えること、靈と話せることを伝えた。

それを聞くと女の子は、表情をいくらか柔らかくして、口元を綻ばせる。

さつきの高圧的な態度とは打つて変わって、人懐っこく剣人と話していた。

「良かつた〜同じような能力ある人がいて〜！」

「ははは……」

まあ借り物だけどな と剣人は苦笑いをした。

零は話途中に抜け出していた。同じ力が使えるのに、自分だけ浩太を視認できないのが悔しかった。話混じりたさに更衣室へ向つて、力を発動させに行つっていた。

「ただいま〜」

零が笑顔で一人に言った。

そして得意な顔で浩太に大きく手を振つて、

「浩太ちゃん！ 久し振りね！」

と、女の子に分かるように大きな声で、自分も見えることをアピールした。

剣人は零のわざとらしさを見て、声を押し殺して笑っていた。

「おお、あなたも見えるんですか？」

「はい！」

「わ～奇遇だなあ。こんな場所で一人も、同じ能力もつ人と出会えるなんて！」

女の子は感無量つと言つた顔で胸元で手を合わせ、メガネの奥の黒い瞳を煌かせ二人を眺めていた。

「ああ、自己紹介まだでしたね！ 私は水小路瑠璃とります

「俺は斎藤剣人だ、よろしくな！」

「私は竹下零です、よろしく～」

三人は夏の太陽の日差しに負けないくらい、明るい笑顔で挨拶を交わしていた。

「俺……浩太です……よろしく……」

そんな中、忘れされていた浩太が、和氣藹々と話す三人の真ん中から、ぬ~っと下から青い顔をだして、インパクトのある自己紹介をした。

思わず、三人の表情に黒い影が走った。

「ところで、水小路さんは何してるの？」

「あ、瑠璃でいいですよ、上の苗字堅苦しくて、あまり好きじゃないの」

眼鏡の真ん中付近を指で軽く持ち上げて零に言った。

そして、背中まで伸びる黒檀のような黒髪に、手を入れて梳きながら、

「海のパトロールしてるんですよ、毎年、海での水難事故は多いですからね」

淡々と真顔で言った。それを聞いて零は、気の抜けたような声を発した。

剣人もそれを聞いても、どこか納得がいかない顔をしていた。

溺れた人の救助をする海の監視員の人間なら、水着着用は必須。だが、瑠璃は神社の巫女さんのような格好をしているし、とても救助側の人間には見えない。溺れている人間を発見するボランティアのようなものだとしても、その巫女特有の草履でこの砂浜を歩き回るには不便極まりないとさえ思う。

あまりに不可解な点が多いので、剣人は興味本位で瑠璃に少し尋ねてみる。

「あのやー、瑠璃……ちゃんといいかな

「いいですよ~！」

瑠璃は剣人ににこりと微笑んで言った。

「君はいらっしゃなんだけど、水難事故を見張るにしても、なんていの、あまりにほら、格好がなんていうかそれらしくないよね？だからその～」

剣人は初対面の年下の女の子に、できるだけ棘のある言葉を排除して聞いてみた。

大雑把で口下手の剣人からすれば、かなり抑えた聞き方をしていた。

「分かりますよ、斎藤さんの言いたい事は。つまり、場違いな姿で海のパトロールとか可笑しいと思つてるんですよね？」

「いや、えーと、その～……」

剣人は視線を下げて曖昧に咳く。
だが、瑠璃は朗らかに笑うと、

「あはは、そんなに気を遣わなくていいですよ！　どう見ても可笑しいですから！　実はですね、私は普通の水難事故のパトロールをしているわけじゃないんですよ。どういうことかというと、さつき私、あなたの傍に漂う浩太さんを発見しましたよね？」

「ああ、うん」

浩太は名前を出されると、それに呼応したかのように、瑠璃の後ろにすーっとシートの下から現れる。瑠璃の顔近くまで体を寄せてくると、苦笑いしながら片手で押し返し、浩太の顔の接近を阻んだ。

「私は昔から靈や物の怪といった、普通の人が気づかない者達を見る事ができるんです。そして、私の家系はそいつた不可思議な存在と関わる事を生業としてきた一族なんです」

「ここまで説明した瑠璃は少し物思わし気な顔で、首を傾げて言葉を止めた。

雪と剣人は琴線に触れる言葉を聞いた途端、はつとして耳を欹てる。

瑠璃はしばらく腕を組んで黙っていたが、だんだんイライラした様子で体を揺すり始めた。

そして、頭を乱暴に搔き毬つた後、人差し指を徐に立てて剣人達に向けると、

「難しくいうのだめなんですよ！ 簡単に言いますね！ 私の家系は陰陽道で靈を払つたり妖怪をなぎ倒す事を生業としています。所謂現代に息衝く陰陽師です。そして、私はひよっこー。なので、今修行中の身として、取りあえず、陰陽師としての腕を上げるために、人間に害をなす海の悪しき靈たちや妖怪達を探し出すため練り歩き、見つけたら祓うつなり、しばくなりしています！」

瑠璃はハアハアと息を荒立たせ、最後まで言い切った後は、憑き物が落ちたみたいに平然とした顔を一人に向けて微笑んだ。

その捲くし立てるような口調に、一人は気圧され体を少し退いていた。

剣人はそれでも話は全て聞いていたらしく、冷静に今聞いた内容を分析していた。

『陰陽師』とか言われてピンと来ないが、結局、自分たちと似たようなもんだよな？

「まあ、よく分かんないけど、君は幽霊や妖怪が悪さしないようこ
頑張つているんだね」

「そうです！ そうです！ その通りなんです。あ～、この説明で
こんな快く納得してもらつたの初めてだ……」

何故か一人の前で胸元で手を組んで、感激の余り涙を流す瑠璃。
剣人は大袈裟だなあつと思いながらも、なんとなくその気持ちが
分かる気もしていた。

雲も同様の気持ちだった。二人も借りているとは言え、特異な力
の持ち主である。

その能力の話は、陽の力の関係者、つまり、雲、剣人、鬼塚、源
信といった者の間でしかできない。それは、他の人に話したところ
で到底理解を得られないと思うからだ。

この瑠璃も普段から、似たような閉塞感や孤独感を味わっている
のだろうと一人は思った。

和氣藹々とその後も三人で話していたが、

『瑠璃～！ 大変だ～！』

「ん～？」

瑠璃は自分の名が呼ばれると、振り向いてそちらへ視線を向けた。
剣人はその瑠璃の視線の先にいる者の姿を見て、瞬時に青褪める。
砂浜を異形の姿をした者が、こちらにぴょんぴょん小高く飛び跳
ねながら向つてきていた。

一本足、一つ目、大きな口、鋭い牙、大きな丸い体 どこから
どうみても、妖怪と言つて差し支えない姿をしている。

「きやーー剣人！ ビーットイ、妖怪がやつてくるよー。」

雲も明らかに狼狽していて、尻を地面につけたまま、ずる～っと砂浜まで後退つて取り乱していた。

シートは斜めにずれて、雲の大きなお尻を引きずった跡が、砂浜に歪な直線を描いていた。

その妖怪が瑠璃の傍でやつてくると、益々一人は落ち着きなく騒ぎ始める。

「どうしたんですか～？」

後方の喧騒に気づいて、瑠璃はきょとんとした顔で剣人達に振り向いて言った。

「そ、その妖怪！ 何！？」

剣人も当等我慢できずに、雲がいる付近まで素早く逃げると、右人差指を手を目一杯伸ばしながら妖怪に突き出し、瑠璃に大きな声で尋ねた。

瑠璃は剣人の指差すだたらをぼーっと見つめた後、やつとその存在の異質さに気づいたのか、

「ああ！ “めんなさい！ これ私が式神として扱っている妖怪なんですよ～！ びっくりしますよね～！ 私へばだから、一般的に陰陽師が使う十二天将とか強い靈体は使えないのに、下級の妖怪を式神として使ってるんですよ～！」

瑠璃は頭を拳でこつんと叩いて、舌を少し出すと苦笑いを浮かべる。

そして

「これ、一本だたらのだたらです。私の式神です！ よろしく～！」

軽い口調で淡々と妖怪を一人に紹介した。

だたらは大きな口の両端を吊り上げて不気味に微笑む。剣人と零
は、瑠璃に笑顔でだたらの紹介を受けたものの、恐怖は拭い切れず、
青褪めた顔は引きつっていた。

複雑な乙女心。

剣人達は瑠璃から物の怪の話や、陰陽道について色々話を聞かせてもらえた。

といつても、瑠璃が一人で話している状態ではあったが。だたらはずっと傍にいるが、一人は大分その異形の姿にも慣れてきていた。

雲などは、だたらの頭を平然と撫でてみたり、ゴツイだらの手と握手を交わしたりしていた。

にやつと笑う愛想の良いだたらだが、剣人は傍にいる事に慣れたとは言え、どうも触る気にはなれなかつた。その姿に生理的に受け付けないものがあつたようだ。

瑠璃は永延と自分語りを続けていたが、次第に話題がつき始める。そして、何か思い出した様子で、ただらを見つめて、

「そういうや、だたら、何か言つてなかつたつけ？」

「えーっと、なんだっけへ、うーん、あーそつだ！ 海岸に磯女と濡れ女見ましたよ」

「なんですかー！」

瑠璃はそれを聞くや、途端に表情を強張らせた。

剣人はさつきまでとは明らかに、様子が一変した瑠璃の顔を見つめて、

「どうしたん？」

「えーっと、あ、ちよつと見てきまーす！」

急に立ち上がると焦った様子で、瑠璃はだたらを連れて猛然と砂浜の向こうへ駆けて行つた。

「なんなんだ？」

剣人は零と顔を見合わせて首を傾げる。

「さあ……？」

よく分からないと言つた表情で呆ける一人。

「ただいま」

そんな時、高木と巴が泳ぎつかれたのか、少し疲れた顔で戻ってきた。

「お！ おかえり～ご両人！」

剣人はぶっきらぼうに言つと、一人の座る場所を空けてやつた。その場所へお尻からどかつと座り込む巴。疲れた顔でタオルで身体を拭いて一息ついた。

「よく泳いだね、高木君」

「まあ遊びにきたんだし、これくらい泳がないとね！」

高木は疲れではいたが、つとめて笑顔を作つて快活に巴に返事をした。

そして、立つたままシートに腰下ろす三人に向かつて、

「飲み物買つてくるけど、なにがほしい?」

「俺サイダー」

喉が渴いていたのか、即答の剣人。

「私は温かいのがいいなあ」

巴は海につかりっぱなしで冷えていたので、暖かいミルクティを頼んだ。

あるかは不明だが……

「私はいらない」

雫は飲み物 자체いらないようだ。

全員の注文を聞いた高木は、一声みんなにかけて、海の家に向かつて走つていった。

#

巴は海から上がつてくる時、巫女姿の女の子が一人と話しているのを目にしていた。
あまりに場違いな格好をした女の子と一人が、何を話していたのかが気になり、それとなく尋ねてみる。

「ねへ、ここで巫女姿の女の子いたよね?」

「ああ、いたよ」

「なに話してたの？」

巴が興味深深と言つた眼を向けて、剣人を覗きこんできた。

「えーっと……」

返答に困つて言葉に詰まる剣人。

素直に聞いた話を巴に伝えるわけにもいかず…… 雪に目配せしてみる。

「あ、その～えーっと」

雪は剣人の目配せを受けて、何か良い言い訳は無いか思案したのち、

「ああ、そそ、海でコスプレ写真とらせてるらしくって一枚どうですか～？って聞いてきたけど、ほら生憎ね、私たちそういうの興味ないし、カメラ持つていないしね！」

「コスプレ……」の暑いのにわざわざ海で？」

「ちょっと変わった人みたい！なんか……そひ、田立ちたかりやなのかもね！」

雪はすぐに良い言い訳が浮ばなくて、出鱈田をつりつりと巴に聞かせた。

隣で肘をつきながら剣人が、片目を瞑つて田端を痙攣させていた。苦しいとは言え瑠璃を変人扱いで纏めた雪の妄言に、それはない

だらうつといった表情である。

「へー、変わった人もいるもんね~」

「ただいま～みんな！ 買つて来たぜ！」

高木の声を聞くと、巴の思考から一瞬にして瑠璃の話題が離れる。

「ありがとー高木君ー。」

高木に気持ちを込めた労いの言葉を巴はかけた。

「サンキュー高木ー。」

剣人はサイダーを受け取ると、プシューっと音を立ててぐいぐい飲み干していく。

零は巴の態度がいつになく愛想よく見えていた。
普段自分と話す時の、ほんやりした口調と比べると違和感を感じていた。

とはいって、高らかに声を張り上げて、楽しそうに[話す巴]と高木を見て、そういうことかっと納得はしていた。

何気に一人から視線を外して剣人を見つめる。

剣人は零のどこか物言いたげな視線に気づくと、飲み干そうとしていたサイダーを零の顔に近づけて、

「欲しい？」

「いえ……」

「ふーん、何か元気ないな？」

「そんな事ないよ……」

まあ、別にね～
……

どこか浮かない顔で一人の楽しそうな横顔を、零は瞼を伏せ氣味に眺めていた。

嵐の予感。

妖怪はある一定の人間に己の意志で、自分の姿が見えるように実体を現すことができる。

だが、それは本当に稀な場合で、普通は人間の目にその姿が触れる事はまずない。

幽霊と同じで一部の特異な能力を持つ者以外には、その姿は見る事ができなかつた。

よつて、普段は大気のような存在で、だたらが密集する場所を飛び回つても、人間に接触したりする事はなかつた。

ただし、先にも述べたとおり、己の意志で人間の前に姿を現す妖怪は別である。

そういうつた妖怪は、靈能力のない多数の人間が見る事もでき、接觸する事もできる。

今、瑠璃が目の前に寝そべる女性二人も、周囲の人間の目に自然に映つていた。

「こら〜、そこの妖怪二人組！」

瑠璃はパラソルの影にシートを敷いて、横たわる年若い女性二人に怒鳴つた。

カラフルなビキニで身を覆い、サングラスをつけて寝そべつっていた。

どちらも太陽の日差しに肌が焼けた様子がなく、青白い肌が際立つて見える。

一方の女性が瑠璃の声に気づいて、顔だけ瑠璃に傾けた。

「どなた？」

「妖怪に名乗る名などないわ！」

瑠璃は眉を吊り上げて女性を睨んだ後、指を差して猛々しく言いつつた。

「へ～分かるんだ、私たちの正体～！」

「もちろんよ！ これでも陰陽道を生業とする一族の娘よ！」

「お……」

瑠璃が放った言葉に、瞬時に一人の穏やかな様子が一変した。もう一方の赤茶色の短髪の女性が、半身を起こして瑠璃に顔を向けた。

「あんた……陰陽師……？」

「そうよー。」

瑠璃がそう強く言い切ると、一人の女性は顔を見合させた後、瑠璃に素早く視線を注いだ。

そして

「ふ……せっかくの海水浴を人間たちに紛れてのんびり楽しんでたんだけど……そもそもいかなくなつたわね……」

と、低い声で呟くと赤茶色の髪の女は立ち上がり、サングラスの縁を指で摘んで持ち上げた。

瑠璃はその女のサングラスの影の瞳に見据えられると、顔を強張らせて右足を後ろに引き踏ん張った。死んだ魚のような白濁色の眼

が、サングラスの影から瑠璃を鋭く睨んでいた。

「小娘！ 面貸しな……！」

赤茶色の髪の女はサングラスの縁を下げる眼を覆つと、ぶつきらぼつに瑠璃に言い放つた。それを聞いていた隣の青黒い髪をした長髪の女性は、面倒くさそうに濡れた髪を搔き剃つて立ち上がる。

「どこに行こうっていうの？」

瑠璃は強気に一人に言った。

二人に蔑むような笑みを向けている。

「ふん！ ついてくれば分かるよ」

赤茶色の髪の女は瑠璃に振り向かず、不機嫌な様子で言つと海水浴場のはずれへと歩いていく。青黒い髪の女もすーっと砂浜を滑るように付き添つ。

瑠璃はその二人の後を慎重な足取りで、少し間を空けながら追跡した。

#

剣人と零は高木と巴が帰つきて少し談笑した後、入れ替わるようにして、また海で一緒に泳いでいた。沖にある岩場まで一緒に泳いでやつてくると、零が不意に剣人に呴く。

「ねえ、剣人……」

「 ん？」

「 瑠璃ちゃん、あの後どこ行つたんだろうね？ あれから姿見せてないけど……」

「 さあなー、そういうや、なんか言つてなかつたつけ？」

雲は剣人にそう言われ、瑠璃と別れる前の様子を思い浮かべてみる。

宙空を見つめながら、その時の情景を頭に描いていると、だたらが話していた内容に聞きなれない名称があつた事を思い出した。

「うーん、そう言えば、だたらが磯女とか濡れタオルとか言つてたような……」

雲はつる覚えだつたため、顔を傾けて曖昧なかんじで剣人に言った。

「はあ……？ なんじゃそりゃ……」

「何だらうね……」

「ん~……待てよ……磯女ってなんか聞いた事あるな……」

剣人は磯女の名称を聞いてから、頭の端に何かひつかかるものを感じていた。首を傾げてその記憶の片隅に埋もれる何かを、思い出そうと頭を捻る。

しばらくして、眼を見開き、弾いたように顔を上げると、

「ああ、なんかの昔話で読んだ気がするぞ、確か……海に出る女の妖怪だよー。」

「ええ……！ 妖怪？」

「うん……確かに、男を騙して海に沈めるみたいな悪い妖怪だった気がするなあ」

雲は剣人から聞いた話が、だったらが言った磯女と、微妙に接点があるような気がしてならなかつた。

実際に出あつて戦つた事のある雲にとって、もう妖怪は昔話に現れる非現実的な存在ではない。実際にこの世に存在する者たちである。

磯女が實際にいるとして……だったらその名前を聞いた後、血相搔いて駆けて行つた瑠璃ちゃん……うーん……ああ！？

「剣人分かつたわ！ 瑠璃ちゃんその磯女つて妖怪を退治しに行つたのよ！」

「ええ、まじ？ それも一人でか……？」

剣人達は前の妖怪との戦いで、その尋常でない強さを身に刻んで分かつっていた。

顔を見合わせ、二人は時間が止まつたように一時黙つていた。だが、そのうち言い知れぬ嫌な予感が、体に寄せる波の冷たさに紛れて、背筋を冷ややかに走る。

「おい、雲！ 浜辺に戻るぞ！ 瑠璃ちゃんが心配だ！」

「うん……幾ら陰陽師だからって、妖怪一人相手とかさすがに……急い」！

二人は勢いをつけて水に潜ると、水面を搔き分け浜辺に向かって泳ぎ始めた。

新たな闇の影。（前書き）

覚えていないかもしませんが……
ぱつりぱつり書いていくつかと思っています。

新たな闇の影。

海水浴場のはずれに瑠璃と妖怪達はやつてきた。じつじつとした身の丈ほどの岩が瑠璃たちの周りを取り囲み、人気は皆無に等しい。相等、接近してこないと、人の目につく事は無さそうな場所だった。だが、瑠璃は念には念を入れて、陰陽師の使う手印を交えながら、何かを口ずさむと、

「 結界を張つておいたわ、人間はこの一帯に近付く事はないから、思う存分やれるわよ！」

瑠璃は不敵な笑みを浮べ、強気な口調で妖怪達に指差して言った。人を寄せ付けない見えない結界を、瑠璃はこの辺り一帯に蜘蛛の巣のように張り巡らした。

この結界は、近付く人間に自然と遠ざかる意思を、植えつける陰陽師の呪い（まじない）の一種だ。

「ふーん、お前、最初っから話合つ氣はないって態度だね」「いるんだよね～、こういう血の氣の多さだけで、突っ走る世間知らずな小娘がね～」

「まあ、私たちもそのつもりだから良いくけどな……」

赤茶色の髪の女はサングラスを投げ捨てる、白濁色の瞳を瑠璃に向けて両足をそろえた。

すると、足の境が融合し始め、一つの胴体のようなものに姿を変えた。しばらくすると、その胴体は後ろに長く伸び始め、蛇のような長い体躯へと変わつていった。青黒い髪の女はその変化に乗じるように、同じく姿を変えていた。

白装束に身を包み、褪せた紫色の帯を腰に巻いている。青白い顔はそのままに、濡れたような青黒い髪だけが異様に長く伸び、足元までだらりと垂れて、砂地にべつとつと張り付いている。

「我が名は磯女……」この海岸で800年の時を生きてきた水妖だ……そして、そいつは、濡れ女、同じくここに棲みつく水妖の仲間……

…

「 知つてゐる……」

妖怪達が厳然として正体を語ると、瑠璃はにべもなく呟いた。
だが、妖怪達は特に驚く様子も見せず、気に入らないと言つた様子で眉を潜め、口を大きく開けて、威嚇の声と共に鋭い牙を剥いた。磯女の赤黒い口腔から蛇の細長い先分かれした舌が、シューっと乾いた音を立てて伸びている。

「陰陽師の小娘！ 戦う前に先に聞いておく事がある……」

「はあ？ まだなんかあるの、じうぞじうぞ～」

臨戦態勢に入ろうとしていた瑠璃に、磯女がまだ話しがあるらしく声をかけてくる。
それに面倒くさそうに正面を開いて舌打ちすると、瑠璃は妖怪達に呆れた様に言を促した。

「お前は陰陽師と言つたが、本物か？」

「…………一？」

瑠璃はそれを聞くや、瞳に強い輝きを宿して、足を開け氣味に深く息を吸い込む。

「もひつちるんよー 私はこじより少し離れた場所に居を構える陰

陽師の一族……水小路家の13代目の孫娘にして、闇で暗躍する陰の者の監視と退治を生業とする稀代の美少女陰陽師！ 水小路瑠璃上一

瑠璃は長い台詞を舌を噛まずにさりとつた。この台詞は妖怪達の前で格好つけるように何度も鏡を見ながら練習したものだつた。言い切った後は鼻を擦りながら、頬を少し赤くして妖怪達に睨みをきかしていた。

やつと、詰まる事なくさりとつと言えたわ……長かった……

瑠璃はしばらく、右拳を胸元で握り締め、今の台詞を噛まずに言えた余韻に浸つていた。

だが、妖怪達の反応は極めて冷ややかなものだつた。寧ろ長い台詞に間を空けられ、更に不機嫌そうな顔で歯を力チカチ言わせていた。

「ふ……まあいいわ……」

磯女はぷつと赤茶けた唾を砂地にはき捨てた後、少し落ち着きを取り戻すと、背の黒い鱗から何か紙片のようなものを取り出し瑠璃に向けた。

「 小娘、この写真に載つてゐる男、知らないかい？」

不意に写真を突き出され、きょとんとした目でそれを眺める瑠璃。それには黒っぽい外套のようなものに、すっぽり身を包んだ男が映つていた。

「ううん、見た事ないわね……」

「その子格好いいでしょ！ なんか世に恨みでもありそうな拗ねた瞳が最高～よね！」

濡れ女が横合いから、何やら浮ついた発言を挟んでくる。緊張感ぶち壊す濡れ女の言葉に、磯女はしゃ～～～と長い呼氣を吐き出し、怒気を孕んだ視線を濡れ女に向けた。

それを受け、濡れ女は消え入るような声で、ハハと薄つすら笑うと、少し後ろにすくと滑り縮こまっていた。

その間も、じ～っと瑠璃は食い入るように写真を見つめていたが、やはり、身に覚えがないらしい。目を閉じて首を横に振った後、さつと後ろにステップして妖怪達と距離を空けた。

「こいつ陰陽師でね……、こいつが……この一帯を治める牛鬼様を浚つていったんだよ。私たちの親的存在である牛鬼様をね……」

悔しさを噛み締めるように、顔に影を刻ませ、磯女は歯軋りを響かせた。

濡れ女もどこか冴えなく表情を曇らせていた。だが、そんな二人の様子を意に介する事無く、瑠璃は淡々と思つた事を口にした。

「あら、陰陽師！？ へえ、牛鬼なんかどうするんだろう？ 式にでも使うのかしら？」

「ふ…… まあ、だけど、話はこれまでだ……」

妖怪達が目に見えて殺氣立つ。その体から発する妖気に、瑠璃も凛と表情を引き締め、距離を保ちながら相手を睨みつける。

「あんたに恨みはないけど、牛鬼様を浚つた同じ陰陽師の一族、少しこそりさせてもらつよー。」

磯女は海の中に頭から勢い良く飛び込んだ。水面下に長い体躯がすっぽり治まるごと、顔だけだして瑠璃を睨みつけた。口から相変わらず細い蛇の舌のようなものが、忙しなく出入りしている。水際で突つ立っていた濡れ女だったが、磯女の殺気に刺激され、自らも長い髪を逆立たせて空に浮かせた。髪の一本一本が宙で蛇のように蠢いていた。その毛髪の先は研ぎ澄まされた、刃の先のように黒光りしていた。

「行くよー」

磯女は海の中でとぐろを巻いていた。尻尾の先の強靭な筋肉で海底を押し潰し、その反動を利用して、水中から空へ、水しづきを伴い高く飛び立つた。長い体は宙で弧を描き、瑠璃のいる場所へ頭から落下していく。白い尖った歯をむき出しにし、両の手の鋭い爪を瑠璃に向けて突き出していた。地上では濡れ女が髪を逆立たせたまま、砂埃をあげ突進してきている。

「ふふん……」

一匹が瑠璃の位置で交わる寸とした瞬間、瑠璃はふわりと後ろへ飛んだ。突然、的を失った一匹の妖怪は慌てた。磯女は咄嗟の機転で、片方の長い手を突き出し、左方に長い体を横倒して着地することで、濡れ女との接触を回避した。それを見て取り、濡れ女は急いで裸足の白い踵で砂浜を削りながらも、勢いを殺し立ち止まった。その間にも長い蛇の体は砂浜を滑っていく。落下したぶん勢いがついてすぐには止まれない。だが、蛇特有の全身のしなやかな筋肉を

巧みに使つて体勢を整え、片手をついて上半身を起こした。

「小娘～！？ どこへ消えた？」

妖怪達は瑠璃の姿を探していた。今の「いたご」で、砂埃が舞つて視界が白く濁つている。

「あんたたち、 とろいわね」

「何を！？」

砂埃の中、突然どこからか聞こえた瑠璃の言葉に、磯女はしゅくつと呼氣を吐き出し殺氣立つていた。

次第に砂煙が晴れて視界がはつきりし始める。妖怪達は目を細めながら辺りを探る。が、瑠璃の姿はどこにも見当たらなかつた。

「糞、どこ行きやがつた！？」

磯女が苛立たしげに大きな声を張り上げた。しかし、瑠璃の声は返つて来ない。そればかりか、妖怪達の殺氣だつた鋭敏な感覚を持つとしても、気配すら感じる事ができないでいた。

濡れ女は砂浜を裸足で駆け回り、右往左往して瑠璃の姿を探していた。

潮が満ちてきたのか、打ち寄せる波は浜を少しづつ侵食していた。妖怪達は散々瑠璃の姿を追い求め、辺りを散策したが、どうしても見つけることができない。もしや、逃げたのではという憶測も浮んで、二匹の緊張の糸は次第に張りを失い、砂浜に静寂さえ漂い始め

ていた。

「逃げたのか？」

憶測を磯女が口にした。

「そうかもね……なんか、馬鹿らしいし帰らつか……？」

濡れ女もやや呆れた様子で同調した。

砂浜に突き出した小岩に腰を下ろす濡れ女。逆立つた黒髪を一旦だらりと地に落して、どこからか出した赤い櫛で一本一本、丁寧に梳き始める。

ズ……ズ……

「なんだ……」の音は……？

「さあ……」

砂浜に長い体躯を横たえていた磯女が鎌首をもたげる。どこからか聞こえる奇怪な音に敏感に反応していた。濡れ女はそれに生返事をした。風か潮の音だと思い、気に留める様子もない。ただ、髪の手入れに没頭していた。

ズ……ズ……

しかし 先程からの不可解な音は、断続的に聞こえてくる。磯女はさすがに気になり始めて、細い漆黒の瞳を見開いて、辺りをなぞるように探し始めた。

ズ……ズ……

尚も不思議な音は途絶える事無く、寧ろ最初より幾分大きく響いていた。磯女は体を起こして更に神經を尖らせ、周りに緊迫した視線を運んでいく。濡れ女も異変に気づいたのか、髪を梳く櫛を懷にしまいこみ、一緒に奇怪な音の出所を探り始めた。

そのうち 磯女の黒い瞳が、突然、一箇所でぴたつと止まつた。

「おい……！」

磯女は濡れ女に声をかけると、顎先を振つてある場所を示唆した。

「ん……？ あ……」

濡れ女がその箇所に手を凝らすと、砂浜の中に一点、微かに隆起した場所があった。ただ、それだけだと何の変哲もない小さな砂山に過ぎない。だが、突起した砂山は微かに動いていた。その異変を濡れ女も捉えていた。

「フフン……そういうことが、濡れ女！」

磯女がにやりと悪意に満ちた笑みを濡れ女に向けると、その意を汲み取つたらしく、

「ヒーヒヒヒー！」

と、怖氣の走るような金切り声を濡れ女はあげた。すると、濡れ女の逆立たせた髪の先がピンと鋭さを増し、次の瞬間 恐ろしい速さで伸びて砂山に突き刺さつた。

「やまあみりー 小生意氣な陰陽師のガキば」の濡れ女が討ち取つたー。」「ふふふ……」

濡れ女が大口を開けて、勝利宣言を口にした。妖怪達は砂山の下に、十中八九瑠璃が潜んでいると確信していた。黒髪の鋭い刃が何本も砂山に突き刺さっている。髪の先にまで感覚をもつ濡れ女は、肉を貫いた手「たえを確かに感じていた。

「ふーしかし、殺しちまつたな……声を立てなことひを見ると即死だろうね……」「……」

濡れ女は頭を後方にふることで、刺さった黒髪を砂山から抜き取り元の長さに戻した。

「ま、仕方ないだろ、陰陽師と妖怪、戦えばどちらかが死ぬ、それくらいガキといえど覚悟はできてるだろうよ」

「うん……」

濡れ女は興奮が冷めぐると、一転して氣まずそつに俯いた。それを見て、磯女は戦いの厳しさを語る事で、正当性を示して慰めているようでもある。一匹は後味の悪そうな顔で、しばらく砂浜の盛り上がり眺めていた。

「まあ、やつちやつたものは仕方がない、牛鬼様のことも心配だし

取つあえず、海の底でこの後どうするか考えるか!」

磯女は元の姿に戻ると、海と一緒に帰ることを促す。

「まい、帰るよ

動じうとしない濡れ女の肩を触るが、どうも様子がおかしい。触れた肩の筋肉が、妙に強張つていて微かに震えていた。

「姉さん! ちょっとあれみて!」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4511e/>

JUSTICE BOY

2010年11月24日06時08分発行